

Fate/Zepia

黒山羊

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

間桐雁夜が呼び出したバーサーカー。

もしそれが『湖の騎士』ではなく『死徒二十七祖の十三位』だったら？

という妄想がベースの小説。

※この小説モドキは理不尽、シリアスに見せかけたギャグ、空気を読まない鬼畜戦術、限りなくチートに近い何か、トマトチーズ雑炊、麻婆豆腐、モロヘイヤスープ、バターピラフなどを原材料として含みます。アレルギーのある方は直ちに服用を中止し、医師の処方を受けても受けなくても構いません。

目次

4 days	AM 1:44	『英霊召喚』	1
4 days	AM 5:03	『雁夜起床』	3
4 days	AM 6:48	『開幕準備』	6
0 days	PM 8:50	『剣戟観劇』	8
0 days	PM 8:53	『従者暗闘』	12
0 days	PM 8:59	『騎兵乱入』	15
0 days	PM 9:00	『唾然茫然』	18
0 days	PM 9:06	『願望成就』	21
0 days	PM 9:10	『最悪最狂』	24
Interlude	①	『男二人の子守奮闘記』	27
0 days	PM 10:31	『願望談議』	29
0 days	PM 10:43	『起源覚醒』	33
Interlude	②	『殺人機械、故障する』	36
1 days	AM 0:07	『夜間外出』	39
1 days	AM 0:20	『魔人接触』	42
1 days	AM 0:24	『轢殺未遂』	44
1 days	AM 0:32	『神童開眼』	48
1 days	AM 1:12	『油断大敵』	52
1 days	AM 1:23	『八十面相』	56
Interlude	③	『ある日の遠坂と間桐』	59
Interlude	④	『桜の花嫁修業奮闘記』	62
1 days	AM 7:32	『怒髪衝天』	65
1 days	PM 5:38	『月下之鬼』	68
1 days	PM 5:42	『槍兵出陣』	72

+ 3 days	PM 6:03	『現状把握』	181
+ 3 days	PM 5:55	『状況適応』	176
+ 3 days	PM 5:49	『異状発生』	172
+ 3 days	PM 3:19	『災厄之兆』	168
+ 3 days	PM 0:00	『結界発動』	165
Interlude ⑨	『宴会翌日・槍弓side』	160	
Interlude ⑧	『宴の翌日・狂剣side』	155	
Interlude ⑦	『宴会騒動・英霊side』	148	
+ 2 days	PM 11:04	『邪神降誕』	144
+ 2 days	PM 7:00	『英傑之宴』	132
+ 2 days	PM 3:26	『出席準備』	126
+ 2 days	PM 2:12	『臥竜鳳雛』	122
Interlude ⑥	『ランチ・イン・泰山』	117	
Interlude ⑤	『ある意味、起源覚醒』	113	
+ 2 days	AM 7:03	『旧友会談』	110
+ 2 days	AM 5:05	『正義談義』	106
+ 2 days	AM 5:02	『雁夜演説』	103
+ 2 days	AM 4:57	『重大発表』	100
+ 1 days	PM 9:23	『同盟雑談』	96
+ 1 days	PM 8:54	『舞台撤収』	93
+ 1 days	PM 8:27	『外道遁走』	90
+ 1 days	PM 8:14	『三騎集結』	86
+ 1 days	PM 7:40	『双鬼共闘』	82
+ 1 days	PM 7:39	『危機一髪』	79
+ 1 days	PM 7:37	『戦状要約』	75

epilogue	『Fate/Zepia』	223
+ 4 days	PM 6:37 『喜劇終幕』	216
+ 4 days	PM 6:14 『固有結界』	211
+ 4 days	PM 6:13 『魔神起床』	205
+ 4 days	PM 6:03 『三大騎士』	201
+ 4 days	PM 6:01 『決戦開幕』	197
Interlude	⑩ 『青空に紅い雨が降る』	194
+ 3 days	PM 8:57 『衛宮切嗣』	188
+ 3 days	PM 8:35 『集団疎開』	185

サーヴァント「バーサーカー」の召喚。その儀式をまさしく身を削って成し遂げた青年、間桐雁夜は冷たい蟲蔵の床に這い蹲りながらも、狂気じみた笑みを浮かべていた。視線の先には魔法陣の中に立つ大柄な人影。霞む視界ではぼやけた輪郭しか捕らえられないが、肌を感じる尋常ならざる魔力の圧力はそれが人智を超えた英霊に他ならないと告げている。

彼は無事、サーヴァントを召喚して見せたのだ。

「……やった、これで、桜ちゃ……ん……を……」

自らの願い。自身の代わりに蟲に捧げられた哀れな少女を救い出すというそれに一步近づいた実感は雁夜の心を奮い立たせるものの、身体は刻印蟲に食い荒らされており限界に近い。

それでも薄れる意識にあらがうように雁夜は右手を自身のサーヴァントへと延ばす。叶うことなら、自分と桜を連れてどこかに逃げてくれと願いながら。

しかし、限界だった肉体は言葉を発する前にあっさり緊張の糸から離れ、今度こそ意識は深淵へと落ちる。……その最中、雁夜は誰かが「カット!!」と叫ぶのを聞いた気がした。

数分後、一つの影が夜の街を駆けていた。その肩に白髪青年と紫色の髪を持つ少女を担ぎ、人間離れした速度でもって屋根から屋根へと移動しているのはこの冬木の街で行われる「戦争」に参加するべく召喚に応じた英霊。

気絶間際の主からの言葉にならない願い。それは、雁夜が呼び出した英霊の下に間違いなく届いていた。故に、英霊は近くにいた老魔術師の魂を喰って現界分の魔力を捻出。

マスターと彼の姪を担いで屋敷を出るなり屋敷に火を放つと、住宅街を駆け、商店街を飛び越し、川にかかる橋を通って新都へと到達した。彼らを追う者は居ないが、万全を期し、裏道からマンホールに入って下水道に身を隠す。

そこまでして漸くマスターの命を果たしたと判断した英霊はその場に座る。

彼の腕の中には今にも死にそうなマスターと、幼い少女。彼は二人をコンクリートの通路に寝かせると、可能な限り現界に使用する魔力を抑え、その全てをあるスキルの発動へと回す。

そして彼は、自らのマスターへと「牙を突き立てた」。

---

#### 第四次聖杯戦争。

この物語はある英霊がその戦争に参加した所から始まる、ズレた歴史の物語。

水面に投じられた一石は今はまだ、小さな波紋を浮かべるのみ。

だがその波は確実にこの戦争を変えうる波。

その波が如何なる課程を経て、如何なる結果にたどり着くのか。

それはまだ、誰も知らない。

雁夜が目を覚ましたのは午前5時。いつものように腕時計のアラーム機能で目を覚ました彼は目を擦りながら伸びをする身体に僅かな疲労感こそ残るが、今朝は此処一年でも例を見ないほどに身体の調子がよい。その状態に若干の疑問を抱くが気にするほどでもない。と判断。水でも飲もうかと身体を起こしたところで、彼は此処が自宅ではなく、ホテルの一室であることに気がついた。

当然、混乱する雁夜だが、早朝の記憶が徐々に蘇るにつれて重要事項を思い出した。確か、昨日の深夜、サーヴァントの召喚をしたはずだ、と。

「……ツツ!? バーサーカー? バーサーカーはいるのか!？」

その声に応じるように彼の前に現れたのは長身の青年。金髪を肩まで伸ばし、深い紫色の西洋貴族じみた装束に身を包む彼が雁夜の呼び出した英霊、バーサーカーのサーヴァントらしい。

「お前が……バーサーカーなのか?」

「如何にも私はバーサーカーだ。最も、狂化のランクはE―にすぎないがね。……それよりも気分はどうかね、マスター? 私を召喚した際は死にかけていたが」

「……問題ない。……いや待て、狂化がE―ってどう言うことだ?」

疑問に対する肯定とともにさらりと告げられた言葉に、雁夜は更なる疑問を投げかける。そもそも、冷静に考えれば バーサーカーが会話している時点で異常事態なのだ。

「どう言うことかと問われても台詞のままなのだが。私の狂化ランクはE―。興奮すれば言動が狂うが、平常時は何のことはない並の英霊だよ」

「……ステータス強化は?」

「当然だが、無いな」

その回答に、雁夜は目に見えて落ち込む。そもそもバーサーカーを呼び出した理由が狂化によるステータス強化だと言うのに、それが無ければ全く意味がない。燃費が良いのは嬉しいが、弱くてはプラスマ



イナスでマイナスだ。

だが、そんな雁夜にバーサーカーは平然とある一言を付け足した。「まあ、そう落ち込むなマスター。狂化によるステータス強化が無くとも私のステータスは概ねA以上だ。それに私は知能関連のスキルを四つ保有している。それらが使用可能な今ならば私は下手に狂化した私より強いと保証しよう」

「……確かに、知恵が回る英霊なら下手に狂化しても不利になるだけか」

「そうとも。……ああそうだ知恵が回ると言えば、昨日マスターの屋敷を抜け出す際に直感が発動してな。何となく其処の少女を連れてきてしまったが、マズかったかね？」

そう言つてバーサーカーが示した場所、雁夜が眠るベッドと隣り合うベッドに眠るのは遠坂家から養女としてやってきた雁夜の姪、間桐桜だった。バーサーカーが彼女を連れてきたのは雁夜にとって僥倖とすら言える。

「……いや、むしろ助かったよ。だけど、臓硯のジジイはどうしたんだ？ 桜を黙つて連れ出されるほどジジイはボケてないぞ」

「ジジイ？ ……ああ、あの老魔術師かね。アレなら喰つてしまったが……」

沈黙。バーサーカーの答えに対して、雁夜が行えたのはポカンと口を開けてその言葉を頭の中で反芻するのみ。

「……喰つた？ あの吸血ジジイを？」

「ああ。君が死にかけていたのにニヤニヤ笑っていた、味方とは思えぬ蟲妖怪だったからね。丁度魔力も欲しかったから魂喰いをした」  
「そうか……」

蟲妖怪間桐臓硯にしては呆気ない死。それを鵜呑みには出来ないが、バーサーカーの言っていることが確かなら生きているとしても魂の一部を喰われた以上、暫くは動けまい。朝から身体の調子がよいのも、体内の蟲が大人しいからだと仮定すれば、確かに臓硯は死んだか、瀕死かのどちらかなのだろう。

そんな風に雁夜が情報を纏め、反芻していると、バーサーカーが何

か思い出したように口を開いた。

「吸血ジジイと聞いて思い出したよ。うっかり失念するところだった。マスター、君は現在、死徒化している」

「……はあっ!?!」

まるで「昨日の夕飯は何だったか」を思い出したように呟いたその内容。しかしそれは三流魔術師の雁夜でさえ知っている人類の上位存在。

死徒。

不死身に近い耐久力と、化け物としか言えない怪力、人外の魔力を持ち、人の生き血を啜る吸血鬼。あの間桐臓硯すら死徒に比べれば弱い存在と言えるほど死徒というのはかなりの化け物なのだ。

「俺が死徒ってどう言うことだよ!?!」

「まあ、不可抗力と言うべきか……輸送中に君が一時的に心停止したのでね。すぐに持ち直したとは言え、死なれては私が困る。慌てて下水道に隠れ、君に私の血液を注入したのだよ」

「お前の血液……?」

雁夜の疑問にバーサーカーは薄く微笑むと言葉を紡ぐ。

「私はズエピア。ズエピア・エルトナム・オベローン。元死徒二十七祖十三位にして元アトラス院院長。この度狂戦士の配役を得て現界したサーヴァントだよ」

起床から約二時間。怒涛の新情報に軽い頭痛を感じながらも、雁夜はズエピアからより詳細な情報を聞き出し、病院から盗んできた輸血パックの中身を飲みつつ2人で今後の聖杯戦争をどう戦うべきかと相談を重ねていた。

だがしかし。どうやら頭痛の種はまだあつたらしい。

「……と言うわけで、私は宝具を持っていないし、魔術も使えない。だが、戦闘には問題ないだろう」

「……おい、本当に英霊なのかお前」

雁夜の懸念は至極真つ当なものである。なにしろこのサーヴァントは、「敵は全部素手で殺す」とほざいているのだから。お前のような英霊がいるか、と思ってしまうた雁夜を責められるものは居るまい。

しかも、雁夜がいくら調べてもこの英霊に対する資料は無いのだから不安も一塩である。

「まあ、調べても名前がないのは仕方あるまい。私は少々特殊だからね。それに、私は宝具なしでも問題無いと言っているだろう？ 元々所有している物が無くなったなら弱体化するだろうが、元々持っていないのだから弱体化するはずがない。それにスキルは多く持っているではないか」

「確かにお前のステータスは化け物だけど……はあ、もういい。で、今日はどうするんだよ」

これ以上の問答をしても意味がないと考え、雁夜は話を切り換える。宝具による超能力じみた攻撃がない以上、相手をいかに此方で補足するかが鍵となるはずだ。

「ふむ。それなのだがマスター。此処は二手に分かれないか？」

「二手に？」

「ああ。私が君と行動を共にすれば間違い無く君が邪魔で全力を出せないという自信がある」

「……攻撃に巻き込むかもしれないって事か」

「その通り。それにマスターにはお姫様を守るナイトと、街中を見る

眼という2つの配役が用意してあるのだよ」

要するに、ズエピアが街で大暴れして、雁夜は桜と一緒にどこかに引きこもりつつ、大量の蟲で街全体を見回す作戦。

確かに一見効率的ではあるが、雁夜は幾つか引つかかる点があった。

「……引きこもるにしても、何処に引きこもるつもりだ？ 下手なところに隠れてもすぐに発見されるぞ？ この冬木の街に安全な隠れ家なんて……」

「あるではないか。地下に」

「地下？ 地下ってお前、まさか蟲蔵に隠れろって言うのか!？」

地下と聞き、蟲蔵を連想した雁夜に、ズエピアはいやいや、と首を振り答える。

「マスターに隠れて貰うのは下水道だ。昨日一回入ったが、存外広いぞ彼処は。幾つか拠点に出来そうな横穴も見つけてある」「下水道……?」

「そうだ。オペラ座の怪人になったつもりで隠れて居たまえ。ああ、そう言えば顔面はすっかり壊死しているから仮面さえ被れば本物に成れるな」

何やら嬉しそうな声でそう言うズエピアに雁夜はため息を吐きながらも、一応納得していた。確かに下水道にプライドが高い魔術師達が潜ってくるとは思えない。

「おい、笑ってる場合か。引きこもるのは良いが、準備があるだろう」「確かに。で、何を用意するのだね?」

「テントとか生活用品とかいるだろ!？」

その回答がツボにハマったらしいズエピアが再度クスクスと笑い始め、プチンと来た雁夜が吼える。

その日はその声で目を覚ました桜を連れて三人で一日中買い物にひた走る一日となったのは言うまでもなく。

バーサーカー陣営の聖杯戦争は、騒々しく開幕を迎えたのだった。

未明、遠坂邸に侵入しようとしたアサシンがアーチャーに返り討ちにされ、序盤からサーヴァントが脱落するという波乱の幕開けでもって始まった第四次聖杯戦争。

ズエピアは雁夜からの情報を聞いて『アーチャーが気配遮断中のアサシンに先制攻撃した』という点が気になったものの、ひとまず保留。現在時刻は午後8時。強大な魔力が挑発するように移動しているのを発見したズエピアは、可能な限り気配を抑えてその気配を逃さない程度に追う。

気配はやがて倉庫街で停止したが、すぐに飛び出すようなことはせず、コンテナの陰を縫って近づく。どうやらズエピア以外に追跡していた者があるらしく、もう一つ澄んだ硝子のような闘気の主が既に到着しているらしい。その気配に一段と警戒を強めつつ接近すると、遂に視界に2人の英霊が現れた。

二振りの長物を持つ美貌の男と、青のドレスに似た鎧を纏う可愛らしい姫騎士。最大の注意をその2人に向けつつも周囲の警戒は緩める事無く、ズエピアは念話を使いマスターと連絡を取る。

『マスター、私と感覚共有はしているかね?』

『ん? ズエピアか。何だ唐突に』

『ランサーと、セイバー或いはライダーと思しき英霊とそのマスターらしき人物を発見した。恐らく戦闘するのだろう。マスターも観客席に居て欲しいのだが』

『……そういうことなら使い魔を向けよう。別の角度から見ないと判らないこともあるだろうし』

『了解した。舞台は海浜倉庫街。もう暫くすれば幕が上がるだろう』  
『分かった』

これで、情報の共有は問題ない。後はあの2人がどういう戦いをするのかなが……。

「よくぞ来た。今日一日この街を練り歩いて過ごしたものの、どいつもこいつも穴熊を決め込む腰抜けばかり。俺の誘いに応じた猛者はお前だけだ」

そう言つて、ランサーは姫騎士へと不敵な笑みをを向ける。

「その清澄な闘気、セイバーとお見受けするが、如何に？」

その問いに答える姫騎士もまた、似たような笑みを浮かべていた。

「如何にも。そういうお前はランサーに相違ないな？」

そうして両名は幾らかの会話の後、戦闘を開始した。

『バーサーカー、あのセイバーは何も持っていないように見えるんだが』『ふむ、さながら不可視の剣といった所か。どうやら魔力で空気を操り、剣の周りに暴風を凝縮させて蜃気楼のような状態を作っているらしい。ああまでして隠すからにはあの剣は余程有名な物か、余程奇抜な形なのだろうな』

『有名は判るけど、奇抜？』

『例えば長さが槍並だとか、鎌のように湾曲しているとか、三節棍の様に自由に刃が曲げられるといった場合には、その剣身が見えないのはかなりの脅威だろう？』

『ああ、成る程』

そんな会話を繰り返すバーサーカー陣営。彼らはまあ、概ね綺麗に役割を分担していた。戦場に直接赴き詳細な分析を担当するズエピアと複数の使い魔で全体を俯瞰しズエピアからの情報を元に資料を調べる雁夜。

戦闘時は狂化の影響で思考内容が混沌と化すズエピアと、魔術師としては三流で死徒としては赤ん坊な雁夜にはこれしか戦う手段がない。直接戦闘は最後の手段だと考えた彼等は、ある意味魔術師に対する冒涇と言える方法でこの戦争に挑む。この点、ズエピアが魔術師ではなく錬金術師であったのは実に僥倖と言えよう。科学にも理解が

ある彼だからこそこの作戦に反対する事無く諸手を挙げて賛成してくれたのだ。

それは、インターネット検索による英霊の真名看破、及び対マスター用の武器としては手軽で強力な科学兵器の使用である。召喚からの数日間、ズエピアと雁夜はほぼ毎日大工仕事をしていた。間桐邸から下水道までインターネット回線を引っ張ったり、爆弾やら何やらを作ったり。

素人の自作した科学兵器、それだけならばさしたる驚異ではない。しかし、雁夜は三流ながらに間桐の魔術師なのだ。

簡単な術式で性能を強化したそれは一応魔術的アイテムとして使用できる。当然、ズエピアも今幾つか戦場に持ち込んでいるし、雁夜の蟲にソレを括り付けた「自走爆弾」や「特攻爆弾」も開発済み。下水道は既にトラップで溢れるちよつとした要塞になっている。

そう、バーサーカー陣営はこの戦争に科学と魔術によるゲリラ戦で挑もうとしているのだった。

『バーサーカー、取り敢えず「美形 二本の槍 英雄」で調べたら候補が出てきた』

『ふむ、流石は記者をしていただけの事はある。しかしながら便利な物だね、インターネットというものは』

『偽情報も多いけどな。でも複数のサイトで裏を取った。そのランサーが本当に二本の槍を使うならケルトの英雄「デイルムツド・オデйна」だと思う。まあ、片方がフェイクで本当は一本槍の達人かも知れないけどね』

『成る程、参考にしよう。最も、あの手合いは真剣勝負に興奮して名乗る事がままある。いずれ真名の裏付けも取れよう』

『そう言いながら、周囲を索敵していたズエピアは、風に乗って煙草の匂いが流れて来るのに気付いた。』

サーヴァントであるか無いか以前に、吸血鬼は鼻が利く。ニンニクの匂いが吸血鬼に効果的だという伝説はその嗅覚を端的に言い表していると言えよう。そんな吸血鬼が煙草の匂いに気付かないわけが

ない。

『マスター、風下に陣取ったのは正解だったらしい。煙草の匂いがする。仄かに石鹼の匂いもするから風呂に入って匂いを誤魔化してはいるらしいが、まさか犬並に鼻が利くサーヴァントがいるとは思わなかったのだろう』

『魔術師か?』

『其処までは判らないが、煙草の匂いと石鹼の匂いを付けた者と石鹼の匂いだけの者の2人組と後、今気付いたが香水を付けた馬鹿な男が居るらしい』

『……お前にはリーダーでも着いてるのか? 性別まで判るか普通?』

雁夜の問いにズエピアは若干口ごもりつつ答える。

『その……香水に混じって若干鳥賊みたいな臭いがだね……』

その内容を聞いた雁夜もまた、口ごもりつつズエピアに指示を出す。

『……ああ、よく判った。……取り敢えずセイバーとランサーは俺が見とくからその三つの臭いの主に注意しといてくれ』

セイバーとランサーがヒートアップするなか、バーサーカー陣営は何とも言えない空気を漂わせて、倉庫街をみはりつつけるのだった。



セイバーとランサーの決闘が続く海浜倉庫街。コンテナの陰には未だにズエピアが潜み、匂いの元を探っている。

さて、そのズエピア。彼は昼に街を歩いていたままの格好である。ワイシャツにジーンズというシンプルな格好の彼は、肩から下げたメツセンジャーバッグの蓋を開け、中から分解された銃らしきものを取り出して器用に組み立てる。

雁夜とズエピアが用意した武装の一つ、違法レベルまで改造し、金属製の4・5ミリベアリング球をBB弾代わりに装填した「殺傷仕様」の電動ガン。魔術師による強化と、とある「工夫」がなされたそれは、人間に対する武器としてはかなりのものと言える。それを手に、ズエピアはそろそろと匂いの主に向かって移動を始めた。

まずは一番近い「石鹸」を狙い、「煙草」と「香水」は後回しにする。そう判断し、気配を消したまま、セイバー達からは死角になる位置まで移動すると跳躍。匂いと距離を一気に詰めると、視界に見えた「石鹸」と思しき人影に向けて躊躇無く発砲した。

久宇舞弥が襲撃を受けたのは切嗣の命令で配置に着いた直後だった。

連続的な発射音と共に飛来した物質は舞弥の背に直撃。肉に細かな金属がめり込む痛み顔に顔をしかめつつ素早く振り返り舞弥はステアーを撃つ。

しかし、その弾丸は姿勢の不安定さからかコンテナを直撃。その火花に一瞬照らされた金髪は驚異的な加速でもって舞弥に接近して来る。その手に持つのは、フランス製のアサルトライフルF A | M A S。銃器というこの戦争に置いてまず見かけないだろうと予想していた物体を見て一瞬動揺したのが、舞弥の運命を決めた。およそ人間には不可能なスピードで飛来した相手は舞弥の首に手を掛け、万力のような力で締め上げてくる。

「ぐっ……あ………」

「ふむ。此処まで危機に陥ってサーヴァントが飛んでこない辺り、マスターではないらしいな。ならば、暫く寝ていたまえ」

その声の直後、一層強くなる締め付けに意識を奪われていく舞弥が見たのは、自らに迫る金色の髪だった。

思わぬ収穫を得たズエピアは一旦先程とは別のコンテナの陰に潜み直していた。先程は膂力に任せた突撃で瞬間的に無力化出来たが、まさか銃器で武装しているとは。これは、一度雁夜に連絡する必要があるだろう。流石に「対策」はしたとはいえ、このまま放置するのは不安である。

『雁夜、事情が変わった』

『どうしたんだバーサーカー？ セイバーとランサーに気付かれたか？』

『いや、流石にそこまでのミスはしていないが、相手マスターへの警戒を強める必要がある』

『……続けてくれ』

『相手マスターの中に、近代兵器を使う者がいるらしい。先程遭遇した女性が雁夜がインターネットで見せてくれたライフル………：確か、ステアーAUGだったか？ あれの本物を持っていた』

『………一応予想はしてたが、現実であって欲しくはなかったな。で、殺したのか？』

そう言う雁夜の声は意外にも冷静だ。それはなぜか？

一言で言えば雁夜は自分に『自信がない』。だがそれは逆に分をわかまえて居るとも言える。故に『自分に思い付くようなことは他人ならもっと先に思いついている』という若干ネガティブな予測を立てていたのだ。今回はその不安がプラスに働いたらしい。

『いや、殺してはいない。プランBで行こう』

『ああ、なる程。……確かにプランB発動を確認したよ。これで、近代兵器で武装した陣営が何処か分かればいいんだがな』

『ふむ、マスターが板に付いてきたなマスター。……ならば私もそろそろサーヴァントらしい事をしようではないか。雁夜、私の装備と戦利品を海浜倉庫街のマンホール「D」に入れておく。回収しておいてくれたまえ』

『わかった。頑張れよズエピア』

『パトロンの応援を得たからには、期待に答えるのが役者の務め。……任せておきたまえマスター。機会を見て突入する』

そう答えたズエピアは薄い笑みを浮かべ、ぽつりと呟く。

「さあ、開幕と行こう」

さて、ズエピアが荷物をマンホールに隠し、乱入の機会を伺っている頃。

倉庫街で戦う二人の英霊はお互いの宝具と真名を晒し、お互い手負いながらも充実した闘気を纏い、戦いを楽しんでいた。  
が。

次の瞬間、爆音と共に雷光が迸り、一台の戦車が倉庫街に降り立った。赤い髪とヒゲを持つ戦車の主は呆然とする2人を前に吼える。

「我が名は征服王イスカンドル!!此度の聖杯戦争においてはライダーのクラスを得て現界した!!」

だが、その名乗りに茶々を入れる者がまた一人。

「ふむ。一騎打ちを台無しにしたのは問題だが、自分から名乗るとは中々にキヤラクターが立っている。やはりトリックスターは奇天烈でなくてはなるまい。その点君は中々だよイスカンドル。最も、マンネリズムと化したデウス・エクス・マキナに成りかねない点も持ち合わせているが」

そう。バーサーカーこと、ズエピア・エルトナム・オベローンである。

「……なんだか小難しい奴が出て来たのう。誰だお主は?」

「誰に見えるかね?」

質問に質問で返すズエピアとそれを聞いて「ううむ、謎掛けときたか」と何やら楽しそうなイスカンドル。そんな彼等を眺めていたセイバーとランサーは漸く機能を復活させ、質問を投げかける。

「先に名乗った心意気にはまあ感服せんではないが……何をしに来た征服王。理由もなく一騎打ちに水を差したとなれば、ただでは置かんどぞ」

「そう急ぐでないランサー。なに、簡単な事よ」

そう言っただけでイスカンドルは一息入れると簡潔に言い放った。

「ひとつ我が軍門に降り聖杯を余に譲る気はないか? さすれば余は貴様らを朋友として遇し、世界を制する快悦を共に分かち合う所存で

ある」

「ふむ、やはり君は底抜けに馬鹿だな。いやなに、君を貶すわけではないとも。喜びたまえ、二人の騎士に『明らかな侮辱を投げかける』という君の身体を張ったボケに観客席は爆笑に包まれること間違い無しだ」

「……良く舌が回るのうお主」

「またもや入ったワラキアの茶々にげんなりするイスカンドル。彼にセイバーとランサーは暫くの沈黙の後言葉を返す。」

「……俺の内心は既に彼が代弁して居るようだが、その提案は承諾しかねる。俺が聖杯を捧げるのは今生にて誓いを交わした新たな君主ただ一人だけ。断じて貴様ではないぞライダー」

「そもそも、そんな戯れ言を述べ立てるために貴様は私とランサーの勝負を邪魔立てしたと言うのか？ 戯れ言が過ぎるぞ」

「怒り心頭と言った様子の子のセイバーとランサー。彼らの気迫に流石の制服王も、懲りるかと思いきや。」

「待遇は応相談だが？」

「くどい！」

「とアホな言葉によって二人からの総ツツコミを受けていた。」

「実に愉快的な喜劇だが、少々この愚昧に台詞を戴きたい」

「其処に、またもや茶々を入れるのは矢張りズエピア。だが今回は先程のおどけた様子を一切消して三人の英霊とアインツベルンのマスターに向き直る。」

「その姿に、セイバーとランサーは渋々その切っ先を下げ、ライダーは興味津々と言った様に向き直る。」

「さて、実は私の目的はイスカンドルと似てはいるが、その内容は少々異なる。だが、此処は彼の敷いた道を利用させていただくでしょう」

「そう言うズエピアはマントをはためかせ優雅に一礼し、セリフを言い放つ。」

「我が名はズエピア・エルトナム・オベローン。この度、狂戦士の配役を得て壇上に立つことに相成った。さて、今回此処に登場したのは他でもない諸君に提案が在つての事」

一拍。身振り手振りとその話し方は確実に周囲の目を彼に向け、その間が次の内容を聞き逃すまいとする皆の耳を一層研ぎ澄ませる。そしてズエピアは、この戦争において恐らく過去類を見ない言葉を紡ぐ。

「聖杯を得た暁には諸君とそのマスターに差し上げる故、誰か同盟を組まないかね？」

茫然。ズエピアの台詞を聞いた後の英霊達の反応はまさしくそれだった。理由は2つ。彼の提案の真意を凶りかねたのと、彼の真名に聞き覚えが無かったからである。

しかし、この空間を見つめるマスター達の反応は異なる。その顔は苦虫を噛み潰した様に歪み、早急に相手に対してどう対応するべきか考え始めていた。

そんな自分の「マスター」の様子に、セイバーは疑問を投げかける。「アイリスフィール、あのサーヴァントを知って居るのですか？」

その質問に、アイリスフィールは表情を曇らせたまま答える。

「……ええ、彼は魔術師の間では有名なもの。元、アトラス院長で死徒27祖の先代13位、『狂人』ズエピア。……鍊金術を嗜む者としては出逢えたことを喜ぶべきかしら。個人的には会いたくないタイプの敵なのだけれど……」

そう口ごもるアイリスフィールの言葉を引き継いだのは今まで戦車の中でうずくまっていたウェイバー・ベルベット。彼は先程名乗りやがった自分のサーヴァント、つまりライダーに愚痴の一つでも言おうとしていたのだが、今はそんな事もすっかり忘れ、怯えたように叫ぶ。

「コイツ、ステータスがおかしいっ!？」

いきなり叫んだ自分のマスターをイスカンドルはヒョイとつまみ上げ、質問する。

「坊主、もうちつと具体的に言え。何がどうおかしいのだ？」

「コイツ、コイツの幸運と魔力以外が全部A++なんだよ!!」

「……ふむ。A++とやらは、大体どれほどの物なのだ」

全く動じない自分のサーヴァントを見て落ち着いたのか、ウェイバーは溜め息を吐くとライダーにより分かり易く説明してやる事にした。

「はあ……。お前6人分の馬鹿力とお前の3倍の頑丈さ、其処のランサーの1.5倍の速さを持つてる。判ったか？」

その答えにイスカンドルは一瞬目を見開くが、次の瞬間。爆笑を始めた。その姿にウェイバーの溜め息が増加したことは、言うまでもあるまい。

ウェイバーが叫ぶのとほぼ同時刻。衛宮切嗣は自分も叫びたいような気分だった。セイバーはランサーの魔槍による不治の傷に必殺技を封じられ、現在ランサーと何とか拮抗する事しかできない。当然先程のライダーの宝具らしき戦車に対抗出来るだけの余力は無いだろう。

そんな中チラリと見たズエピアのステータスは、切嗣をして戦慄を禁じ得ないモノだった。

……ナンダ、アレハ。

そんな風に、一瞬思考をフリーズさせてしまった切嗣を誰も責められまい。それ程にそのステータスは絶大だった。一体、どれほどの英霊がどれほどの魔力供給を得れば、あんな化け物が生まれるのか。

そんな中、彼は更なるマイナス要素に直面する羽目となる。

「舞弥、其方からバーサーカーのマスターを視認出来るか？」

そう投げ掛けた言葉に応答はない。それはつまり。

「……くそつ、舞弥に何かあったか。……最悪だ」

実のところ、切嗣は既にランサーのマスターを発見していた。サーモカメラ。映像化した温度を見る装置であり、体温を偽装していなかったランサーのマスターはあっさりこれで見つかっている。だが、切嗣には狙撃できない理由があった。

「アサシンさえいなければッ……！」

切嗣がチラリと見たのは倉庫街を一望出来るデリッククレーンの上。其処に、『脱落したはずのアサシン』がいる。

切嗣はとびきりの苦い顔をして唇を噛み、爆笑するライダーへと視線を向ける。

今夜はキリの良いところで撤退しよう。



そう判断した切嗣はまだ知らない。この後、戦場がよりカオスに近づく事を。

煤けた背中の切嗣の背後で『今日の運勢最下位は蠍座のアナタ！今日は夜中になれば成る程ろくな事がありません。ラッキーアイテムは枕です』などと書いた新聞が風に巻かれて飛んで行った。

さて、視点は再びサーヴァント達に戻る。

ライダーは未だに「ガツハツハ」と笑って居るが、騎士二人は余りに理不尽な力を前に笑うことなど出来るはずもなく。その内の一人、セイバーはふと抱いた疑問を口にする。

「バーサーカー、貴様、聖杯に掛ける願いが無いと？」

至極当然の疑問。聖杯によって現世に招かれた以上、全ての英霊は何か願いがあつて現界したはずだ。それが無いとは言わせない。そんな意志を瞳に込めズエピアを見据えるセイバー。

しかし、彼は静かに首を振る。

「セイバー。全ての英霊が聖杯を望む訳ではないのだよ」

「……どういう意味だ」

「そうだね、では問おう。自分が聖杯を手にしたいが為にこの聖杯戦に挑んだ者は手を挙げたまえ」

彼の問いの意味がよく判らぬまま、セイバーは剣を持たぬ左手を挙げ、続いて、ライダーも手を掲げる。が。

「なっ……!?!」

セイバーはまさしく驚愕していた。彼女は当然ズエピアを除く全員が手を挙げると考えて居たからだ。

「どういう事だランサー!?! 貴公もまた聖杯に掛ける願いや無いと言うのか!?! 何の願いや持ち合わせぬと!?!」

その問いに答えたのは、ランサーではなくズエピアだった。

「それは違うよセイバー。私達の様な英霊は既に願いが叶っているのだ」

「……は？」

思わず間拔けな声を上げるセイバー。そのセイバーにフツと笑いつつランサーが告げる。

「セイバー。俺が掛ける願いは唯一つ。生前叶わなかった『主への忠義を貫く騎士となる』事だ。我が主が望む以上、聖杯は必ずや手に入る。しかし、それに掛ける願いは最早無いのだ。そこの狂っていない

い狂人の何が叶っているかは知らんが、確かに俺達のような英霊は聖杯ではなく『聖杯戦争に』願いがあつて現界したのだ」

ランサーの言葉に、セイバーは漸く意味を理解した。その上で再度問う。ズエピアの、その叶った願いとは何なのかと。

「私の願いは……。む、すまないセイバー君。少し待ちたまえ」

ズエピアはそれに答えようと口を開いたが、その言葉を言わず、何かに気付いたように姿を変える。ワイシャツにジーンズという現代風の姿から、貴族然としたマントを羽織る姿へと一瞬で変身した彼は一瞬その「深紅の目」を開いて叫ぶ。

「カット!! 私の舞台に立ち見席は無いぞアーチャー!!」

そう叫ぶなり、隣にあつたコンテナを「片手で掴んで」近くの街灯に向け投げ飛ばした。音速を越え、一瞬にして大気の摩擦により赤熱したコンテナはしかし、突如飛来した無数の『宝具』によつて消し飛ばされる。

コンテナの残骸が土煙を上げて地面に落下するが、その煙も吹き抜ける海風によつてすぐに晴れる。

その中に黄金が居た。

アーチャー。遠坂邸の一件でこの戦争の火蓋を切つて落とした、ズエピアとは真逆のサーヴァント。身体能力を突き詰めた様な存在であるズエピアと、大量の宝具を誇るアーチャーはどちらも規格外であるという一点においては同一と言えるだろう。

その二人は今、片やこめかみに血管を立て、相手を射殺さんばかりに睨み、片や平然と微笑んでいる。前者がアーチャーで後者がズエピアなのは言うまでもない。アーチャーの放つ殺気は尋常なモノではなく、セイバーやランサーは反射的に各々の武器を構えている。それに対して微笑むズエピアはやはり、『狂戦士』なのだろう。

「王たる我を差し置いて王を名乗る雑種共も赦し難いが、我に路傍の石を投げつけるとはどうやら死にたいらしいな、吸血鬼」

大層御立腹なアーチャーに対して、ズエピアは一言言い返す。

「ふむ。君の国の法では『同罪同罰までしか認めない』ではなかったかね、アーチャー。いや、ギルガメッシュ王」

ズエピアの本日二回目の意味不明発言に、再び場の空気が固まったのは言うまでもない。

その中で、ライダーだけが再び「ガツハツハ」と笑っていた。

凍り付いた空気。それを破ったのは、憤怒の形相から一転、挑発的な笑みを見せたアーチャー。彼は器用に街灯の上にたったまま、ズエピアに声を掛ける。

「我が真名を識るか吸血鬼。……フツ、成る程な。その知恵に免じて先程の無礼は赦す、そんな雑種と話を続けろ」

「ふむ、恩赦を戴き感謝感激の極みだよギルガメツシュ王。さて、セイバー君、私の願いだが……」

話しを続けろと言うアーチャーとその言葉通りに話しを続けようとするズエピア。彼等は至極当然といった風に行動しているが、その行動に理解が追い付いていない者も当然存在する。例えば、現状がサッパリ判らないのに2人に声を掛けられたセイバーとか。

「待ってくれバーサーカー、出来れば先に何故アーチャーの真名がわかったのか教えてほしい」

「ふむ、少々セイバー君には難しかったか。仕方ない、教鞭など久しく執っていないが、授業といこう」

そう言うズエピアは既にワイシャツとジーンズに戻っており、近くのコンテナを爪で切って教鞭らしき物を作るとペシリと音を鳴らした。未だにニヤニヤと笑っているのが締まらないため玉に瑕だが、なかなか教師が板に付いている。

「さて、まずは彼、ギルガメツシュの最初の戦闘についての解説から始めよう。まあ最初に結論から言っておくと、ギルガメツシュのマスターは阿呆と言えるだろうね。まあ、魔術師なんて殆ど阿呆か馬鹿しかいないのだが」

身も蓋も容赦も無いズエピアの断言に、ギルガメツシュは自分のマスターが貶されたというのに声を上げて笑い、セイバーは疑問を投げける。

「どういう意味だバーサーカー?」

「それは今から説明しよう。さて、彼、ギルガメツシュのマスターこと遠坂時臣は五つのミスを犯している。まず一つ、アサシンは実体化し

たとはいえ、気配遮断スキルは健在。にもかかわらず、アーチャーが一瞬で察知、撃滅した点」

セイバーはその指摘に概ね納得するが、気になった事を指摘する。「それだけでは、遠坂とやらがアーチャーに偶々周囲の警戒を命じていただけかもしれないではないか」

「そうだね。だが二つめ、弟子が師匠を殺すならわざわざ敵対した挙げ句出奔するなどせずに弟子のままに居て師匠が油断した際に遅効性の毒を飲ませる方が楽な点。この二つに思い至った時、私はまず、第一戦が『八百長試合』ではないかと考えた。これは、遠坂時臣がアサシンを撃滅したにも関わらず、冬木教会に逃げ込む前に言峰綺礼を抹殺しようとする素振りも見せなかった事から明らかだ」

「バーサーカー、それは遠坂が逃げる相手の背を斬りつけるを良しとしなかったからではないのでしょうか？」

「確かにセイバー君やランサー君のような騎士ならばそうはすまい。だが、遠坂時臣は魔術師だ。そうだな……マーリンに魔術師としては二流な弟子が居たとしよう。その不出来な弟子がマーリンを殺そうとしてタダで済むと思うかね？」

「成る程、よく判りました。マーリンならば逃げる隙も与えず殺してしまうでしょうが、遠坂にその素振りすらないのはおかしいと言うわけですか」

「その通り。では、ギルガメッシュの真名に繋がる残り三つを一気に挙げてしまおう。科学を舐め過ぎな点、見せつけるように使い魔が侵入するのを許容した点、アーチャーに一撃でしとめるように言わなかった点の三つだ」

「ふむふむ」

いつの間にやら、ズエピアの授業はセイバーだけでなく、ライダー、ランサー、アーチャー、アイリスフィールとウェイバーも耳を傾けるモノとなっているが、ズエピアは気負うことなくペラペラと口を動かす。

「さて、まず科学と使い魔から行こう。コレは単純な話なのだが、一部始終を小型カメラを付けた複数の使い魔に撮影させ、ギルガメッシュ

の宝具、行動などを完璧に記録しただけだ。そしてそれを分析し、思考実験などを行った。次のアーチャーに一撃でしとめるように言わなかった点は分かり易いだろうか？」

「……大量の宝具を見たからか？」

「その通り。そして、私の考えだが。まず、大量の宝具を持つであろう英霊をあらゆる伝承から抽出した。次にその顔立ちから西洋人だと当たりを付け、その次に数ある中からプライドが高く傲慢な英雄を絞り込み、更にその他100回の絞り込みを経た結果、アーチャーはギルガメツシユ王に違いないと読んだわけだ」

そう言ってペシリとズエピアは教鞭を振り、次の話題へと移る。「さて、いい加減私の願いを話そう。私の願いは受肉だ。」

一切気負う事無く放たれたその言葉は、常識的に考えて到底聖杯無しで叶ったとは信じがたく。されどアーチャーは実に愉快だと言わんばかりに笑ってズエピアへと声を掛ける。

「気に入ったぞ吸血鬼。貴様、道化として我に仕える事を赦す。有り難く思え」

「ふむ、それは幸甚の極み。此方も同盟相手が欲しかったのだよ」

此処に、聖杯戦争史上最悪最狂の同盟が成立した。

——運命の歯車は狂い、喜劇は紡がれる。

Interlude ① 『男二人の子守奮闘記』

さて、時刻はアサシンの偽装退場から5時間後、朝7時35分。  
現在、ズエピアと桜は商店街「マウント深山」へと買い物に来ていた。

「兄さん、何かお探しで？」

「ふむ、店主殿。モロヘイヤとニンニクはあるかね？」

「うちにねえ野菜はねえさ。モロヘイヤ2束とニンニク一袋で230円だ」

「ふむ、ではコレで」

「毎度あり」

ズエピアはそんな会話をして小銭を払い、八百屋を出る。

何故、このような事態になっているのかと言えば、昨日の夜の会話が原因といえよう。

「なあバーサーカー。桜ちゃんのリハビリをそろそろしようと思うんだが何か良い案はないか？」「リハビリ？」

「桜ちゃんの精神は今、臓硯の拷問で凍り付いてる。それを何とかしたいんだ」

そんな雁夜の発言に、ズエピアは柔らかな笑みを浮かべて雁夜を見る。その顔が妙にくすぐったく感じ、雁夜は頬を掻きつつズエピアに文句を言う。

「なんだよ、その顔は」

「いやなに、私の息子、もといマスターはつくづく優しい男だと思ってね。リハビリについてなら、任せておきたまえ。エルトナム家は本来、心や精神から魂を研究するのが家業だったのだよ」

ズエピアはクスリと笑い、雁夜にアドバイスを与える。ズエピアは確かに死徒的な意味では雁夜と親子。親の優しい視線を感じた事がない雁夜としては何とも奇妙な気分になったのは致し方あるまい。

「まずは、五感を刺激し、肉体を健康にする事だ。病は気からと言う



が、逆に肉体の状況もまた精神に影響する」

「つまり？」

「結局は、美味しい物を食べて、綺麗な物を見て、可愛い服を着て、人と触れ合うのが一番というわけだ。医者でもない以上、それがベストなりハビリだろう？」「まあ、そうだな。じゃあバーサーカー、明日は明るい内に桜ちゃんと遊びに行つて来い」

「……………なんだと!？」

「世の中には言い出しっぺの法則という物があるんだよ」

「いやまて、せめてジャンケンで決めないかね？」

で、その後、ズエピアが雁夜との話し合いに折れて子守担当にめでたく就任。桜と一緒に出掛けるという現在に至る訳だ。

大の男二人が子守で揉めるのは何というか情け無いが、独身童貞な雁夜と子育て経験者だが桜とはたった三日の付き合いなズエピアでは揉めてしまうのも仕方あるまい。

「さて、食品も終えたことだし、買った物は雁夜の使い魔に運ばせるとしよう。では桜、どこか行きたい所は無いかね？」

「……………お散歩」

「そうか。ならば街をゆっくり見て回ろう」

ズエピアはそう言つて桜を持ち上げ、肩車に移行する。

その日冬木では幼女を頭に乗せた金髪の青年がうろついて居るのが見られたとかなんとか。

倉庫街での同盟の後、ズエピアは路地裏からマンホールを潜り、雁夜の元に戻っていた。

「雁夜、今戻った。作り置きしていた夕飯は食べたかね？」

「……帰宅後第一声がそれかよ。お母さんかお前は？」

「目を離したら君が栄養剤とゼリーしか食べないから、私が料理しているのだが……？ 文句を言うなら料理くらい覚えたまえ。桜はもうモロヘイヤスープとバターピラフくらいなら作れる様になったというのに……」

「うっ!? ……まあその話は良い。計画は大丈夫なのか？」

「逃げたな雁夜。……ふむ、概ね計画通りだ。ギルガメツシユには既に連絡用の携帯電話を渡してある。用があれば電話をしてくるだろう」

「使い方は？」

「電話の掛け方は聖杯からの一般知識に含まれている」

噂をすれば影。雁夜に携帯について話した次の瞬間、ズエピアが持つ携帯がコールされる。発信者は噂のギルガメツシユ王だ。

「どうかしたのかね英雄王？」

『吸血鬼、晩酌に付き合う事を赦す。教会前だ』

「む、今からかね!? ……英雄王め、言うだけ言うて切るとは流石の傲慢さというわけか」

「呼び出しか……行くのかズエピア？」

「行くしかないだろうね。ふむ……雁夜、桜の警護は任せる」

そう言ってからズエピアは眠る桜の髪を一撫でして下水道を去って行った。

10分後、冬木教会前にズエピアが到着すると同時にギルガメツシユが教会の戸を開いた。

「ずいぶん遅かったな吸血鬼」

「酒を持たずに飲み会に行くほど馬鹿ではないつもりだよ私は」

そう言つてズエピアは先ほど買つてきた日本酒が入った紙袋を掲げる。

「む、土産か？」

「ああ、これは『冬木蔵』。この周辺で造られた地酒だそうだ。試飲してきたが晩酌には丁度良い味だよ。あとは摘みを作る為に幾つか食材を買つてきた」

「ほう、献上品を持つて来るとは見所が有るではないか。まあ、入るが良い吸血鬼」

そう言うギルガメツシュにズエピアは呼び出された時点から気にしていた事を問う。「私が教会に入るのはマズくないかね？」「我が赦す」

そう一言言うなりくると背を向けて中へと入るギルガメツシュに、ズエピアは肩をすくめてついて行くのだった。

言峰綺礼は柄にもなく困惑していた。もちろん、顔には一切出さないが、その内心は決して平静ではない。

英雄王が勝手に綺礼が所蔵するワインを飲んで居るだけならまだ良い。

だが、少しトイレにたった隙に自分の部屋に電熱調理器が持ち込まれ、エプロンを付けた狂戦士が鍋を調理して、英雄王に振る舞っているこの状況は流石に綺礼の常識では理解できなかった。

「……なんだこれは」

「おお、帰つたか綺礼。今我は気分が良い。共に鍋を囲む事を赦すぞ」  
「英雄王、そろそろ鶏が煮えた頃合いだ」「……どういふ事なのかさっぱり分からん。説明しろギルガメツシュ」

綺礼の言葉は至極当然。だが、その問いに英雄王はそんな事も判らないのかと言うように首を振ると、まあ座れという風にソファを指し示した。未だ困惑する綺礼がその席に着いてからようやくやく王は口を開く。

「退屈を持って余している者が我の他にもいる様子だったのな。どうなのだ、綺礼？」

「どういう意味だ」

「お前もあの時臣めに奉仕するばかりで心満たされている訳ではないのだろう？」

「……今更契約が不服になったのか？ ギルガメツシュ」

その問いにギルガメツシュはいやいや、という風に首を振り、ワインを一口飲んで言葉を続ける。

「我を招いたのは時臣であり、この身を保っているのも時臣の供物によるものだ。そして何よりも奴は臣下の礼を取っている。まあ応えてやらんわけにもいくまい。だが、正直あそこまで退屈な男とは思わなんだ。全く以て面白味の欠片もない」

「……面白味？」

「万能の願望機で以て『根源』に至る。これほど詰まらん企てなどまずあるまい？」

そう言つて、ギルガメツシュはワインを一気に呷り、ズエピアが腕に入れた鶏肉を摘む。そんなギルガメツシュに綺礼は一つ溜め息を吐いてから言葉を紡ぐ。

いつの間にか綺礼の前にも鍋が入った椀が有るが今は無視する。

『根源』への渴望は魔術師固有の物。言わば世界の外を目指す行いだ。部外者がとやかく言えるものではない」

「ふむ、確かに我はこの世界を愛でるのみで満たされている。」

「時臣師は魔術師の中でも最右翼。今日日あれほど純粋に根源を目指す者はそう居るまい」

「つまり、時臣以外のマスター共はまた違った動機で聖杯をもとめていると？」

「……他の連中が求めて居るのは総じて浮き世の名利であろうよ。威信、欲望、権力……全て世界の内側のみで完結する欲望だ」

「良いではないか、どれも我が愛でる物ばかりだぞ」

「お前こそは俗物の頂点に君臨する王だなギルガメツシュ」

そう言う綺礼に、ギルガメツシュは匙を向ける。

「そう言うお前は聖杯に何を望む、綺礼?」

「私は……。私には……別段望む所など無い。理想も悲願も持ち合わせん。何故聖杯が私を選んだのか分からない」

「それならば、愉悦を願えば良いではないか。何をそう悩む?」

そう断じるギルガメツシュに、思わず綺礼は身を乗り出して叫ぶ。

「神に仕える私に愉悦などという罪深き堕落に身を染めろと言うか!?!」

「愉悦が罪深い堕落だと? 人は善行によっても喜びを得る。悦そのものが悪であるとほざくのは一体どういう理屈だ?」

そうツツコミを入れるギルガメツシュに、綺礼はうなだれながら言葉をかえす。

「……愉悦もまた、私の中にはない。求めているが、見つからない」  
「愉悦を持ち合わせんだと? ……ふむ。吸血鬼、貴様この男をどう見る?」

ギルガメツシュは先程からせつせと鍋を作るズエピアに腕を渡しつつ声をかける。その声に釣られて綺礼もまた、ズエピアを見つめた。

その二人にズエピアはギルガメツシュに渡された腕におかわりを注ぎながら、あっけらかんと答える。

「下手に信仰を持ったが故に自分を見失ったのではないかね? 彼の本性は非常に分かり易いからね」

沈黙。

綺礼の部屋に、鍋のグツグツと煮える音のみが響く。

倉庫街に引き続き、またもや場の空気を凍り付かせるズエピアだった。

相変わらず高威力なズエピアの発言から最も早く復活したのはやはり英雄王ギルガメッシュだった。彼は高笑いと共にワインを継ぎ足し、それをズエピアに向ける。

「やはり今のところ貴様が一番愉快だな吸血鬼。此奴がどのような人間か見抜いたか」

「ああ、まあ、彼からしたら耳を塞ぎたくなる内容だが」

その発言にようやく復帰した言峰綺礼。彼は射殺するような眼でズエピアを見ると問う。

「貴様が私の中身を知ると？」

「聞きたいかね？ 後悔すると思うが」

その発言に綺礼が頷き、英雄王が口角を吊り上げるのを見てからズエピアは自分の考えを述べる。

「では、これから綺礼君には私からの質問に答えて貰う。一つ目、『他者の感情が理解できない』ことはあるかね？」

「……ある」

「では二つ目、『では、他人に理解された』ことは？」

「……ない」

「最後だ『目の前に苦しんでいる人が居る』そんなとき、君はどうする？」

「それは……私は神の信徒なのだから助けるべきだ」

そう言った綺礼に、ズエピアは非常に優しい笑みを浮かべて言った。

「これで確信した。君の本質はやはり……人の傷口をほじくる事に喜びを感じるサイコパスだ」

「なっ!? 貴様、私がおんな様な罪深い男だと……!!」

「落ち着きたまえ。お望みならば証拠も見せよう。魔術が使えぬこの身だが、『アレ』は魔術とは少々違うのでね。実演も可能だ」

証拠を見せる。

その言葉に何とか綺礼は身体を椅子に座らせる。

「まあ、君が理性的にならず激昂したのは凶星だからだという証拠もあるが、もう一つは……」

ズエピアがそう呟いた瞬間、綺礼は一切反応出来ずに頭を掴まれていた。

「貴様何を!？」

「……プログラム『起源覚醒』、演算終了、アウトプット」

ズエピアはそう呟くと綺礼から手を離し、自分の席に戻る。

そのズエピアに綺礼は文句を言おうと視線を上げて、『世界が変革』したのに気付いた。

壁の傷、テーブルの傷、絨毯のほつれ、燭台の傷、傷、傷、傷、傷。

世界は綺礼の目の前で「傷だらけ」になっている。それは悲惨で、醜悪で、そして何より。

「世界はこの様に美しかったのか……」

思わず、呟く綺礼のその声は恋人に愛を囁くような優しさを持っている。

そして綺礼は、ズエピアの指摘をいつの間にか「受け止めて」いた。その姿に、ギルガメッシュは笑みを浮かべて再度綺礼に問う。

「聖杯に願う事は出来たか、綺礼？」

「……いや。聖杯を得た暁には時臣師に譲渡する、コレは変わらん。だが、見たいモノが出来た。私は今まで夢を見ていたのかもしれない。私のもっと『他人の傷』を見てみたい」

「良いではないか、嗜虐もまた我が愛であるもの。……しかし、吸血鬼。此奴に何をした？ 先程まで死んだ魚の様な眼をしていた男が童子の様に眼を輝かせるとは、なかなか見られるモノではないぞ？」

英雄王の質問に、鍋の具をさらい、おじやを作りながらズエピアは答えた。

「あらゆるモノには起源がある。私には諸事情あつて、それを見たり覚醒させたりする事が可能なのだ。そして、起源覚醒を行った人間は自分の起源を自覚し、より自分らしく生きられる。……起源が『殺戮』だったら目も当てられんがね」

「成る程な。私の道化だけあつてなかなか多芸だな吸血鬼。……とこ

ろで綺礼、先程から何一つ口にしていらないが、喰わんのか？」

そんな英雄王の問いに綺礼は何も食べて居なかつた事を思い出し、料理に手をつけようとして。

「……吸血鬼、いや、ズエピア。これは何鍋だ？」

「鶏とキャベツのトマト鍋だが？」

「……」

綺礼は一応その発言に嘘がないのを腕の中身を見て確認した後、それを口に運ぶ。

骨つきの鶏は柔らかく、トマトの酸味とキャベツの甘味が口の中で、肉汁と調和する。微かに香るパセリの風味も綺礼の食欲を刺激し、これならば幾らでも喰えると錯覚しそうになる。

その味、綺礼は結構好みだったのだが、ふと頭に浮かんだ疑問を口にした。

「ズエピア、何故お前は此処までの料理を作れる……？」

「む？ 錬金術師だからだが？」

一瞬、「やはり狂化の影響が……？」とか思つた綺礼は悪くない。

そんな綺礼の表情を読んだのか、ズエピアは苦笑しつつ説明する。

「錬金術というのは台所から生まれた。肉は加熱すれば変色する、茹でた野菜は塩をかければ縮む。そんな日常の変化を魔術と科学で究明しようとしたのが錬金術の始まりだ。あとはまあ分かるかも知れないが、私は基本を大事にする性分だね。偉大なる先人に学ぼうと研究に行き詰まったり小腹が空いたときは自炊していたのだよ」

「成る程」

その研鑽が積もり重なり料理が得意になつたと言うわけか、などと頭の片隅で考えつつ、綺礼の意識は既にズエピアが作っている雑炊に向いている。

自分は今まで料理の味を楽しむ余裕すらなかつたのかと思えば思わず苦笑が漏れるが、今の気分は悪くない。

久方振りに飲んだワインは摘みのトマトチーズ雑炊の力か、気の持ちように依るものか、今まで飲んだどの酒よりも美味だった。



## Interlude② 『殺人機械、故障する』

衛宮切嗣は計画の大幅修正を強いられていた。

それは、三勢力による巨大同盟の存在が明らかになったことも原因ではある。しかしそれよりも寧ろ生還した舞弥からの情報により浮上してきた存在、バーサーカーのマスターたる『間桐雁夜』の存在が大きな理由だ。

化け物じみたバーサーカーの供給に耐える程に膨大な魔力を持つ魔術師でありながら、躊躇無く現代兵器や科学を使う異端者。その上一切姿を見せず、間桐邸は当主の兄が一人暮らす以外はもぬけの殻。冬木市の宿泊施設は全て監視しているにも関わらず、切嗣は未だ間桐雁夜を見たことがない。

自宅で穴熊を決め込む遠坂時臣も攻略し難い事は確かだが、存在すら捕捉出来ない雁夜よりは遥かに下しやさいだろう。

「くそっ……!!」 間桐を出奔し、一年前に戻ってきた急造魔術師だっ  
て？ アイツはそんな奴じゃない、確実に間桐の魔術を極めた秘蔵っ  
子だ……。それに魔術師として上なのに、その上舞弥の話だと改造し  
た上に魔術で強化したエアージェンを装備させてバーサーカーをアサ  
シン代わりに運用するだって？」

更に、切嗣は間桐雁夜こそ見ていないが、その使い魔なら何度も見  
かけている。雁夜の使い魔の数、その数凡そ十万。10センチ程の蜻  
蛉に似たそれは昼夜を問わずに冬木を監視している。流石にアイン  
ツベルンの城に張つてある結界の中には居ないが、周囲の森を監視さ  
れている時点で此方の勢力は筒抜けだろう。

そしてそれを踏まえた上で最も厄介なのは……。

「あのバーサーカーとアーチャー、それにアサシン陣営による同盟。  
……まさか、アサシンとアーチャーの三文芝居を見抜いた上で同盟す  
るとはね」

正直に言つて、この組み合わせは異常なまでに凶悪だ。なにせ、最  
も相性の良い組み合わせのクラスに最も凶悪な英霊二体を据えて運  
用するのだ、弱いわけがない。

接近戦に無類の強さを持つバーサーカーと、遠距離から航空爆撃の様に宝具の雨を降らせるアーチャー。そして、その超攻撃力でサーヴァントを釘付けにした状態で確実にマスターを仕留める為のアサシン。

そのマスター達も、魔法使いの弟子、遠坂時臣。聖堂教会の元代行 者、言峰綺礼。謎のダークホース間桐雁夜といった最強の布陣。

全く隙がないと言っても過言では無いその布陣に対して、此方は最 優とはいえセイバー単騎に切嗣と舞弥だけ。

「……駄目だ、奇襲、遊撃、伏兵。どれをとつても勝てるビジョンが浮 かばない。……こんな敵にどうやって対応しろっていうんだ!」

既にズタボロだった切嗣の思考は先程からループし、胃はキリキリ と痛み、既に煙草は三箱目。

そんな限界の状況が、普段の切嗣では考えられない行動を取らせた のは神の采配か、悪魔の囁きか。

衛宮切嗣は普段なら絶対に相談しない相手に話しかけたのだ。

「……なあセイバー、君ならどうする?」「え? ……切嗣、今貴方に 似た声か私を呼ぶ幻聴が聞こえたのですが」

「幻聴じゃないさ……はあ」

「本当に切嗣……? 貴方が私に話しかける程の事態なのですか?」

「ああ、君ならこの状況をどう見る?」

そう言つて切嗣が差し出すメモを何やら嬉しそうに受け取り、真剣 に目を通すセイバー。彼女は暫くして口を開く。

「……確かにこれはあまりに不利ですね」

「……正直、僕はもう限界だよ。……ああ、イリヤは人質だし、アイリ はどう足掻いても生きて帰れないし、舞弥は既にボコボコだし、良い こと無いなあ、最近。……はあ」

「切嗣!? しつかりして下さい切嗣!! 大丈夫ですか!」

「うう、あれ、此処はアリマゴ島? ……シャーレイ、僕はね、正 義の味方になりたいんだ」

「シャーレイ!? 誰ですかその人!? 誰か!! 切嗣が、切嗣が壊れま したッ!! 誰か来て下さいっ、誰かー!!」

その日のアインツベルンの森は少々騒がしかったとかなんとか。

雑炊も食べ終え、そのままポニーテールの女性アサシン、仮称ポニーちゃんを交えて今後の展望を考えるズエピアの下に雁夜からの念話が届いたのは目を少し跨いだ辺りの事だった。

『ズエピア、プランBによつてセイバー陣営の情報を回収した。どうやら、冬木ハイアットホテルに居るランサー陣営をホテルごと発破解体するらしい』

『発破解体？ また凝つたものを使うのだな、衛宮切嗣は。周囲の一般人を巻き込まないためかね？』

『多分な。……俺はもう寝るけど、何かあつたら念話で起こしてくれ』  
『分かった。おやすみ雁夜』

「何かあつたのか？」

「どうやら私のマスターがセイバー陣営の動きを掴んだ。どうやら衛宮切嗣は冬木ハイアットホテルを発破解体するらしいぞ、綺礼君。……しかし、プランBはなかなか有効だったな」

「む……衛宮切嗣が動くか。ところで、プランBとは何だ？」

「そう呟く綺礼の表情は興味の色こそ有るものの、執念というほどのものではない。」

「プランBは、マスターではないが敵と思しき人間への対応プランだな。具体的に言えば体内にマスターの蟲を植え付ける事で、その人間がどの陣営のどういう存在なのかを探るプランになる」

「お前は相変わらず神算鬼謀よな、吸血鬼。そこまで全力で形振り構わず聖杯戦争に臨む者は少なからう？」

「そう言つてズエピアが持ってきた土産の酒を煽るギルガメッシュは何やら機嫌が良い。その原因がズエピアの料理と酒が中々に気に入ったからという単純な物である辺り、彼の本質は案外素直なのかも知れない。」

「そんな英雄王にズエピアは非常に良い笑顔で答える。」

「遊びというのは本気でやるから愉快なのだよ英雄王」

「ふむ、まあ判らんでも無いがな。しかし、発破解体とは何なのだ？」

「ふむ……ポニー君。その袋から割り箸を取ってくれたまえ。……  
ありがとう。さて、今私が立てた四本の柱をビルの四隅にある太い柱  
だと思ってくれ。で、発破解体というのは、この柱が全て内側に向  
かって倒れるように爆薬を調整して爆破する事をいう」

そう言つてズエピアは四本の割り箸を内側に倒す。

「こうすれば、下手にビルを吹き飛ばすより周りの被害が少ないのだ  
よ」

「成る程、良く分かった。誉めて遣わずで吸血鬼」

ギルガメッシュはそう言いながらふと何かを思いついた様に口角  
を吊り上げる。

「決めたぞ貴様等。我は発破解体とやらを見物しに行く。供をせよ」

「……私は構わんが」

そう答える綺礼はクローゼットから私服を取り出し、手早く着替え  
始める。それを横目に見つつズエピアも肯定の意を示す。

「私も行こう。ポニー君はどうするかね？」

「……綺礼殿が出向かれるのであれば供をするのは当然にございま  
す」

そう言うポニーちゃん、もといアサシンの格好はブラジル水着に髑  
髏仮面。確かに、暗殺の対象を身体で釣る事もあるアサシンの服装と  
しては正しいのだろうが、少々現代向きとは言い難い。

「……ちよつと待ちたまえ、ポニー君。君、その格好で外出するのかね  
？」

「はい。何か問題が？」

「霊体化すると物を持ってないだろう？ 君にはこれを装備して貰おう  
と思つて持つてきているのだが」

「……これは？」

ズエピアがそう言つて指差すのは、彼の持つてきた紙袋。その中に  
は、金属製のスリングショットいわゆるパチンコと、金属のパチンコ  
玉を詰めたウエストポーチが入っている。

「無音かつ、アサシンに使用しやすい武器を考えるとこうなった。背  
後から後頭部に撃ち込めば良くて昏倒、最悪死ぬ」

「……成る程、これは便利な代物ですな」「弱点は霊体化すると持てない事だがね。……と云うわけでこれを着たまえ」

そう言つてズエピアが差し出すのは比較的大きなフードが着いたパーカーとホットパンツ。

「顔を隠し、なおかつ動きやすい物を適当に見繕つてきた。本来ならコレとパチンコは次回行動の以降で運用するために先に試着して本人の要望を取り入れようと持ってきたモノなのだが、まあ今回はぶっつけ本番でも構うまい。時にはアドリブも重要なのだよ」

そう言うズエピアに促され、アサシンはトイレまで着替えに行く。そんな中、着替えを終えた綺礼が何やら興味深げにパチンコを眺め始めた。

「……コレはただのスリングショットではないな？」

「まあ、魔術で強化しただけだがね。最近強化ばかりやらせているせいで私のマスターは強化の腕前だけが異常に伸びているのだよ」

「さぞや大量に魔術を行使したのだろうか、お前のマスターは。……そう言えば、貴様のマスターは私の様に起源覚醒したのか？」

その問いはある意味当然。そして、別段隠す事でもないのでズエピアは一つ頷く。

と、そこでパーカーとホットパンツに着替えたポニーちゃんがやってきたため、話を中断し、4人は町に繰り出した。

夜の冬木を一台の乗用車が駆け抜ける。

メルセデス・ベンツエ『ウイドーメイカー』。ドイツが誇るベンツエ社が造ったモンスターマシンであり、その最高速度は260km/h。スピード狂垂涎の品だが、現在その鉄の弾丸マシンを操るのは銀髪の人妻、アイリスフィールである。

現在時速は100キロ。道交法に真っ向から喧嘩を売るその運転に助手席に座るセイバーは顔面を蒼白にしていた。

「ア、アア、アイリスフィール!? 貴方、今対向車線を走っていませんでしたか!？」

「対向車線? 良く分かんないけど多分大丈夫よセイバー、何かあっても切嗣がどうかしてくれるわ」

「漸く立ち直った切嗣にトドメを刺すつもりですか!？」

故障した挙げ句セイバーに泣きついた切嗣。正気には比較的早く戻ったものの先程まで羞恥心に悶えていたのだ。

セイバーも幾ら気にくわないマスターとは言え、精神的に追い詰められた人間に追い討ちを掛ける程に落ちぶれてはいない。

……それにまあ、あの状況で切嗣が一番始めに頼ったのがアイリスフィールでも久宇舞弥でもなく自分である。というのが少し嬉しかったりもするので、セイバーは切嗣に関して少しだけ歩み寄っても良いのではないかと思いついて始めているのだ。

「……随分と達者な運転ですが、運転手を雇っても良かったのでは?」「駄目よ!! そんなの私が楽しくないじゃない? ……、じゃなくて、危険じゃない。巻き添えは出したくないでしょ?」

ある意味素直なアイリスフィールの発言に、「せめてもう少し速度を落とせ」と言おうとしたセイバーを猛烈な寒気が襲う。

「止まって!!」  
直感スキル。

その発動を感知した後のセイバーは流石の反射神経でハンドルとブレーキを巧みに捌き、前方の人影にぶつかる寸前でその車体を停止

させる事に成功した。

急停止の衝撃に思わずつんのめりそうになるが何とか持ちこたえ、影の主を改めて視認したセイバーは、その人物が人間でないことに気付いた。

「……アイリスファイル、どうやら相手はサーヴァントのようです。私の後に続いて車外に出て下さい。なるべく側を離れないように」

サーヴァント相手に車内は決して安全地帯たり得ない。

つい先ほどアインツベルンの城から出てこの車を取りにホテルへと向かったのだが、その移動を監視されていたのだろうか。道を張り込む知恵といい、アサシンを彷彿とさせるが、異常な性能のバーサーカーに対する情報共有のついでに切嗣から受け取った情報によれば今の所発見したアサシンは全て「褐色の肌に髑髏の面」という特徴を保持しているらしい。

そのどちらか一方にも当てはまらないとなれば、このサーヴァントのクラスは一つに絞られる。

「……キャスター」

異様な威圧感をもつ巨大な体躯と魚と人のキメラのような風貌。その顔に戦いに赴いたとは到底思えぬ満面の笑みを浮かべたキャスターはセイバーに向かって恭しく頭を垂れる。

「お迎えに上がりました、聖処女よ」



仰々しく頭を下げるキャスターのサーヴァント。セイバーを良く知っているかのように振る舞うその姿に、アイリスフィールは浮かんだ疑問を口にする。

「セイバー、あなたの知り合い？」

「いえ、見覚えがありません。……円卓の誰かに仕えていた魔術師という可能性はありますが」

心底思い当たる節がないと言うように肩を竦めて答えるセイバー。その姿を見たキャスターは雷に打たれたように地に膝をつき、わなわなと両手を震わせて懇願するようにセイバーに語り掛ける。

「……おおお御無体な！ この顔をお忘れになったと仰せですか!？」

「……忘れようにも、そもそも私は貴公を知らない。何か勘違いしているか、或いは他人の空似ではないのか？」

セイバーの返答。当人としては当たり前の事実を述べただけのそれは、キャスターからすれば余程に受け入れ難かったのか、頭を抱えてのけぞり、断末魔のように叫び声を上げる。

「おお……、おおお……!! 私です！ 貴女の忠実なる永遠の僕ジル・ド・レエにて御座います!! 貴女の復活だけを祈願し、今一度貴女と巡り会う奇跡だけを待ち望み、こうして時の果てにまで馳せ参じて来たのですぞジャンヌ！」

「ジル・ド・レエ……!?!」

名乗りを上げるキャスターに反応したのはアイリスフィール。その名は先のバーサーカーの真名よりも非常に有名なモノだ。

ジル・ド・レエ。百年戦争を終結に導いた聖女ジャンヌ・ダルクの同朋にしてパトロン。フランス王家に匹敵する財力と元帥の地位、それに広大な領地を持つ彼は、ある日を境に発狂。黒魔術と悪魔召還に傾倒し、領民を虐殺する異常者になってしまう。その原因と言われたのが盟友ジャンヌ・ダルクの魔女裁判。彼が狂ったのは彼女が火に掛けられた事により、神を見失ったせいだと言われる事もあるが……。

「貴公が名乗りを上げた以上、騎士として私も名乗ろう。我が名はアルトリア。ウーサー・ペンドラゴンの嫡子たるブリテンの王だ。……私は貴公の名を知らぬし、ジャンヌという名にも心当たりがない」  
生憎、セイバーはジャンヌ・ダルクではない。それは紛れもない事実だ。

だが、真実を告げようともそれを信じるか信じないかは、告げられた側次第。受容か拒絶か。ジル・ド・レエが選んだのは残念ながら後者であった。

「おおお、オオオオオツ!! 何と痛ましい! 何と嘆かわしい! 記憶を失うのみならず、そこまで錯乱してしまうとは……。おのれ……。おのれええツ!! 神はどこまで残酷な仕打ちを!!」

「貴公、一体何を……」

「ああ、ジャンヌ! 貴女が認められぬのも無理はない! かつて最も敬虔な神の信徒だった貴女が神に裏切られ、魔女として処刑されたのだ。己を見失うのも無理はない」

涙を流してそう呟くジル・ド・レエは突如顔を上げ鬼気迫る形相で何か吼えようとする。

が。

カーブを曲がってきたフォルクスウオーゲン・タイプ1 『スカラベ』にこつぴどく跳ねられてしまった。

「……………はっ」

当然いきなりキヤスターが轢かれた事に困惑するセイバーだが、よく考えればキヤスターは車道のド真ん中で突っ立っていたのだ。轢かれても仕方がない。

キヤスターを跳ね飛ばした『スカラベ』はベンツエを少し通り過ぎた辺りで停車し、中から何やら見知った顔を含む四人組が降りてくる。

その姿に、アイリスフィールは微妙な顔で呟きを漏らした。

「……何で、アーチャーとバーサーカー、それにアサシンとそのマスターが車から出て来るのかしら……?」

「む、セイバー君とそのマスターではないか。……時に、先程我々の車が何か轢かなかったかね？」

「……轢いたわね」

アイリスフィールの返答に、ズエピアはスカラベに乗っていたメンバーとひそひそと話を始める。

「……やっぱり轢いていたようだね」

「我が操る車が進む道を遮っている者が悪い」「ギルガメッシュ、それは暴論だ。ついでに愉快だから言わなかったがこの道は冬木ハイアットホテルとは逆方向だ」

「鹿とか狸といった手応えではありませんでしたな……」

美男子二人に強面の青年と髑髏面を付けた女性の四人組が「どうしよう」と言うように会話するその姿に毒気を抜かれたのか、脱力した様子でセイバーは彼らに声を掛ける。

「……貴公等に跳ね飛ばされて崖の下に落ちたのはキャスターだ。恐らく、死んではいないだろう」

その声を聞きあからさまに脱力する面々はどこか微笑ましい。思わず苦笑しそうになるセイバーの顔を再びひきつらせたのは、どろりとした沼のような影から道路に再登場したキャスターの引き連れる、タコに似た化け物の群れだった。「おのれッ！ 神は傲慢にもまた我が聖女を私から遠ざけようというのか!? ならば私とて考えがあるツツ!! ……ジャンヌ、貴女を神より奪い返すにはもはや言葉だけでは足りぬのですな。……致し方ありますまい。それなりの荒療治が必要とあらば、次は相応の準備を整えて参りましょう。……誓いますぞジャンヌ。この次に会うときは必ずや貴女の魂を神の呪いから解放して差し上げます。ひとまずは手土産をお受け取り下さい」

そう言つて影へと消えるキャスター。と同時に大量のタコに似た化け物が此方に雪崩れ込んで来る。が。

「気色が悪いツツ!!」

そう叫ぶギルガメッシュの背後に突如として出現した大量の宝具によつて塵と化した。

そんな状況を横目に眺めるアイリスファイルの肩を誰かがトントンと叩く。振り返って見てみれば、其処にいるのは味わい深い表情のバーサーカー。一瞬身を竦ませたアイリスファイルに彼は告げる。

「……先程のキャスター。やはり轢かれた時に頭でも打ったのではないかね？」

それに対するアイリスファイルの返答は深い深いため息だった。

さて、視点は変わり、冬木ハイアットホテル三十二階。フロアを丸々貸し切って造られた手製の魔術工房にて、ケイネスは紅茶片手に読書に励んでいた。本のタイトルは『英語で読むケルト神話シリーズ「ダーマッドとグラニーニャ」』である。

神童と言われるだけにはあり、その本をかなりの速度で読み進めるケイネス。彼がこんな事をしているのは倉庫街の一件が切っ掛けだった。

デイルムツドの経歴でケイネスが知る内容は実に少ないと自覚したのだ。それを自覚したのはバーサーカーことズエピアの一言だった。

——この戦争に出る事自体が目的である英霊がいる——

その発言の際、確かにズエピアはデイルムツドを見つめていたのだ!!

マスターである自分でさえ知らぬ事を敵のサーヴァントが知っている。そのサーヴァントがデイルムツドと同時期の英霊ならばまだ納得も出来た。だが、バーサーカーは精々五百年前の英霊。しかもエジプト人。デイルムツドとの接点など無いはずなのに、何故!?

そこまで考えて、ケイネスはふと気付いた。自分がデイルムツドの伝承を全くと言って良いほど知らないことに。

その事に気付いてからのケイネスの行動は実に迅速だった。書店でデイルムツドに関する本を何冊か購入し、今の今まで読みふけていたのだ。

そして今、ケイネスは泣いていた。自分の境遇とデイルムツドの境遇。人生を呪いと制約にねじ曲げられたデイルムツドと、政略結婚という事実からなかなかソラウに振り向いて貰えないケイネス。その違いは大きい、その本質はよく似ていた。

すなわち、二人とも意味こそ違いますが女性に振り回された人生を送っているのだ。

その事に思い至ったケイネスは本を置きテーブルの上で何かの魔術を行使し始める。

それから十分後。ケイネスはランサーを呼び出していた。

「……出て来いランサー」

「お側に。……主？ 目が赤いですが、泣いておられたのですか？」

「……少々目が疲れたただけだ。……さてランサー。今夜はご苦労だった。誉れ高きデイルムツド・オデイナの双槍存分に見せて貰った」

「恐縮であります我が主よ」

ランサーの声にうむ、と頷いたケイネスは一つ咳払いをしてから口を開く。

「利き腕ではないにせよセイバーの左手に癒えぬ傷を負わせ、セイバーを追い詰めたその腕前、流石は私のサーヴァントだ。まあ途中で乱入が二度もあったのは予想外だが、今夜の戦果は上々とは行かずとも中々良いモノだった。……については、褒美を取らせようと思う。……受け取れ」

そう言つてケイネスがランサーに渡したのは赤い石のような物はめ込まれた小さい槍の形のピアスだった。

「……有り難き幸せ!!」

「うむ。……それは、お前を召喚する際に使用した『本物のゲイ・ジャルグの欠片』を埋め込んだ魔術礼装だ。……お前は生前呪いに苦しんでいたらしいな」

「はい、確かに私には生まれつきの呪いが………主!? まさか!？」

「そうだ、それには所謂魔眼封じ………そうだな、お前の場合その魔貌を封じ、その効果をキャンセルする効果がある。……大した礼装ではないが、この私が褒美を取らせたのだ。以後も励めよ」

「はっ!! 必ずや!! 必ずや我が主に聖杯を捧げまする!!」

語気を強くして子供の様にはしゃぐランサーに、何故か見ているケイネスが恥ずかしさを感じ、ゴホンとまた咳払いをしてランサーに言葉を掛ける。

「私に仕えるならもう少し落ち着きを持ってランサー。……時にラン

サーよ。お前は生前攻め立てるフィンの軍勢を何度も撃退した武勲がある。……その点で言えば、私は……。ツ。非常に、非常に遺憾だが、お前に劣るだろう。……私には実戦経験がない」 ケイネスは血を吐くような顔で言う。

彼は冷静な状態ならば間違いなく神童と言われるだけの実力を有している。それ故に、自身の欠点もまた熟知していた。

やれば何でも出来る。それは裏を返せば「やったことがない事は出来ない」ということになる。

そして、ケイネスはつい先程の倉庫街で自分を遥かに越える天才を見て、その事から目を背け天狗になった自分から目覚めたのだ。

故に今のケイネスには驕りも慢心も存在しない。そして、この聖杯戦争を正しく理解している。

これは魔術師同士の決闘などではない。裏をかき、外法を用い、寝込みを襲う真正正銘の『戦争』だ。

そもそも『アサシン』などという不意打ち専門のクラスがある時点で気付くべきだったが、大事に至る前に気付けたのは僥倖と言えるだろう。

そしてケイネスは戦闘の専門家たるランサーに問うてみる事にしたのだった。

「今回の聖杯戦争、何か私が見落とした点は無いか？」

その問いにランサーは暫し黙考した後、口を開く。

「……恐れながら、一つ御座います」

「何だ？ ……どんな事でも良い。考えを述べよ」

「この拠点ですが、我々が生きていた時代の櫓に似ております。……櫓を攻略する手は2つ。……火矢を射掛ける事と、土台に戦車や暴れ牛などを突撃させ根本から押し倒す方法。そして、それらのどれに対する対策も今のままでは足りませぬ。……誠に恐れ多い事ですが、この拠点を引き払い、密かに脱出を図る事を具申させて戴きます」

ランサーの発言は論理に破綻が無く、間違ってもいない。

そう判断したからにはケイネスの行動は速い。慣れた手付きで内線電話を操ると、別室に控えるソラウに電話を掛ける。

『あらケイネス？ どうしたの？』

「ソラウ、濟まない。この拠点が危険である可能性が出て来た。礼装を回収して地下の駐車場から脱出する」

『随分と急じゃない』

「……君を死なせたくないんだ、頼むソラウ」

『はいはい、分かったわよ。じゃあ、準備もあるし切るわね』

「ああ、なるべく急いで欲しい。では」

『ええ、すぐに合流するわ』

そう言っただけで電話が切れたことを確認し、ケイネスはランサーに向き直る。

「手を貸せランサー！ 今から影武者代わりの人形を残して拠点を引き払う!!」

「はっ!!」

ケイネスより下賜されたピアスを付けたランサーと、慢心を棄てたケイネス。

一歩歩み寄った彼等は、戦う漢の顔付きをしていた。



暫く時間は経過し、礼装の回収と人形の設置を終えて、ケイネスがソラウと自身に認識阻害の魔術を掛けた頃。

フロントからホテル全体で小火が発生していると連絡があった。

まさしくランサーが危惧していた事態の一つであるそれに、ケイネスは「やはり訊いておいて良かった」と内心で呟き、速やかに階段を下る。常人ならば三十二階から地下一階まで一気に降りるのは決して容易い事ではない。しかし、ケイネスは常人ではなく優れた魔術師であった。

「――強化―― Starkung!!」

走りながらシングルアクションで強化を自身に掛けるとソラウを横抱き、俗に言うお姫様抱っこ形で抱え、凄まじい速度で階段を数段飛ばしに降りる、というか、減速しながら落下していた。

「きゃあっ!!」

「済まないソラウ!! 時間がないのだ!!」「主!! 後一階です!!」

ランサーの呼び掛けに答えてケイネスは自身の最高傑作『月霊髓液』を発動。ほぼ全ての衝撃を殺して地下駐車場に降り立ち、手近な車を『月霊髓液』でこじ開けて礼装を詰め込み、乗車する。

「どうするのケイネス!! 私達は車なんて操縦出来ないわよ!!」

「……大丈夫だ、私に任せてくれソラウ。『月霊髓液』!!」

そう吠えたケイネスは自動車のタイヤを月霊髓液でコーティングし、地を滑らせる事で車を操縦せずに車を動かし、見事地下駐車場から脱出を遂げた。

予備の拠点として準備していた廃墟に向かうケイネス達の背後で、冬木ハイアットホテルは爆音と共に地に沈む。

何とか脱出が間に合った事にケイネスはホッと溜め息を吐きつつ今後の事を考える。

「……私以上の天才、アトラス院長スエピア、それに遠坂時臣とそのサーヴァント。加えて元代行者言峰綺礼。……いずれも強豪。……」

特にズエピア・エルトナム・オベローン。彼はマズい」

今回のホテル爆破で最悪の事態を想定する事を学んだケイネスは、ある一つの事柄に思い至っていた。

それが真実だった場合、非常にマズい。ただでさえ強力なバーサーカー、ズエピア。

もし、彼の宝具たり得る武器があるならば、該当する可能性がある宝具クラスの礼装は一つ。

すなわち。

「……アトラス七大兵器『黒い銃身』。歴代エルトナムの誰かが造った化け物礼装。……こればかりはもはや彼が制作者でない事を祈るほかないか」

思わず口から漏れた独り言に反応したのはソラウだ。

「黒い銃身?」

「ああ、時計塔の講師なら殆どの者が知っている、アトラスの究極兵器の一つだ。錬金術で造られた大型拳銃型礼装。……効果は『エーテルに対する絶対破壊』。……つまり、サーヴァントだろうが神だろうが、接触しただけでエーテルで活動する全ての物を破壊する礼装だ」

「……そんな!?」

「まあ、彼がサーヴァントである以上宝具では無いと思いたいが、対策はしておく必要があるだろう。……アトラスの錬金術師は兵器を造らせれば右に出る者はないからね」

ソラウにそう答えつつ、ケイネスは考えを巡らせる。対策する仮想敵は強大であるに越したことはないと判断しての事だ。

エーテルを破壊する礼装である以上、魔術では防御出来ない。更に、ランサーでも攻撃されるとマズい。ならば、対処は一つ。防御せずに避ける。

と、なれば。

「閃いたよ、銃弾を避ける方法を」

そう言っただけケイネスは微笑む。初めてぶつかった壁。だが壁は高いほど乗り越えた時の感動も一入だろう。

不敵に微笑むケイネスを乗せた車は、夜の冬木を駆けていった。

一方その頃。ズエピア達四人組は冬木ハイアットホテルを観察出来る位置にあった建設中のビルにて、発破解体を鑑賞した感想をヒソヒソと話していた。

何故ヒソヒソなのかと言えば、とある嫌がらせの為に隠れているからなのだが。

「なかなかの迫力でしたね」

「あれはしっかりと計算しなければ出来ない職人技なのだが、上手くやったようだね」「衛宮切嗣……。成功に安堵している状態から一気に不利になったときの奴はどんな顔をするのか……」

「私の宝具で壊した方が速いが、彼処まで綺麗に壊すとはな。雑種は雑種なりに日進月歩しているのか」

そんな会話をしている彼等の耳は、離れた所で発生した機械越しの声を正確に捉えた。

タイミングは今しかあるまい。

そんな考えを綺麗に一致させた4人は、暇つぶしを中断し、抜き足差し足忍び足で音源へと近付いて行った。

『舞弥、状況終了だ』

その声に、ホッと弛緩したのが悪かったのだろうか？

そんな後悔を胸に抱く久宇舞弥。彼女は今、非常に追い詰められていた。

囲まれているのだ。

何に囲まれているかはわからないが兎に角囲まれている!!

ああ、今、何かが通り過ぎなかったか!? 名状しがたい何かの影が

!!

逃げ出そうとするが身体はピンで止められた昆虫標本の様に動かない。余りのプレッシャーに本能が屈したのだ。

ドロリと粘り着くような圧力はいつの間にか異界に迷い込んだと錯覚する程の物。冒流的な波動とも言える無形の圧力が舞弥を押しつぶさんと取り囲む。

どれほど時間が経っただろう。一分一秒が一世紀程に感じられた。そんな時に、不意にプレッシャーがかき消える。

奴らはどこかに行ったのだ!!

そう考えて出口へ駆け出す舞弥の肩を誰かが掴む。

ゆっくりと振り返った舞弥の視界。其処にいたのは「イイ笑顔」の言峰綺礼とニヤニヤ笑うギルガメッシュ、微笑むズエピア。

そして『ドツキリ大成功!!』とマジックで書いたダンボールを持ったアサンだった。

「きやあああああつ?!」

何かもう色々と限界だった舞弥がその場に崩れ落ちたのを誰も責められまい。

ああ、背後に！ 背後に！

久宇舞弥捕獲作戦から数分後。「我は帰るぞ。明日はテレビとやらで朝から愉快そうなモノがあるそうなのでな」などと言って、ギルガメッシュがフォルクスウォーゲンに乗って帰ってしまい、現在は綺礼とアサシン軍団、それにズエピアが建築中のビルで作戦会議をしていた。

「散々ふざけつつもしつかりとやることはやっている辺り我々は似た者同士らしいね?」

そんな事を言うズエピアの肩には久宇舞弥がぐったりと気絶した状態で担がれている。

今回の移動に対するズエピアの目的は、久宇舞弥の回収と衛宮切嗣が備蓄する兵器の規模の把握、出来ればケイネス・エルメロイ・アーツボルトの礼装の確認。言峰綺礼とアサシン達の目的は敵陣視察。

ギルガメッシュが本当にただただ遊興に出ただけなのはともかく、それに乗った連中は一応の成果を得ていた。

「さてと。綺礼君、暫くの間ポニー君を借りても構わないかね?」

「……何故だ?」

「久宇舞弥が逃げないか監視するために。女性であるポニー君ならばトイレだろうと風呂だろうと同伴可能だからね」

「……………良いだろう。ポニーテール、私から任務終了の指示があるまでバーサーカーの補佐を務めよ」

「御意のままに」

「ありがとう、綺礼君。……近場で潜伏出来る場所はあるかね?」

「新都側にあるエーデルフェルトの双子館を使えばいいだろう。手配しておく」

「恩に着るよ」

そう言ってから一人担いだまま器用に一礼するとズエピアはポニーを引き連れて素早く跳躍し、夜の街に消えた。

その姿を見送った綺礼はクルリと身体の向きを変え、アサシン軍団へと向き直る。

「さて、報告が有る者は居るか？」

綺礼のその問いに最も早く腕を伸ばしたのは髪をツンツンと逆立てた男のアサシン。綺礼が軽く頷いて報告を促すと、元気よく回答する。

「報告するツス!! ケイネス・エルメロイ・アーチボルトは事前に爆発を察知したのか爆発前に脱出していたツス!! 次の拠点はどうかやらの廃墟みたいツスね!!」

「ご苦労。引き続き監視を続ける。……次」

次に手を上げたのはガリガリに痩せた長身のアサシン。綺礼が促してから話し始めるのは先程のアサシンと変わらない。

「魔術師、捕捉、場所、把握、工房、未遠川、中流、用水路。幼児、虐殺、生贄」

「成る程……速やかに対処すべき問題だな。父に相談する必要がある。良くやったぞアサシン。……次は誰だ」

「サー!! 私であります、サー!! ライダー陣営の拠点は未だ見つかりませんが、ライダーに似た外国人の目撃情報がある地域は比較的狭い範囲に集中しており、工房発見も時間の問題であります!! サー  
!!」

「時臣殿が最近何やら腹を抑えてプルプルして居ましたが、原因不明です」

「璃正神父が『孫の顔がみたい』とか何とか言っていました」

「推定するに衛宮切嗣は効率を重視する性格です。其処から考えれば彼の礼装は銃火器の類かも知れませんな」

「ケイネスの礼装の一つは流体金属。詳細は未だ不明」

「間桐雁夜、未だ発見できていません」

「ポニーちゃんがさつきズエピっちに味見とかでケーキ食べさせて貰ってた的な？」

「何それずるい」

様々な意見が渦巻く中、綺礼はそれらを時に纏め、時に質問し、時に無視しつつ、情報を整理していく。

自己分裂宝具『妄想幻像』。ただの分身ではなく、一体一体が個別の人格を持つ異なるアサシンの群体。

同一存在ではないために、記憶の共有などはないが、その代わりに様々な視点から物事を把握する事が可能なこのアサシンを綺礼は重宝している。

80体のアサシンと綺礼が話を終えたのはそれから三十分後。

聖杯戦争に置ける最大勢力遠坂間桐同盟。その大規模戦力に目が行きがちだが、それらが円滑に動けるよう雑事を黙々とこなすアサシンは所謂縁の下の力持ちとして必要不可欠。

そんな彼らは月光の中、再び冬木中に散開していった。

遠坂時臣の計画は今の所順風満帆。

御三家の一角、間桐家からの協力は少々予想外だったが、綺礼を仲介して渡された書状に拠れば『今回の聖杯戦争に間桐家は参加しない腹積もりであったが、海外にて研鑽を積んでいた私、間桐雁夜に令呪が発現した。私は未だ若輩の身故、次回を本命と見ている。ついては古くよりの遠坂葵との友誼から遠坂に協力する事を願い出る次第である』との事。そういう事なら拒む理由もない。

魔術師の責務から逃げ出してフラフラと世界中をさまよっている凡俗、というのが遠坂時臣の間桐雁夜に対する評価だったのだが、どうやらそれは誤りだったようだ。

成る程確かに怪力無双のバーサーカーを維持し、その上狂化のデメリットだけをレジストするその手腕、並みの魔術師に出来ることではない。……正直に言って、魔力量だけでいえば時臣を上回るだろう。

その上魔術の腕も良い。間桐が使い魔の扱いに長けるとは言え、この手紙は時臣が封を切るやいなやパタパタと綺麗に折り紙じみた動きをしてカラスの姿を形作ると肉声で文面を語り始めたのだ。

非常に洒落た魔術だったため興味が湧いて解析したが、なかなかどうして巧妙だ。

一見単純に見えるのだが、この手紙、時臣が触れたときでなければ喋らないし、文字も別の内容に書き換わってしまう。

つまり、時臣の魔力を感知したときのみ内容を示すという秘匿能力があるのだ。さらにその上、童謡を幾つか歌うことが出来るという遊び心も時臣がこの術を評価するポイントである。

ただ手紙を送るだけでなく相手に楽しんで貰おうという気配りが時臣の心を穏やかにしたのは言うまでもない。

「流石は間桐の隠し玉だな。これほどに使い魔を自在に操るとは……」

時臣はそんな事を呟き、紅茶を啜りながら窓の外を眺める。

これで英雄王がもう少し自重してくれれば言うことはないのだが、



それは些か欲が深すぎるのかも知れない。

そう考えてから時臣は机の上にある書類の山に目を移す。

——余裕を持って優雅たれ。

その家訓に従って立ち居振る舞う時臣は苦しさを顔に出すことはない。だが、胃は正直に痛みを訴えてくる。

最近の彼が心安らぐのは、雁夜のカラスを歌わせながら紅茶を飲む時だけ。

その頻度が増加しているのは秘密である。

さて、雁夜は今日も下水道で魔術の練習をしている。

何故、間桐の魔術を嫌っていた雁夜が毎日熱心に魔術を修行しているのかと言えば、ズエピアが数日前に教えてくれた事実が原因だ。

いわく、「桜は非常に優秀な魔術的性質を持っているのだよ雁夜。

……心無い馬鹿共が桜を拉致して解剖する可能性すらある。……君の話聞く限り、遠坂時臣もそれに気づいたからこそ桜を間桐に預けようとしたのだろう」と。勿論、雁夜は反論した。まともな家ではない間桐に預ける意味が解らなかったからだ。だが、ズエピアの続く言葉に雁夜は自分の視野狭窄を恥じた。

「真の外道は外面だけは聖人なのだよ雁夜。……大方、あの蟲妖怪が甘言を用いて桜を騙し取ったのだろうな」

言われてみて雁夜は昔の自分が何故葵が時臣に嫁ぐのを本気で止められなかったのかを思い出した。遠坂時臣は確かに魔術師なのだろう。雁夜なら、間桐が仮に普通の魔術師の家だとしても自分の娘同士が聖杯戦争で戦う可能性が有る以上養子に出すなど耐えられない。

確かに時臣は魔術師だ。

だがしかし。時臣が善人なのもまた確かなのだ。彼と雁夜は決定的に馬が合わなかったが、それでもどうしても恨めなかったし、絶交する事もなく御三家の息子同士、腐れ縁と言いながらもその縁を雁夜は切らなかつた。馬は合わないが、確かに良い奴だったから。葵を任せられると雁夜が思える奴だったから。

だから、雁夜は、身を引いた。

その事を思い出してから、雁夜は時臣に憎悪までは向けなくなつた。育児放棄は気に入らないが、奴が捨てるなら俺が拾うだけだとかばかりに魔術の修行に打ち込み、桜を守る盾になろうと一心不乱に魔術を修得する彼に迷いはない。幸いにも臓硯の魔術刻印は回収出来たため、移植したそれを使いこなす訓練と魔術の修行、そして桜のリハビリという三足の草鞋を履く雁夜は充実した日々を過ごしている。

自分でも変わったと感じる程に魔術を驚異的な速度で吸収していく雁夜。

その変化は、ズエピアのある術のお陰だ。

起源覚醒。

言峰綺礼より早くそれを施術された雁夜の起源は『根性』。

何やらスポコン漫画のようなそれに、当初は大層げんなりしたものだ。が今となっては確かに自分の起源なのだ実感していた。

やる気が尽きぬ限り、雁夜は幾らでも何度でも魔術書と格闘し、間桐の魔術を取り込んでいく。

彼の工房には今日も朝早くから夜遅くまでカンテラが灯り続けた。  
いた。

朝、ズエピア先生と買い物に行った私は先生とのお散歩が終わったので、おじさんがいる秘密基地に帰ってきました。

「桜、今日は一緒に料理を作ろう。私の国で良く食べられている物だし作り方も簡単だから、やってみないかね？」

しゃがんで私の顔を見ながらそう言うズエピア先生に私は「はい」と言って首を振りました。先生はニッコリ笑うと私を優しく抱っこしてキッチンへ歩いていきます。

この秘密基地は、おじさんと先生が頑張って作ったらしいです。だからキッチンとリビングとベッドの部屋も分かれています。

おじさんは作っているとき何だか楽しそうに『子供の頃を思い出すな』と言っていました。大人になったら秘密基地はなかなか作れないらしいです。『いっぱいんじょしき』とか『こうじよりようぞく』とかがあるらしいです。

大人はかわいいそうです。

ズエピア先生に抱っこされた私はキッチンにある踏み台に乗って先生の横に立ちました。先生は朝買ってきた『モロヘイヤ』という野菜を綺麗に洗ってから私に渡します。

「では、桜はその葉っぱだけを取ってくれるかね？ 茎は食べないからゴミ箱に入れてくれたまえ」

「はい、先生」

私は頑張って葉っぱを集めます。その間に先生はフライパンを使って小さく切った鶏肉をバターで炒めていました。こんがりして美味しそうです。

「先生、葉っぱを取りました」

「良くできたね。では、私はこの葉っぱを茹でるから、桜はこのニンニクの皮を剥いてくれないか？」

「わかりました」

先生が渡してくれたニンニクは玉ねぎに似ています。ニンニクは白い。玉ねぎは茶色い。そう覚えてから、私は皮を剥きます。皮は薄

くて、なかなか取れません。

私が頑張つて皮を剥いている間にズエピア先生は炊飯器にレンジでチンしたバターと洗ったお米を入れてスイッチを押しています。何をしているのか聞いたら、「バターライスのズボラな作り方だよ。真似をしても良いが、しばらく炊飯器がバター臭くなる」と言っていました。

すっかり覚えておきます。

ズエピア先生が茹でたモロヘイヤを包丁で細かく切ってから、『鶏ガラスープのもと』を入れたお湯を沸かしてさっきの鶏肉を煮始めた頃、私は何とかニンニクを剥き終わりました。

「先生、ニンニクが剥けました」

「ご苦労様、桜。さて、ではこのニンニクを刻んでさっき鶏肉に使ったバターの残りで炒める。この時にコリアンダーとカルダモンを加えるのが美味しさの秘密だ」

『『こりあんだー』と『かるだもん』……おぼえました』

私は雁夜おじさんが買ってくれた自由帳にクレヨンで『こりあんだー』『かるだもん』と書きます。

「凄いな桜、もう文字が書けるのか。将来はきつと賢くなるだろうね。……さて、ニンニクを炒めたら、さっき煮込んだ鶏肉スープに刻んだモロヘイヤを入れる。そして少し茹でてから、アツアツのニンニクとバターを素早く入れて蓋をする。ニンニクの香りを閉じ込めるんだ」

「香りを閉じ込める、ですね」

「そうだ、偉いぞ桜。さて、スープに入れたバターがパチパチ言わなくなったら塩コショウで味を整えて完成だ」

そう言つて先生は三人分の器にスープを注ぎます。ニンニクとスパイスの香りがしてとても美味しそう。良い匂いにつられて雁夜おじさんもやつてきました。

「雁夜、今日は桜がスープを作ったのだよ」

「本当かい？ 凄いな桜ちゃん。おじさんなんてカップラーメンしか作れないのに」

そう言つておじさんはヨシヨシと私を撫でてくれます。その間に

ズエピア先生はバターライスのカレーのお皿に入れています。

「さて、戴こうか。私はスープをバターライスに掛けながら食べるのが好きだが、別々に食べても美味しいのだよ」

「いただきます。……うん、美味しいよ桜ちゃん」

そう言つて嬉しそうに笑うおじさんに続いて、私もスープを飲みます。

その日の晩御飯は今まで食べたご飯で一番おいしかったです。

朝の戦隊ヒーローモノを見て機嫌の良いギルガメツシュ。捕まえた舞弥のエサ、もとい『フレンチトースト大粒イチゴと生クリーム乗せ』を作っていたズエピア。そして、舞弥と長めの手錠で繋がりがらも器用にズエピアを手伝うポニアサシン。

璃正は朝の鍛錬をしていたし、時臣は宝石を通して凜の『ヒーロー戦隊が如何に格好いいのか』という子供らしい話を聴いていた。雁夜も鍛錬を休憩して桜と一緒にテレビを見ていたのだ。

そんな朝の時間をゆっくりと過ごす彼等は昼間の戦闘が御法度な聖杯戦争参加者としては比較的正しい。

彼らはほんの数分前までそんな、戦いの合間の平穏を楽しんでいた。

だがしかし。

今、遠坂連合の面々は激怒していた。

綺礼から報告された、キャスターの悪事。時臣は魔術の秘匿を無視したその行動に眉間に皺を寄せて怒りを露わにし、璃正は神父として神に唾吐くこの外道を赦せぬと憤り、雁夜の蟲が主の怒りに反応してか興奮して飛び回り、微かながら冬木中にギチギチという蟲の鳴き声が響いている。

だが、彼等の怒りはすぐに収まった。何故か。

それは非常に古典的な理由だ。

——人間は自分より遥かにブチ切れている存在をみると冷静になる——

ただそれだけか、と思う者がいれば、彼等が見た風景を見て同じ事が言えるだろうかと問いたい。

かたや、悪鬼羅刹も逃げ出す鬼の形相で周囲に黄金の魔力を容赦なくぶちまけ、その余波で冬木教会を若干異界化させているギルガメツシュ。

かたや、眼球全体から滂沱の如く鮮血をたれ流しながらどす黒い魔

力をぶちまけ『キ、キキキ、キキキキキキキ——』と壊れた機械のように啞うズエピア。

!!!!

その二人が人を何人か思念で殺害せしめるレベルの怒気と殺気を撒き散らして居るその光景に自分たちの怒りなど一瞬で覚め、冷や水を掛けられたように冷静になったマスター達。

綺礼でさえその目を見開いて若干唇の色が失せていたと言えはその状況が如何に恐ろしいか判っていたただけるだろうか。

そして当然、そんな馬鹿でかい魔力と殺気と怒気に他の英霊やマスター、そして野生動物が気付かぬはずがない。

沈没前の船よろしくネズミが大挙して引越を始め、飛ぶ鳥は墜ち、魚は川に浮かんでビクビクと痙攣、冬木のあらゆる場所で猫がその毛を限界まで逆立ててさながら毬藻の如き容貌となり、土佐犬すら股に尾を挟んで親からはぐれた子犬のようになる。

ランサーはとっさに主を殺気から護るかのように仁王立ちで実体化し、ライダーはウェイバーをそのマントの内に抱き寄せ、セイバーは珍しく「……おはよう」と挨拶してきた自分のマスターをお姫様抱っこして数メートル後方へと跳躍した。

アサシンに至ってはその余りの恐怖からトラウマを感じた数名の人格が精神防衛の為の新人格を形成し、その数を増している程だ。

それ程の怒りを垂れ流している二人だったが、その怒気をどうにか深呼吸などで制御して綺礼に詰め寄る。

「『詳細な情報を寄越せ……』」

「……場所は未遠川中流の排水溝。内部には数名の子供達とキャスターのマスターによる人体を使った『作品』がある。工房としての規模は地味だが、流石にそれ以上は分からなかった………すまない」

その言葉を何とか言った綺礼と報告に来ていたアサシンが若干涙目だったことを誰が責められるだろうか。

この冬木の街に潜む悪がまさしく撃滅されんとしているなか、普段

通りに行動出来て居たのは恐怖が麻痺している桜と、脳味噌がイカレているキャスターとそのマスター。

そしてズエピアが作っていった大量のフレンチトーストを食べて幸福の頂点に居た久宇舞弥とポニーだけであつた。



間桐雁夜は夢を見ていた。

空に浮かぶ真紅の月。その月を背に立つ男は誰かに似ている。雁夜がそれを思い出す前に月を背負う男が口を開く。

「——いやはや、千年程度ならば刹那と変わらぬと思っていたが、いざ待つとなれば存外永かった。——君もそう思わないかね？

アルトルージュ」

その呼びかけに応えるのは少女とは思えぬ淫靡な色香を放つ紅い眼の乙女。

月を背にした男とその少女の語らいはさながら神話の再現を思わせる雅で艶やか、それでいて荘厳な雰囲気纏う。

「あら、私は暇つぶしには事欠かなかったから、別に退屈してないわよ？ 妹が17分割されてからは中々の喜劇が観られたし」——

それは重畳。では姫君よ、我が一世一代の喜劇の第二幕も楽しんでいただければ有り難い」

「まあ、いいけど？ 暇だし。……仕込みはしっかり出来てるんでしようね？」

「前回の対策に加え、ガイア、アラヤとの変則二重契約、真祖の肉体、幻想種の捕食、各種薬品と礼装によるブースト、10分割思考、エトセトラ、エトセトラ、エトセトラ。——まあ、夜明まで語り続けるほど対策を積ませて戴いたよ」

「あらそう。……もう良いわよ、始めても」

「では、開幕と行きましょう。観客一人のための上演とはいえ、お相手戴けるは姫君。これほどの榮譽にたぎらぬ役者は降りますまい」

そう言った男から膨大という言葉では表せない莫大な魔力が迸り、閃光に雁夜は夢の中であるにも関わらず目を閉じる。

数瞬の後、雁夜が眼を開ければ其処にはただただ見慣れたクリーム色の満月が浮かんでいて。

其処に誰も居ないのを疑問に思った所で雁夜は腹部への鈍痛で目を覚ました。

「起きて、おじさん」

「……………すぴー。」

「起きて、おじさん」

「……………すぷー。」

「……………むーんさるとぶれす」

揺すつても、頬を掴つても中々起きない雁夜に業を煮やした桜は近くにあった椅子に登って綺麗にバツク宙を決め、重力加速度を味方に付けて仰向けに眠る雁夜に飛びかかる。

いざという時の為に教えた身体強化魔法の初使用が教えた本人である雁夜に襲いかかるのは何やら不憫だが、起きない雁夜も悪い。

結果、桜の溢れる魔力を纏ったムーンサルトプレスは綺麗に雁夜へと命中し、雁夜の目覚めは「親方!! 空から女の子が!?!」なモノとなったのである。

数秒後、雁夜は桜と話をしていた。常人ならば掛けたのが幼女とは言え魔力が乗ったプロレス技など喰らった日には数分以上悶えるところだが、死徒の肉体と『根性』によるタフネスはその程度では揺らない。

痛かったのは否定しないが。

「良いかい、桜ちゃん。プロレス技はおじさんだから大丈夫だったけど、普通の人に掛けたらダメだからね?」

「はい。おじさん以外にはかけません。おじさんは大丈夫なのでかけます」

「いや、おじさんにも掛けないで欲しいんだけど……………。と言うか、どこでプロレス技なんて覚えたの?」

「テレビで解説のオジサンが詳しく言っていました。『そろーもーしよ

ん』映像も見ました」

「ああ、成る程」

テレビで見ただけの技をよくぶっつけ本番でやった物だ、などと若干桜の無茶に苦笑しつつ雁夜は桜が徐々に回復していると感じた。

テレビの真似をするのは『普通の』子供の行動だからだ。

さて、と雁夜は立ち上がり、リビングに組んだ魔法陣の中で眠るズエピアを起こしに行く。

そもそも今まで寝ていたのは彼の計画なのだ。

「起きてるな、ズエピア」

「……勿論だとも。……漸く日が暮れたか。……全く、待つ身は長い」

「確かにな。だけど、お前は夜しかできない計画を立てたからこそ今まで待つてたんだろ？」

「ああ。……君が漸く一人前の死徒に成り出演するに相応しい者となったからね。これからは君も舞台上に上がって貰う」

ズエピアの計画は、昼間、怒りをどうにかこうにか鎮め、四苦八苦しつつ狂化を解除してからギルガメッシュと話している内に思い付いたモノだ。

ギルガメッシュ曰わく、ゲス野郎の討伐等にわざわざ自分が赴いてやることは無いが、ゲス野郎は赦せんので王たる自分の臣下としてズエピアがどうかしてこいと事。

ズエピアはそれに対して、偵察込みで3日以内にキャスターとそのマスターを討伐すると言って、教会を発ち、地下の拠点に戻ると雁夜に睡眠を採るように言って自分も床に就いた。

魔力の温存と身体の休息。

その行動から導き出される計画は何ぞやと雁夜は疑問を投げ掛けるが、ズエピアの口から帰ってきたのは「威力偵察」という耳慣れない言葉だった。

「威力偵察？ 偵察つてのはこっそり隠れてやるもんじやないのか？  
威力の意味がいまいち分からないんだが……」

「威力偵察というのは作戦行動中の敵に取り敢えず突撃し、相手に攻撃されてみて相手の状況を探る偵察方法だよ雁夜」

「……それ、捨て駒だよな」

「人間ならね。……私と雁夜なら、情報を回収してなお二人とも生還できる」

「根拠は？」

「まだ令呪が三画ある」

「……それもそうか」

令呪は雁夜とズエピア、2人の魔力と令呪の魔力を合わせた魔力の合計を使つて実現可能な奇跡なら何でも叶えられる。

最悪の場合『雁夜を連れて全力で逃げろ』と命じれば良いのだ。

最後の手段があるというのはかなり心強い支えとなり、雁夜の不安を幾らか取り去る。

雁夜は少し震える指先を武者震いだと自分に言い聞かせながら、ズエピアと共に夜の冬木へと繰り出す。

外は晴れており、満月まで後2日と言った所だろうか。使い魔に拠ればキャスターは冬木にある森『アインツベルンの森』へと子供達を引き連れて移動しているらしい。

偵察のついでに子供を奪還しようとズエピアに告げれば、彼は「当たり前前だ」と雁夜に返してふわりと電柱から電柱へと飛び移っていく。

そんな彼の後を屋根から屋根へ跳んで移動しつつ、天上の月の輝きを受けるズエピアに普段以上の力強さを感じた雁夜だった

ケイネスはシャワーを浴びると、髪に付いた水滴を払い、棚に置いておいたパンツとボトムズを身に着けてタオルを首に掛け、シャワールームを出る。

ケイネス達が今居るのは、ユニットバスとキッチン、寝室しかない安いアパートメント。

俗に「長屋」と呼ばれるその住宅をケイネスは丸々買い上げて改造。一部屋を除いて完璧なまでに異界化させ、その最後の一部屋に至るには全ての部屋を越えるしかないという凄まじい仕様の工房として完成させていた。

さらに前回の反省から例えばミサイルが直撃しようが一切内部に影響を及ぼさない程の強度を建物自体に持たせてあるというオマケ付きだ。

これで居住空間が快適ならば文句はないが、流石にこの短時間でそこまで労力を割くわけにも行かず、精々寝室を拡張して2人分のベッドを置いて布団一枚を敷いても充分に広い程度に拡張しただけである。

だがまあ、ソラウと同じ部屋というのは緊張するが悪くない。

そんな事を思いながらシャワールームからキッチンを一旦通り、寝室へとやってきた彼はシャツを羽織り、タオルで髪をしつかりと拭く。

そうしてからケイネスは、ソラウが此方を向いているのに気付いた。

「ん？ どうかしたかねソラウ？」

「……貴方、ケイネスよね？」

その質問にケイネスは一瞬戸惑うが、そう言えばソラウに私服を見せた事も風呂上がりの髪を纏めていない自分を見せた事も無いと気づき、苦笑しながらソラウに「ああ、私はケイネスだよ」と返して、いざ髪を纏めようとワックスに手を伸ばした。

が、その手は横から素早く伸びた細い腕に掴まれて、ワックスを掴

むことなく停止した。さらにもう一本の細腕が呆然とするケイネスの隙をついてワックスをゴミ箱へと投げ捨てる。

そこまでして漸くケイネスは自分の手をソラウが掴んでいることを自覚した。

「……ソラウ?」

何故、私のワックスを捨てたのかと問おうとしたケイネスより早く、ソラウの口が開いた。

「ケイネス、何で今までオールバックだったの?」

「いや、それはだね、私は癖毛が酷くて……」

そう言うケイネスの髪は確かに先端に行くにつれ、緩くウェーブを描いている。ケイネスは何となくそれが気に入らず、今までワックスで固めていたのだ。

だが、続くソラウの言葉に、ケイネスはその忌避感を宇宙の彼方へ投げ捨てた。

「ケイネス、貴方オールバックより素の髪型の方が格好良いわ。……次からオールバックは止めなさい」

「……え?」

聞き間違いかとソラウに向き直ると、ソラウは少しだけ頬を染めてそっぽを向く。

柄にもない発言をした為か、或いはケイネスが……。

其処まで考えた時点でケイネスは何やら妙に恥ずかしくなり、髪を素早く拭くと「ワックスを付けぬまま」逃げるように必要な礼装を持つとランサーを連れて部屋を出た。

「……どうされましたか主。……ん? 何やら見慣れぬ格好をなさっていますね。お似合いです」

「……世辞は良い。……工房が完成した以上、ソラウはある程度安全だ。防御礼装も残してある。……偵察に出るぞランサー」

「御意のままに。では、取り敢えず何処に向かわれますか?」

「……集めた情報に拠れば、御三家の一角、アインツベルンが『衛宮切嗣』という傭兵を雇っているらしい。コイツはこれまでに飛行機ごと爆破したり、地雷で消し飛ばしたりと外道な手で魔術師を殺害してい

る。……恐らく、私達のホテルを吹き飛ばしたのもコイツの仕業だ。まあ、気には喰わないがある意味で殺害に関しては一流の男と言える」

「……ならば、我々の向かう先はアインツベルンの居城ですね？」

「そうだ。……ランサー、この計画に不備は？ ああ、無駄に遠慮は要らんで、そんな物が原因で死ぬ方が無様だ」

「……暗殺者を相手にする以上、完璧な対策は有りませんが、敵の本丸を叩くのは上策です。……いかに暗殺者と言えども、自分の拠点に直接乗り込まれては迎撃するほかありません。……つまり、この策は私と主の実力が相手の兵力を上回るか否かに掛かっていると考えるでしょう」

「ならばよし。我が騎士はセイバーにも引けを取らぬ武芸者。……そうだなランサー」

「はい！ 主!!」

英雄と魔術師。それは様々な伝承において名コンビとして描かれる。

アーサー王とマーリン、イアソンとメデシア、ルノーとモージ。

それらには及ばぬものの、確かにケイネスとテイルムッドは良いコンビであると言えるだろう。

そんな二人は月光を浴びながら、夜の冬木を歩いて行くのだった。

アインツベルン城。森の奥に佇むその古城のサロンで三人の男女が卓を囲んでいた。

言うまでもなくその三人とは、セイバーことアルトリア・ペンドラゴンと衛宮切嗣、そしてその妻アイリスフィールである。

「——疲れて来たかい？ アイリ」

アイリスフィールの溜め息に反応したのか、切嗣が気遣うように問い掛ける。その優しさに彼女は微笑を浮かべて首を振った。

「ちよつとだけね。でも大丈夫よ、座りっぱなしで身体が凝っただけだから。気にしないで先を続けて」

そう言っただけで伸びをしてみせるアイリスフィールに、切嗣はニコリと微笑み返すと、説明を再開する。

「——この町の地脈の中心になるのは二ヶ所。ひとつは遠坂邸、もう一つは地図の此処、深山町にある円蔵山だ。この辺りの霊脈全てを束ねる根元に当たる場所だ。詳細は既にアハト翁から聞いている通りだが、問題が一つある」

そう言っただけで一旦言葉を切った切嗣は紅茶で口を湿らせつつ、アイリスフィールから彼女の脇に控えるセイバーへと視線を移す。

さて、そのセイバーと切嗣だが、両者ともに若干くたびれた様子である。切嗣の頬には情け無いことに真っ赤な紅葉と引つ掻いた様な爪跡が残っているし、セイバーには跡こそ無いが、実は数発のパンチをその白百合のような美貌で受けていた。

この二人、あろう事か主従同士で朝から昼まで取っ組み合いの喧嘩をしていたのだ。流石に両者ともギリギリの理性は残っていたらしく、武器を手にする事はなかったが、騎士とはいえ少女相手に本気で殴りかかる切嗣と騎士のプライドもへつたくれも無しにビンタと猫のような引っかけで応戦するセイバーの姿は正直に言っただけ小学生の喧嘩と同レベルだった。こんな風に。



「切嗣!! 貴方という人は何時までも無視、無視、無視!! 思春期女子の陰湿なイジメですか!! タマ付いてるんですか、切嗣!!」

「五月蠅い、煩い、うるさい!!『戦争でも礼儀を失わない騎士カッコいい』とか君は中学二年の男子かセイバー!! あと女子がタマとか言うなッ!! この貧乳!!」

「うッ!! 無精髭の冴えない中年な癖に!!」

「ぐはっ!! なら君はチビだ!!」

「……バカ、バカ、バーカ!!」

「……アホ、チビ、マヌケ!!」

いや、訂正しよう。小学生以下だった。全世界の小学生諸君に先程の失言を詫びねばなるまい。

まあ、それはともかくとして喧嘩もガキなら仲直りもガキ。一応お互い気に入らないものの、「切嗣の戦闘がいかにも外道でもセイバーは邪魔しない。代わりに切嗣もセイバーが一騎打ちをしている間は邪魔をしない」という約束を結び、何とか折り合いを付けた二人は簡単な会話や必要な打ち合わせ程度なら言葉を交わすようになっていた。

そんな切嗣は紅茶で口を湿らせるとセイバーに向けて注意の続きを述べる。

「円蔵山の頂上には柳洞寺という寺があるんだが、ここを中心に山全体を強力な結界が包んでいる。この結界は参道以外全てを覆っていて自然霊以外の霊的存在、つまりサーヴァントが参道以外に踏み込む事は難しいだろう」

「成る程。つまり、敵のサーヴァントと戦う際は円蔵山以外の人気の無い場所で戦えばよいのですか?」

「ああ、そうだ。だが、さらに二ヶ所、聖杯が降霊可能な場所がある。冬木教会と都市区画の中の此処、現在建設中の市民会館。この二つを含めた四ヶ所では、周囲を破壊しかねない規模の戦闘は避けてほしい」

「わかりました」

「よし、じゃあ地勢についてはこれぐらいで良いだろう。二人とも何

か質問は？」

切嗣の問いにセイバーとアイリスフィールは首を横に振って疑問が無いことを示した。それを見た切嗣は次の話を切り出す。

「さて、次は舞弥から送られてきた使い魔だ。……彼女は今、バーサーカー陣営に捕らえられているらしい。だが、それよりも彼女が伝えてきた情報の内容だ。……どうやらキャスター陣営が最近の幼児誘拐の犯人で、更に子供を虐殺して『作品』を創る狂人がマスターらしい」  
切嗣が苦々しく吐き捨てたその発言を受けて、アイリスフィールは顔を青ざめさせ、セイバーは義憤に駆られたらしく怒りを露わにする。そんな二人に切嗣が告げた作戦は、セイバーの怒りを沸点に導きかねないモノだった。

「キャスターがセイバーをジャンヌ・ダルクだと思い込んでいる以上、彼はこの城にやってくるはずだ。そこに網を張り、叩く」

その発言に異を唱えるのはやはりセイバー。

「切嗣、それでは足りない。あのキャスターの出方を手をこまねいて見ているだけでは無辜の民がいたずらに犠牲となるばかりです。奴の悪行は許し難い。被害が広がる前に打って出るべきです！」

セイバーの誠意を込めた発言に切嗣は暫し瞑目して考えを巡らせる。だが、再び目を開けた彼の口から発せられた答えはセイバーの望むものではなかった。

「……ダメだセイバー。打って出る事は出来ない」

「……何故です、切嗣」

「まず、キャスターの拠点が市街地の地下だという点。こんな所を爆破するわけには行かない。となれば正面からの工房攻略だが、今度はキャスターに逃げられてしまうだろう。そうなれば追い詰められたキャスターは今より盛大に虐殺を行って魂喰らいに走るだろう」

「ならば私達が街に出ることでキャスターへの囮になれば……」

「ダメだ。キャスターがセイバーに釣られて現れても、市街地である以上キャスターから周囲の住民を守りきれない。どんな手でも犠牲は出る。だが……一番犠牲が少ないのは待ち伏せなんだ、解ってくれセイバー」

切嗣の返答に今度はセイバーが瞑目する番だった。

切嗣は確かに外道な手段を用いる。だがしかし、彼は同時に一般人への被害を最小限に留める事に拘る。

そんな彼が考えた結果が待ちの一手ならば、今回は甘んじてそれを受けよう。

そう考えたセイバーは切嗣を真っ直ぐ見つめ、口を開く。

「分かりましたマスター。あなたの計画に従います」

その回答に切嗣は軽い感謝を述べようとして。

「侵入者だわ!! ……これは、キャスター!?!」

アイリスフィールの叫びに瞬時に戦闘態勢へと移行したのだった。

アインツベルン陣営は結界が捉えた侵入者の姿を水晶玉越しに確認していた。術を発動して居るのはアイリスフィール。これはお伽噺にあるような、所謂遠見の魔術である。

漆黒のローブに魚のような異形の顔。一度見れば忘れようがないその姿はまさしく昨日遭遇したキャスターに違いない。

「こいつが、例のキャスターかい？」

今までキャスター見たことがなかった切嗣に問われてセイバーとアイリスフィールは頷く。このサーヴァントこそ、狂気に駆られたフランスの『聖なる怪物』ジル・ド・レエ伯爵。

「……だけど、キャスターは一体どういうつもりなのかしら？」

アイリスフィールが戸惑うのも無理はない。キャスターは十人あまりの連れを伴って森の中を歩いてきた。そのどれもが幼い少年少女であり、最も年長の子供でもせいぜい七歳といったところだろう。皆覚束無い足取りでふらふらと彷徨う様に歩いていることから、魔術か何かで操られているのは明白だ。

「アイリ、キャスターの現在位置は？」

「此処から北東に約二キロ。まだ深入りしてくる様子はないわね」

キャスターが彷徨っているのは結界の外周部分。もう少し内側ならば結界内部に魔術的な攻撃を仕掛けられるのだが、流石に魔術師の英霊だけあって此方からは見ることは出来ても他には何も出来ない絶妙な位置取りをしている。

その様子にセイバーは硬い声で呟く。

「奴はどうやら誘いをかけています。私ならば数分である場所へ到達する事が可能だ。マスター、許可を」

何もセイバーは血気に逸っているわけではない。キャスターが引き連れた子供達の集団。その不吉な意味合いを理解している故の発言だ。それは切嗣とアイリスフィールも同様だった。

「まず間違いなく人質だろうね。……C4もジャベリンも使うわけにはいかなかった。……確かに僕にはお手上げだ。だが、セイバー、

手負いの君で奴に勝てるかい？」

切嗣の問いにセイバーは言葉を詰まらせる。手負いの身でキャスターと対峙する事が如何に危険かを知っているのは彼女自身だからだ。自身の直感にジル・ド・レエが油断ならない難敵だと声高に告げている。だがしかし、騎士として幼子が殺められるのを見過ごす訳には行かなかった。

セイバー考えを巡らせている最中、突如としてキャスターがその巨大な両目で真つ直ぐと水晶玉の視点を見つめ返し、にっこりと笑みを浮かべた。

——確実に此方に気付いている。

魔術師の英霊たる彼にとつて遠見の術を見破るなど呼吸より尚容易い事なのだろう。キャスターは真つ直ぐと水晶玉の中からアイリスフィール達を見据え、洗練された貴族らしい優雅な所作で一礼する。

『昨夜の約定を果たすべく、不肖ジル・ド・レエ、まかり越して御座います。我が麗しの聖処女、ジャンヌ・ダルクに、今一度、拝謁する事をお許し戴きたい』

その言葉に、セイバーはしっかと切嗣とアイリスフィールを見据える。既にセイバーは死地に自ら飛び込む覚悟を決めていた。その眼に切嗣は鼻から深く息を吐き、言葉を紡ぐ。

「僕はセイバーに任せるよ。……アイリはどうだい？」

アイリスフィールは未だに決めかねていた。セイバーを失うのが恐ろしい、セイバーが傷つくのが恐ろしい。その思考が堂々巡りを繰り返す中、キャスターは再度口を開く。

『ご決断は急ぎませんとも。こんな事もあるうかと時間を潰すための簡単な遊びは用意しております故……』

そんな呟きと共に、キャスターはその指をパチリと鳴らす。と、同時に周囲の子供達は「何故自分はこの様な所にいるのかな？」とでも言うように周囲をキョロキョロと見回し始める。キャスターが催眠術を解除した結果である事は誰の目にも明らかだ。

『さあ、鬼ごっこに参りましょう。私が十を数える間にお逃げなさい、

子供達。……………さもないと』

そう言いながら一番近くにいた子供へと手を伸ばすキャスター。その姿に言いようのない恐怖を抱いたセイバーは、届かないと分かりつつも制止の声を上げずにはいられなかった。

「止めるキャスター!!」

果たしてその想いが届いたのか否かは分からない。だがセイバー達が見つめる水晶玉の中で確かにキャスターはその動きを止めていた。

伸ばされたその腕の手首を、白いフリルの付いた袖から出たもう一つの手が締め上げ、そこに加えて、キャスターの顔面へと空気を切り裂く音を伴ってスニーカーの蹴りが叩き込まれる。

バーサーカー、ズエピア・エルトナム・オベローンとそのマスター、間桐雁夜。『正義の味方』の様な登場を果たした金と銀の流星は、子供達を庇うようにキャスターへと立ちほだかる。

「……………随分と良い蹴りだったね、マスター」

「……………スーパーマンになったつもりで思い切り蹴っただけなんだけだな」

「いやいや、スーパーマンになったつもりと言うのは些か語弊があるだろう?」

「まあ、確かにそうかもな」

吹き飛んだキャスターを視界の端に収めつつ、軽口を叩くズエピアと雁夜は周囲の子供達の前で高らかに名乗りを上げる。

「ヒーローが助けに来たぞ、子供達」

名乗ると同時に雁夜は素早く術式を組み上げ、刻印蟲を励起させる。数瞬でそれらを準備した雁夜は、先程の名乗りに呆然と此方を見ている子供達に向けてその紅い瞳を向け、魔術を待機状態で留めつつ、出来るだけ優しく声を掛ける。

「大丈夫だから、皆こっちに集まって。悪い奴をやっつけたら、すぐにおじさんがお家に帰してあげるから」

その声に反応し必死の様相で集まる子供達に向け、雁夜は内側からは外を見ることが出来ないと言うだけの単純な隔離結界を施す。

当然、そんなモノに閉じ込められた子供達は混乱するが、雁夜の優しい口調で告げられた一言によってその不安はある程度落ち着いた。「大丈夫。コレはバリアだよ。おじさんはスーパーマンだからバリアだって使えるんだ。皆、此処から出たらお家に帰れなくなっちゃうから、じっとしてらんだよ?」

数秒の後、全ての子供が落ち着いたのを確認して、雁夜は結界から抜け出し、使い魔を呼び寄せる。

「———翅刃蟲!!」

大量に呼び出された蟲の群れ。それが雁夜の号令で一斉に脱皮し、ギロチンのような爪とも顎とも取れる器官を持った巨大な羽虫へと羽化を遂げる。

翅刃蟲。唯でさえ人の腕程度ならば食いちぎる事の出来るその蟲は、雁夜の手によって更に強化されていた。死徒である自分の血を餌に育てる事で、より強靱で巨大な蟲と化したそれはもはや蟲と言うよりも大きさで言えば鱈場蟹に近い。

それに対抗するかのように、復活したキャスターもまた、宝具らしき本を構えて大量のタコに似た怪物を召喚し始め、アインツベルンの森は一瞬にしてタコと蟲がギチギチと威嚇の声を上げながら睨み合う人外魔境へとなり果てた。激突する軍勢。蟲が触手に捕らわれ、怪魔が蟲の顎に切り裂かれるその合間を縫うようにして紫電が駆ける。

子供達の安全を確認するや否やどす黒い魔力と共にキャスターへと接近する狂戦士。彼は十分な助走をつけるとスクリューかチェインソーの様に身体を回転。奇声を上げてキャスターに突撃した。

「カットカットカットカットカットカットカットオーツ!!」

その突撃は木々を薙払い地を抉り、ソニックブームすら発生させて怪魔ごと再度キャスターを吹き飛ばすに十分な威力を誇る人間砲弾。その直撃を死に物狂いで回避したキャスターは怒りも露わに吼える。

「おのれ匹夫めがツ!!」

下手な刀剣類より鋭いズエピアの鉤爪に数多の怪魔が切り裂かれ、ベチャベチャと不快な音を立てて地に落ち、キャスターの軍勢は既に半壊状態。だがしかし、キャスターことジル・ド・レエも並の英霊ではない。

「——ふんぐるいむぐるなふくとうるうるいえうがふなぐるふたぐん」

それは果たして呪文なのだろうか。名状しがたく、呪文と言うにはあまりに冒瀆的なその言葉と共に、キャスターは手にした魔導書に魔力を注ぎ込む。すると一瞬にして死した筈の怪魔がその肉片から再誕した。いや、再誕と言えば語弊がある。なにしろそれは飛び散った肉片の数だけその数を増しているのだから。

「成る程、今の呪文でハッキリしたよキャスター。人革の装丁、蛸に似た怪物の召喚、そして先程の呪文。『クアートアクアデインゲン』かとも考えたが、君のそれは恐らく『ルルイエ異本』だろうか?」

「そうでしょう!! 素晴らしいでしょう!! 我が盟友の究極宝具たるこの書程に神を冒瀆するものも有りますまいツ!!」 噛み合わない会話を交わしながら、ズエピアは腕の一振り数匹の怪魔を粉碎し、キャスターはその破片から大量の怪魔を召喚していく。狂人と狂戦士の争いは尚苛烈さを増し、森の木々はへし折れ、大地は怪魔の血に染まり、大気は戦闘の余波からかビシリと嫌な音を鳴らす。

雁夜が蟲の大群と簡単な結界で防御していなければ子供達は今頃良くて重傷、最悪タコのエサだろう。

そうならないようにと蟲や水の魔術を駆使して結界を防衛する雁



夜の瞳は、強い決意に溢れていた。

——— 今度こそ、後悔する事がないように、この子達を守る。  
そんな想いを胸に抱きながら、雁夜はまた眼前の怪魔を踏み潰した。

駆ける。 駆ける。 駆ける。

セイバーは一陣の疾風と化して森を駆け抜ける。

その顔は先程届かぬ制止の声を上げたときとは打って変わって喜びに満ち溢れる笑みを浮かべていた。

心のどこかで諦めていた。

騎士と呼べる程の人物はこの国には一人とて居ないのであるかと思っていた。

だが、それは間違いだった。

この人と人との繋がりが希薄になった極東の国でも、幼子の為に身体を張って戦える益荒男が未だ生き残っていたのだ。

間桐雁夜。 魔術師としては確かに甘い人物なのだろう。 魔術師は子供を囷に使うことすら厭わないというのに、逆にその子供を守るために今までひた隠していた姿すら晒してこの森へと現れたのだから。

だが、その気概はセイバーからの好感度を急上昇させるにたるものだった。

「……切嗣も彼のように護るための力を振るってくれば良いのです  
が」

あのバーサーカーと間桐雁夜のように、自身と切嗣と戦場に共に立つことが出来ればどれほど良いだろうか。

そう思ってしまう程にバーサーカー陣営の2人はお互いに背中を預けて戦っていた。

きっと、あの主従からは何か得る物が有るに違いない。

そう考えたセイバーは更に速度を増して。

一条の光となった彼女はトツプスピードでキャスターの迎撃に向かうのだった。

ランサーとケイネスがアインツベルンの森に到着した時点で、既に戦闘が始まっているのは明白だった。木々のへし折れる音や大地が砕け散る音と共に、膨大な魔力の余波が森の入口まで漂って来ているのだから気付かないわけもないのだが。

「ケイネス様、どうなさいますか？」

「ふむ。……城攻めのつもりで来たが、こうも激しく戦闘していると  
なればそちらの方が気になるな。アインツベルン以外のマスターに  
出逢えるやも知れん」

「では」

「ああ、戦闘地点へ急ぐぞランサー」

そう言うなりケイネスは走り出し、ランサーもその後を追って走り出す。

二人の影が森の中を駆け抜けていった。

「ふむ。埒があかないな」

そう呟きながらもズエピアの全身は正しく凶器と化して怪魔のこごとくを粉碎する。今までに倒した怪魔を戯れに数えてみたが、その数なんと741匹。それでも尚減ることがない怪魔はキャスターの持つ本が発揮する無尽蔵の魔力で駆動している。

「魔力炉とは羨ましいな、キャスター。私にも分けてくれないかね？」  
そう言いつつ本日五度めの突撃を決行するが、キャスターには未だ届かない。山のような怪魔が自ら突撃を受けることでズエピアの速度を削り、キャスター本体を守って居るからだ。

「フフフ、フフフフフ、どうです我が軍勢は!! ジャンヌへの拝謁の栄を賜るべく用意した悪魔の軍勢!! あなた方と其処な生贄達の骸を積み上げ、ジャンヌの元へと馳せ参じる為の無敵の軍隊!!」

「無敵ではなく無尽だろうか? 言葉は正しく使いたまえ。唯でさえ毛

程もない品性が更に墜ちることになるからね」

「黙れ、黙れ、黙れ!! 我が軍勢よ、其処な匹夫を滅ぼせエツ!!」

「またそのタコかね? 天井はせいぜい三回までにしてくれたまえ。観客が退屈してしまう。そもそも、我が軍勢という割にその軍勢がプレイヤーテイからの借用品なのは一体どういう見なのか詳しく解説していただきたいのだがね?」

挑発的な皮肉と揚げ足取り。雁夜が今日という日まで散々味わってきたズエピアの毒舌はこの状況になって尚切れ味を増しつつある。それに加えてその爪の切れ味も言葉以上に鋭く、キャスターの怪魔をイカの塩辛よろしく臓物 والعえにしてしまうのだからキャスターの心が穏やかであるはずがなかった。

「———いあいあくるうるう!!」

より一層強化され、体格も一回り巨大化した怪魔の群れ。その雪崩の様な攻撃の波はしかしズエピアに届かない。

だが。

「ぐうっ!」

「ッ!? 雁夜!!」

その数の暴力は雁夜には少々荷が重い。怪魔に締め上げられた雁夜はすぐさまズエピアに助けられたが、折角詰めたズエピアとキャスターとの距離が開いてしまう。絶体絶命とまでは行かないものの、このままでは千日手を繰り広げることとなる。

そうなってしまうえば数で劣る此方が不利。……かくなる上は雁夜と子供達を撤退させるべきかと考え始めたズエピアだが、不意に何かに気付いたようにその口角を吊り上げる。

「待たせたなバーサーカー!!」

「いやなに、女性を待つのは男の甲斐性と言うものだよ、セイバー君」  
飛来する碧の閃光は群がる怪魔を切り払い、ズエピアと肩を並べて結界の前に立ちはだかる。ズエピアと漸く登場したセイバーの戦力を足せば、キャスターの軍勢とも拮抗しうる。

だが、拮抗だけで終わるほど運命の女神の書いた脚本は甘くない。「おいおい、俺を差し置いてセイバーを口説きに掛かるとは卑怯だぞ

バーサーカー。セイバーの左手は俺が予約済なのだが」

「君が予約したのは左手薬指だったとは初耳だなランサー君。まあ赦してくれたまえ。君ほどの伊達男を前に私が勝つには抜け駆けしか有るまい？」

「お喋りも結構だが、口より手を動かさせ、バーサーカー、ランサー」

「……やれやれ、口説き甲斐が無いお姫様だね」

「フツ、確かにな」

赤と黄の双槍を振るうランサーが軽口と共に現れる。と、同時に雁夜が護る結界を庇うように水銀の壁が現れた。

「……ロード・エルメロイか」

「そう言う君はマキリか。……その規模の使い魔を自在に操るか。田舎魔術師にしては、やるな」

「お褒めに与り感謝感激恐悦至極だね。……その水銀、防御力ほどの程度だ？」

「この程度、雑作もない。何なら君はサボタージュしても構わないよマキリ」

「ハッ、冗談が上手いな。なら、遠慮は無しだ。——本気でやれバーサーカー」

「では遠慮なく」

雁夜のその声にズエピアはニヤリと笑うとランサーとセイバーに声を掛ける。

「ランサー君の槍は魔力を絶つ武器で違くないね？」

「ああ、確かにそうだが」

「そしてセイバー君の剣を覆っているのは圧縮した風だな？」

「ああ。しかし、バーサーカー、貴方は一体何を……」

「隙は私を作る。その隙にランサー君はセイバー君の風を踏んでキャスターへ突撃し、奴の持つ本をその紅槍で貫きたまえ。アレがこのタコを制御している」

「……成る程な、そういうことか。俺は乗ったぞバーサーカー」「……つくづく貴公は奇妙奇天烈な策を思い付くものだな。良いだろう、私も乗るぞ」

お互いに小声で交わすその言葉は怪魔を切り裂き、貫き、殴り潰す音に阻まれてキャスターの耳には届かない。

一見すれば追い詰められている三騎と二人に気を良くしたのか、キャスターは更に大量の怪魔を召喚しつつまくし立てる。

「ジャンヌと新たな匹夫めが加勢しようよ、この軍勢は破れますまい！ 例え一騎当千の強者でも、万の兵には勝てはしない!! フフ、フフ、屈辱でしょう? 先程からなにやら眩いているようですが、今更神に祈ろうと状況は好転しませんぞジャンヌ!! 我が愛にて堕ちよ!! 穢れよ!! 聖なる乙女よツツ!!」

サーヴァント三騎と無限の怪魔。勝機は唯一度。一層苛烈さを増すキャスターの攻勢を前に三騎の英雄豪傑は不適な笑みを浮かべて機を伺う。

全てはその一撃の為に。

大量の怪魔が絶え間なくセイバー達に襲いかかり、切断され、串刺しにされ、引きちぎられて、また再生する。

そんな中でズエピアの一撃入魂の攻撃が放たれたのは怪魔の波が途絶えたその一瞬。

ズエピアの姿が一瞬だけ「ブレた」直後。彼の口があり得ない程開き、彼とキャスターの間にはいた怪魔のごとごとくが喰われた。いや、「飲まれた」。

その機を見逃すほど騎士達は甘くない。

「バーサーカーが何をしたかは解らんが、今だランサー!!」

「言われるまでもないっ!!」

「いくぞ、『風王鉄槌』ツ!!!」

セイバーが放つ空気の砲弾。それはその射線上に居たミイラ状態から蘇生したばかりの怪魔を薙払い、キャスターへと迫る。だが、本命はそれ自体ではない。

空気や水などの流体中で物体が高速移動する際、その背後には負圧が発生する。例えば、風呂場で手を思い切り動かした時に手の後ろで水面がへこむのがそれだ。

さて、では、へこんだ水面は次の瞬間どうなるのか。

手から見てそのへこみより更に後方にある水が猛スピードで流れ込むことで「元に戻ろうとする」のだ。この時、手が進む方向と同じ向きへと水の流れが発生する。

ならば当然『風王鉄槌』の背後には「それを追い掛ける」風の流れが存在する事になり。

それを背で受けて加速したランサーは一時的とはいえステータスにしてA++の速度を獲得していた。当然、キャスターがそれに満足を反応できる訳が無く、精々つつさに「手に持つ物」で防御するのが精一杯。

そしてそれはランサーことデイルムッド・オディナを前にして決して「盾にはならない」物だった。

「抉れッ!! 『破魔の紅薔薇』 ツッ!!!」

駆け抜けざまに斬りつけられる紅の閃光。魔術を無効化するその槍はキヤスターが盾にした本の表紙を裂き、その『召喚魔術』を完璧に無効化する。となれば当然、魔力供給を絶たれた怪魔はその肉体を維持できなくなり、穢らわしい粘液へと成り果てた。

「キサマ、貴様、キサマ貴様キサマキサマアアアアツッ!!!」

「フツ、我ら三人が力を合わせればざっとこんなものというわけだ」

そう言つて油断無くキヤスターを見据えるランサーとその黄金の宝剣を構えるセイバー。そして口元の血を拭い、爪をギヤシャリと摺り合わせるバーサーカー。

まさに一撃による逆転劇。数の差は完膚無きまでに覆され、人質も奪われ、圧倒的に不利なその状況。だがしかし、セイバー達がキヤスターを追い詰めたのは一瞬の事。

『旦那ッ!! 危ないなら、逃げてくれッ!!』

キヤスターへと届いた存在へ訴えかける絶対命令。たまたま水晶玉で今回の戦いを見ていた龍之介の心からの応援は果たして「令呪の命令」となつてキヤスターへと働きかける。次の瞬間、キヤスターの身体から膨大な魔力が噴き出した。

「ふむ、まだ何か隠していたのかね？」

「フッフ、助かりましたよ龍之介。……………ジャンヌ、そうまで拒まれるのでしたら次回は更に陰惨で残酷な催しを準備させていただきますでしょう。……………それでは、私はこれにて失礼致しますぞ」

「待てッ!! 逃げるな外道がッ!!」

追いつがるセイバーより先にキヤスターの姿は薄れ、一瞬にしてそこから消失する。雁夜とズエピアがこの森に来る前に話していたとおり令呪はマスターとサーヴァントの魔力を合計した魔力で可能な奇跡ならば実現可能だ。

そしてその実現可能な奇跡の中には「瞬間移動」も含まれている。ただ、それだけの事。

確かにキヤスター陣営の令呪を一面奪ったのは十分な戦果だろう。だと言うのにキヤスターを逃がしたセイバーの顔色は悪い。



「……奴をしとめられなかった」

「そう気負うなセイバー君。取り敢えず其処の子供達は救えたと喜んで方が気が楽というものだよ」

「何故、貴方はそう落ち着いて居られるのですか、バーサーカー」

「ふむ、まあ『悪は必ず滅びる』からだと言えるだろうね」

「そんなモノは根拠がない。希望的観測でしかないではないですか!!」

そう言つてズエピアに詰め寄るセイバー。キャスターを逃がしてしまつたという怒りからついつい語気が荒くなる彼女に、ズエピアはニコリと、セイバーが知っている「誰か」に似た雰囲気であらう。

「滅びるとも。何しろ私は『正義の味方』なのだから」

その答えに、セイバーはふと記憶の奥を擦られたように感じた。

確か、つい最近、誰かから同じように『正義の味方』という単語を聞かなかつただらうか。

そう考へて出た答えは、セイバーの口を突いて出る。

「切嗣………?」

——僕はね、『正義の味方』になりたいんだ——

確かに、彼はそう言つていなかつたか?ならば、彼は切嗣の理解者足り得るのではないか?

思わぬところで自身のマスターと歩み寄るきっかけを得たセイバーは、怒りも忘れてしばし呆然とする。

そして、その名を呼ばれたセイバーのマスターは、アインツベルン城のサロンで水晶玉を前に、非常に複雑な表情を浮かべているのだつた。

ズエピアに『正義の味方』とは何なのかと問い詰めるべく考えに臥せていた顔を上げたセイバー。だがしかし、状況は彼女が物思いに耽っている内に大きく変化していた。

「ご協力ありがとうロード・エルメロイ。等価交換になるかは判らないが、私に答えられる範囲で何か一つ質問にお答えしよう」

「……ふむ、宜しい。ならば、貴様の宝具は何だ、ズエピア・エルトナム・オベローン」

いつの間にやら子供達は眠りこけており、ズエピアとケイネスが何やら会話をしているその状況。完全にセイバーを放置して話が進んでいるらしい。

「私の宝具か。バーサーカークラスだと『武器としての』宝具はないな」

「……成る程。その言葉、誓って嘘はないな？」

「なんなら、セルフギアス・スクロールを書いても良い。嘘はないのだからね」

「其処まで言うなら信用しよう。確証を得たわけではないがね」

そう言つてニヤリと笑いあうズエピアとケイネス。何やら魔術師特有の会話らしいが、騎士二人と三流魔術師にはいまいち解りづらい。そんな訳で一段落付いたと見たセイバーはバーサーカーに話し掛ける。

「バーサーカー、貴方に聞きたい事がある」

「ふむ。私は冬木教会にこの子供達を連れて帰らねばならんのだがね。……まあ、恐らくマスターの召集があるだろうから君のマスターを連れて協会に来たまえ。そこで話を聞こう」

「………分かりました。しかし、どうやってこの子供達を運ぶのですか?」

「まあ見ていたまえ。『私の宝具』で運ぶ」

そう言つてからズエピアの姿がキャスターと戦っていた最中と同じ様に「ブレる」。

そうして暫くするとズエピアの周囲に立つ人影が一人。二人。三人。四人。五人、六人、七人。

「さて諸君、子供を担いで撤収だ。エキストラとは言え今宵の舞台で捕らわれの姫君を演じきった名優諸君だ。粗相の無いようにしたまえ」

そう言うズエピアの指示に従い子供を担ぐ彼等は、人種、性別、そして何より年代がバラバラだった。騎士、メイド、中国拳士、Tシャツ女性、鬼の様な益荒男、学ラン高校生に、黒いなまもの。

全く何の共通点も見いだせない彼らは、きびきびと動いて子供を抱えると冬木の教会に向かつて闇を駆けていった。

「バーサーカー、何なのですか？ 今のは？」

「私の『宝具』の極々一部だ。……まあ、実戦レベルで使うとマスターが大変なことになるのでね。流石においてそれと全てを晒すわけにも行かない。実質的に戦闘には使えない宝具だ。事実、先程出した彼らはキャスターの怪魔より弱い」

「確かに彼ら自体はそれ程の脅威とは感じませんでした」

だが、セイバーの直感はそれでもこの『宝具』が宝具などではない何か途轍もないモノである様に感じている。

そんな風に悩む彼女を後目にズエピアは雁夜と共に冬木教会の方へと消える。後にはセイバーとランサー。そして薙ぎ倒された森の木々だけが残っていた。

「ズエピア、彼処までヒントを出して良いのか？」

教会へと向かいつつ、そう問いかける雁夜は咎めるような口調ではない。単に、本当に大丈夫なのかと確認するだけの言葉だ。

「何、ハツタリだから問題ないよ。宝具ではないにしろ、本当にアレは戦闘向きではないからね。………雁夜が瀕死になるほど魔力供給するなら話は別だが」

「本当にそんなにヤバいのか？ その『虚言の夜』は」

「危険極まりないとも。……何しろアレは『空想具現化』と『固有結界』

の合わせ技だよ？ 消費する魔力も通常戦闘とは桁違いだ」

「……まあ、凄そうだということはわかった」

「それは一般的に何も解っていないという意味なのではないかね？」

「そうとも言うな」

「そうとしか言わないだろう」

そんな掛け合いと共に夜を駆けるズエピアと雁夜は冬木教会へと到着。

減らず口を叩きながらその内部へと足を運ぶのだった。

さて、教会へと子供達を保護し、一仕事終えたズエピアは教会の一室、言峰綺礼の部屋へと通されていた。雁夜は「もう疲れたから帰って寝る」と言い残し、既に下水道へと帰還している。まあ流石に使い魔の一匹ぐらいは照明器具の近くでパタパタと飛んでいるのだが。

「……首尾は上々といった所か」

「ふむ、まあ綺礼君にも話した通り、私のスキルの一端を宝具だとハツタリをかますというサブミッションもクリアしたし、キャスターの宝具についてもかなりの情報を得た」

「確かに。私のアサシンも戦闘を確認している。……あれは大出力の魔力炉か?」

「それだけではない」

ズエピアはそう言っって頭を振る。

「アレはいわばジル・ド・レエ専属の魔術師だ。魔力炉と魔術の発動代行。かなり面倒な宝具だと言えるだろうね」

「……厳しいか?」

「まあ、正直に言えばね」

そう言っって苦笑するズエピア。と、そのとき、ドアからギルガメツシュが入ってくる。

「吸血鬼、私の臣下として命を果たしたようだな?」

「ああ、あの『子供を出来るだけ助けろ』という命令か。確かに今夜の分は全員無事に回収した。……しかし、君は案外子供好きなのだな、ギルガメツシュ」

茶化すズエピアにフンと鼻を鳴らし、ギルガメツシュは彼の宝具『王の財宝』を開く。

その中から出てきたのは、一見すればただの拳銃。だが、ズエピアの眼にはそれが何であるのかハッキリと分かった。

「有り難く思えよ、何しろこの我が手ずから下賜するのだからな?」

「……今回ばかりは真剣に有り難うと言わせていただくよギルガメツシュ王。……まさか『黒い銃身』を再び握る日が来るとは思っていな

かった」

「『黒い銃身』?」

訝しがる綺礼にズエピアはニヤリと笑って答える。

「私の作った礼装だよ、綺礼君。……本来ならばエジプトにある筈のものなんだが」

「私の宝具を前に距離など無意味だと言うわけだ綺礼」

その回答に暫し頭を捻った綺礼はポンと手を打って頭に電球を光らせるというレトロな閃き方をする。

「アレか、『とくりくよくせバ〇グ』の原点」

何やら独特のだみ声で呟く綺礼。その声と顔のアンバランスがツボに入ったらしく身悶えするギルガメッシュを横目に、ズエピアは

「喩えは的確だが、物真似をそのバリトンにするのは止めたまえ。ギルガメッシュが過呼吸で死ぬ」

「それは困る。私が弄れないではないか」

「仮にそうなたら君のせいだろうね。……まあ良い。それより私の礼装だが、コレはエーテルで活動する物体全てを自壊させる兵器だ。よって身体をエーテル塊で構成するサーヴァントには触れることすら出来ない。今回の聖杯戦争では、実質的に受肉している私しかコレを持てるサーヴァントは居ないね。スペック的には装弾数13発、魔術的機構によりほぼ全ての銃弾を使用可能、全長271.3ミリ、重量2キロ、といったところか」

「ふむ、その礼装が何なのかは理解した。……しかし、お前は何故受肉している? ズエピア」

綺礼の質問。今まで有耶無耶になっていたソレ。余程誤魔化す理由でもあるのか、それともハツタリか。どちらにしろ回答は得られないとさえも質問した綺礼だったが、以外にもズエピアは軽い調子で答えを返した。

「簡単な事だよ。この時代にいた『私』を私にアップデートして融合しただけだ」

「……意味が分からん」

「私は1990年代にはまだ生きていたと言うだけの話だ。その身

体、もとい構成因子を私を核として定着、肉体として復活させ、『英霊ズエピア』として現世に再誕した」

「……構成因子？」

「……ふむ。そう言えば君は純正の魔術師ではないのだったね。ならば一般人に分かりやすい様に説明しよう。世界中にフワフワと雲か霞のように漂う粒子。コレが1990年代での私だ。この粒子は私の肉体が魂を失い変質した物で、魂を入れてやればまた私として復活する。そこに魂代わりにサーヴァントである私を当てはめ、完全無欠のズエピア・エルトナム・オベロンとして蘇った。……有り体に言えば脱け殻に魂を入れて蘇生したのだよ」

ズエピアの言ったソレは、ある意味彼にしかできない受肉方法。流石に『自分を構成する全ての霊子を、航海図により海流の様に世界中を巡らせる事で現象にして保存する』などという馬鹿げた策を生前に講じた英霊は後にも彼だけだろう。

何故、ズエピアのステータスが群を抜いて突出しているのか？

その疑問点は今、漸く綺礼の中で解決した。

そもそもサーヴァントとは型に無理やり押し込めることで召喚する事が出来る、劣化した英霊。ならば、名も知られぬ存在であるとはいえ、『完全な英霊』がサーヴァントごときに遅れを取るはずもない。流石に此方に持ち込まなかった宝具は持つておらずとも、肉体が最初から持っている『現象』と必殺礼装『黒い銃身』が揃った今、彼はまさしく英雄王に並びうるサーヴァントとしてその身を構成していた。

そしてそれは、綺礼に簡単な問題点を指摘させるには十分な物だ。

「ギルガメッシュ」

「何だ……ゲフォツ……綺礼……ブフォツ」

「聖杯戦争が破綻している事に気が付いたのだが」

「ゲフツゲフツ……うむ、幾分か落ち着いたな……。さて綺礼、そんなモノはどうに我も知っている。……時臣の奴は気付いて居ないらしいがな」

「時臣師のうっかりは今に始まった事ではない。しかし、とうに知っ

ているとは?。」

綺礼の問いに漸く笑いから解放され、威厳を取り戻したギルガメツシユが答える。

「セイバーとこの吸血鬼が受肉しているのは前々から承知している。その上、戯れに聖杯が隠してあるという山に登って見たが、どうやら聖杯の中身はドブの中身とさして変わらんようだぞ?。」

ギルガメツシユからの新事実はこの戦争を大きく覆しうるもの。

そしてそれにズエピアが補足する。

「故に全マスターの召集と同時に御三家の緊急会談を行うわけだよ、綺礼君」

それは、この戦争が通常の聖杯戦争から大きくズレ始めた事を告げる声。

捻れ狂った歯車はさながら鼠が廻す回し車のごとくその回転を加速させる。

廻せ。廻せ。廻せ。



聖杯戦争開始から三日目の早朝。朝早くに打ち上げられた魔力パルスはウエイバーの安らかな眠りを妨げるには十分過ぎるもの。いい加減にライダーのいびきには慣れてしまったが、元来彼は乙女のように繊細な男なのだ。このマツケンジー宅に間借りした当初も枕やベットの違いでなかなか眠れなかった程である。

「……教会からの魔力パルス？　こんな早朝に何の用だよ……」

そうこぼすウエイバーに、隣で窓を覗くTシャツにジーンズ姿のライダーが声を掛ける。彼が現在着ている服は、「現代風の衣装を着て街を歩きたい」などと言うライダーにウエイバーが仕方なく古着屋で買った来たものである。本人曰く「世界を胸板に乗せるのは男の浪漫だ！」等と意味不明な事を言っているが、実際の所バーサーカーやセイバーの恰好に影響されただけである。

「むう、今日は折角坊主が服をくれた以上散歩に出ようと決めこんどったんだがなあ」

そう言うライダーは伝承によれば生前から征服した土地の衣装に身を包んで今と同じような事を言っては部下を困惑させていたというのだから、ウエイバーからすれば部下の皆さんに妙な親近感を覚えるのも致し方ない事であろう。

「……これは異例の事態なんだ、つべこべ言っていないで準備するぞライダー」

「む、出陣か？」

「使い魔の準備だよッ!!」

「おお、そうであったか」

つつこむウエイバーにハッハッハと笑うライダー。この聖杯戦争においてある意味一番でこぼこコンビである二人は今日もでこぼことかみ合っているのであった。

冬木教会。その礼拝堂に集ったケイネスとウェイバーの使い魔の前に座るのは御三家の代表とそのサーヴァント。和装に白髪赤目の青年『間桐家六代目当主』間桐雁夜。女王のごとき風格と銀髪を誇る『聖杯の守り手』アイリスフィール・フォン・アインツベルン。今日も深紅のスーツに身を包む『遠坂家五代目当主』遠坂時臣。

そして、彼らのさらに前に立っているのがこの教会の主、言峰璃正神父である。

「マスター諸君。今日、早朝より集まって貰ったのはほかでもない。昨夜明らかになったキャスターの悪逆非道と、大聖杯の管理者である間桐家当主からの最重要報告についてである」

そういつてゆっくりと教会を見まわしてから神父は指を一本立てて一つ目の議題へと移行した事を示す。

「さてまずはキャスターの悪行に対する特別ルールの発表をさせていただきます。かのサーヴァントとそのマスターは冬木市を賑わす幼児連続誘拐事件と一家惨殺事件の犯人であり、善良な市民を殺めるばかりか魔術を単なる凶器として使用し、その秘匿を行う気配が全くない。これはあまりにも由々しき事態であるため、今回監督役として臨時ルールを発動させていただく事と相成った。一つ、キャスター討伐までキャスター以外との交戦を禁止すること。二つ、キャスター討伐に尽力した陣営、或いは同盟には報償として令呪一画を贈与する」

その言葉と共に捲り上げられる神父の腕。其処には大量の「令呪」が刻印されていた。

預託令呪。聖杯戦争において一部の令呪が未使用状態で戦争が終結した場合、その令呪は監督役へと預けられ、保存される。それは時として監督役の判断で各マスターへと自由に分配する事が可能なのだ。

「まずは此処までで何か質問があるものは？」

そう問いかける神父の声に答える者はいない。それを確認してから神父は雁夜へと視線を向ける。

「では間桐家当主殿、お話を願います」

そう言つて雁夜と入れ替わるように席についた言峰神父。その視

線を受けつつ雁夜は口を開く。

「聖杯戦争が始まって早二百年。小聖杯の管理を司るアインツベルン、冬木の大聖杯の管理を司る遠坂と共に、間桐はサーヴァントシステムの管理を行ってきた」

そう前置きしてから雁夜は本題を切り出す。

「さて、その聖杯戦争の歴史の中で、今回は異常なバグがサーヴァントシステムに発生している。英霊ではないサーヴァントが二騎も参加しているこの状況を異例の事態と判断した間桐は先日より調査を行っていた。今回の聖杯戦争を断念し、遠坂に協力しているのも調査に専念するためである」

そういう雁夜のセリフは淀みなく、河川の如く流れるような語り口で、魔術師というよりは役者然としている。

それもその筈、この語りは雁夜とズエピアで事前に打ち合わせ、雁夜が何十回と練習した「台本通りの台詞」なのだ。

「まず、先程話題に上がったジル・ド・レエ。彼は英霊というよりは悪霊に近い。いわば、『英霊としての側面を持つ悪霊』だ。そして、私、間桐雁夜が召喚したズエピア。彼は、真祖の吸血鬼故、精霊種にあたる。どちらも純正の英霊ではなく『悪』の面を持つ靈魂だ。それらを踏まえ、セカンドオーナーたる遠坂、監督役の言峰璃正神父の両名から力をお借りして調査に伴って頂き、大聖杯の稼働状態を確認した」

監督役の息子である言峰綺礼のアサシンと遠坂時臣のギルガメッシュに協力を仰いだため嘘は断じて言っていない。事実通りに聞き手が受け取るかは知らないが。

「結果、聖杯が汚染状態にあることが判明した。本来無色透明で在るべき聖杯の中身が何らかの要因により『願いを最悪の過程を経て叶える』出来損ないの願望機と成り果てているらしい」

その発言を終えると雁夜は一息ついて皆に告げる。

「質問はあるか？」

雁夜の発言に一瞬静まった教会。その中でスツと伸びる手が一つ。調査に参加していない御三家の一角、アインツベルンのアイリスファイルである。

「間桐雁夜、二つほど質問しても良いかしら？」

「ああ、質問が無いかと訊いたんだから幾つでも答えるさ。わかる範囲だけだな」

「まず、何故調査にアインツベルンを同行させなかったのか、教えて戴きたいのだけれど？」

「それは単純な理由だ。同盟相手でもなければ、連絡先もわからない。その上直接接触しようにも庭にクレイモアやらフアランクスやらを置かれたんじやおちおち会いにも行けない。使い魔も城には近づけなかったしな」

「……それは遠坂もじゃない？」

「時臣の家には黒電話があるからな。電話で連絡できた」

「……なるほどね、一応納得したわ。では次なのだけど、仮に今の聖杯に『大金持ちになりたい』なんて願ったらどうなるのかしら。先程の説明ではいまいち解りにくかったのよ」

「推測だが、そいつの周囲にいる人間を皆殺しにして有り金巻き上げるんじゃないか？」

「『世界から争いを無くす』だったら？」

「まあ、人類を皆殺しにすれば戦争は起こらないからそうするだろうな」

「じゃあ逆に悪意を持った人間が『誰かを殺せ』と願ったら？」

「アメリカとソ連……じゃなくてロシアからありったけの核ミサイルを飛ばして対象を地域ごと消し飛ばすとかじゃないか？」

雁夜の口から出る回答。淡々と最悪の過程を経て結果に至る様を答えるそれはアイリスファイルを黙り込ませるのに充分であり、そんなアイリスファイルを見てもう質問が終わったと判断したのか、雁夜はもう一度問いを投げる。

「他に質問がある奴はいないのか？」

その声とほぼ同時に、冬木教会にある固定電話がコールされる。神父が受話器をハンズフリー設定にしてから取ると、受話器から誰もが聞き覚えがある野太い漢の声が響く。

『バーサーカーのマスターよ。余だ、イスカンドルだ』

「知ってるよ。……質問か？」

『流星はあのバーサーカーのマスター、話が早い。……ぶっちゃけ、その聖杯の汚染つうのは何なんだ？』

「ふむ、コレは最後のお楽しみに取っておこうかと思っただがな。まあ、いいか。……聖杯の中身はサーヴァントだ。サーヴァントシステムの管理者として断言できる。アインツベルンの爺さんが無理やり付け足したクラスがまだ稼働状態だからな」 その答えに再びざわめく教会。だが、イスカンドルと雁夜はそれを気にする風もなく会話を続ける。

『ソイツはまた難儀だのう……で、そのサーヴァントつてのは何なんだ？』

「現在稼働状態にあるクラスは7つ。セイバー、ランサー、アーチャー、ライダー、キャスター、バーサーカー、そして『アヴェンジャー』。過去、アヴェンジャーとして召喚されたのはただ一騎だな」 『ふむ、其奴の名は？』

そう問うライダーに、雁夜は苦虫を苦汁で飲み下したような渋面で吐き捨てる。

「アンリマユ。ゾロアスター教で『この世全ての悪』とされる化け物だ。……先の聖杯戦争でアインツベルンが召喚したろくでもない亡霊だよ」 『なるほどなあ、そんな渾名の付いた奴なら確かに汚染してもおかしくねえわな。うむ、ではな、バーサーカーのマスターよ』

ライダーはそう呟くと、電話を切る。

それを合図に、雁夜は一つ咳をするとなよつとした雰囲気消し、先程の当主然と雰囲気を出し始める。

「さて、質問も無いようなら纏めに入らせていただく。……宜しいか？」

そう言つて皆を見回し、最終確認をした上で雁夜は台詞を紡ぐ。

「キャストの悪逆非道、聖杯の汚染。どちらも聖杯戦争の継続を断念しうる不安要素だ。……だが諸君はその程度で断念するような甘い理由で戦争に挑んでは居まい。其処で間桐は参戦者諸君に提案する」

その言葉と共にキツと見開かれたその目はルビーやスピネルの如き真紅。

引き込まれそうになるその眼に力を込めて雁夜は吼える。

「汚れた程度で聖杯を諦める？ 否!! 器が汚れて居るなら磨け!! 中身が腐つて居るなら注ぎ直せ!! 其処までしてこそ聖杯はこの地に招かれる!! ならば今は我等尋常な魔術師と正常なサーヴァント同士で争っている場合だろうか？ 否、否、否!! 今こそ一時の盟を交わし、清浄な聖杯を取り戻すべく手を結ぶべきだ!!」

そう一息に叫んで、周囲の空気を完全に掌握した雁夜はスツと柔らかな表情に戻り、何事も無かつたかのように告げる。

「故に。私、間桐家六代目当主間桐雁夜は提案する」

そう言うなり今度は暫し沈黙。教会の空気は最早雁夜の意のままに動き、溜めによって更に視線を惹き付けた雁夜は最後の仕上げに入る。

「私が提案する聖杯浄化の為の戦争。これはもはや聖杯戦争ではない。聖杯戦争は暫し休戦とし、次なる戦端を開くのだ」

舞台の上で役者は語る。

「聖杯奪還戦争。この世全ての悪から我等の聖杯を奪い返す為の戦争。これが間桐の提案する『五陣営による対キャスト、アヴェンジャー同盟』だ」

雁夜の提案をもって終結したマスター召集。『この同盟に参加せんとする者は本日午後七時に冬木教会へ集え』との旨を伝えると雁夜は時臣と共に教会を出て街へと消えた。もちろん、日除けの唐傘はしっかりとさして。

そんな雁夜を見送ったズエピアに声を掛けてくる女性が二人。アイリスフィールとセイバーである。

「バーサーカー」

「ふむ、セイバー君か。……正義の味方とは何か、だったかね？」

「その通りです。……貴方が言った言葉がどうにも引つかかってしまつて」

「ふむ。正義の味方とは巨悪を討ち、市民を守るヒーローなのだ!!

ということが聞きたい訳ではないだろう？」

「無論だ。その程度ならば誰もが理解できる」

「……君のマスターに当てはまるかは知らないが、私なりの『正義の味方』を語ろうか。多少とはいえ短い話ではない。座つて聞きたまえ」

そう言つて、咳払いをしたズエピアは自身が真つ先に椅子に座り、語り始めた。

「正義の味方というのは一種の矛盾を孕んだ狂人達の事だ。種類は幾つかあるが『多数を助けるために少数を殺し尽くす狂人』『自らが究極的な絶対悪となることで他者を救済する狂人』『敵も味方も一切殺さず、自分一人でひたすら全ての業を背負う狂人』などが多いだろうか。……私は『社会的に孤立した人間を喰い、その犠牲の上で人類の終焉を阻もうとする狂人』だね」

そう切り出して、ズエピアはセイバーとアイリスフィールを見つめる。

「さて、何故私が正義の味方に成り果てたか？ それは『答え』を観たからだ」

「答え？ いったいなんの答えなのかしら？」

「人類滅亡という避けられぬ未来を観たのですよ、姫君」

映画や小説に良くある根源的な災厄、人類滅亡。その単語を噛み締めるようにアイリスフィールはオウム返しに呟いた。

「……人類、滅亡?」

「その通り。……それを観た私はその未来を回避すべく行動を開始。神すら殺す礼装を生み出したり、演算の果てを歪曲して解釈しようと躍りになったり、様々な対策を試みたよ。だが結局それらは実を結ばず、私は最終手段として自らの肉体を死徒に改造。世界の果て、即ち『』に至り、『第六魔法』を改竄しようとした」

そうサラリと言うズエピアだが、最後の内容はそれ程軽々しく言い捨てるべき内容ではない。『』への到達は全ての魔術師の最終到達点。それに至ったという目の前の男はやはり並の怪物ではない。

そんな思考を一旦切って、セイバーはズエピアに確認の言葉を返す。

「……成功、したのか? バーサーカー?」

「いや、残念ながら私は失敗したのだよセイバー君。……だが、私は諦めなかった。死徒で駄目なら真祖に成って再び挑むまで。先程言ったように全体から見れば少数とはいえ、1500年間人間を喰い続け、力を蓄えて『とある手段で』真祖の肉体を得た私は再び第六魔法の改竄に挑み……今度は成功した」……では、人類は滅ばないのですね?」

そう確認するセイバーに、ズエピアは首を横に振って答える。

「いや、滅ぶ。まず、私は第六魔法を改竄したが、それは私が第六魔法を使えるという意味ではない。私はあくまで『』に到達しただけで魔法使いでは無い」

「ねえ、バーサーカー。『』に到達したなら魔法に目覚めるんじゃないの?」

アイリスフィールの疑問の声に、ズエピアは優しい口調で答えを返す。

『』に到達すれば必ず魔法使いになるのなら人類史上にぎつと百人近い魔法使いが居たことになるね。『』に到達した場合得られるのは『新たに法則や事象を生み出す』や『人間を超越する』といった



様々な特典の中から一つだ。……私の場合、私が所持する『固有結界』が尋常ならざる進化を遂げただけで魔法には至らなかつたという訳だよ」

「なるほどね。……話を遮つてごめんなさい」

「なに、私は構わないとも。……では、セイバー君への返答。その二つ目だ。仮に、誰かが第六魔法に至つても人類は滅ぶ」

その回答は「成功した」という内容を自分自身で否定するもの。当然、疑問を感じたセイバーはズエピアに問いを投げかける。

「それでは何も変わっていない。貴方は成功したのだと言いませんでしたか？」

「ふむ、確かに言い方が悪かつた。人類は滅ぶ。だがそれは、人類が次なる新生物に進化するからだ。私は『現在の人類は滅ぶ』という結果を変えずに、過程を『人類の進化』に固定したのだよ、セイバー君」  
「ならば、確かに成功ですね。人類主観で観れば人類は滅ばないにも関わらず客観的には『ヒト』は滅んでいるのだから」

そう言つて納得したセイバー。そんな彼女に、ズエピアは微笑みつつアドバイスを述べる。

「セイバー君。私の正義の味方としての結末は悲願達成だつた。だが、数多の正義の味方達は私程幸運ではない。家族を犠牲にし、自身を生贄に捧げ、それでも到達出来ない者が居る。……そんなわけで成功者たる先輩から後輩たる君のマスターにアドバイスだ。人を頼りたまえ。お互いがお互いに殺されても尚友と呼べるような本物の友人を得ればなお良しだ」

「……その言葉、切嗣に伝えておこう。ありがとうバーサーカー。手間を取らせたな」

「いやいや、可愛らしい女性と話をするのを手間と思う男はいないとも。……では、私はこれで」

「ああ、さらばだバーサーカー」

「また会おうセイバー君」

挨拶と共に教会から去るズエピア。それを見送るセイバーとアイリスフィールは、何かを得たように感じていた。

同時に、ズエピアがどうしようもない程の強敵だとも理解している。

それでもなおセイバーは、彼に挑む。彼のいう正義の味方。人類救済の体現者たるそれは相手にとって不足はない。

いずれくる彼との戦いに想いを馳せる彼女の口元は微かに緩み、不敵な笑みを形作る。

だが、今はまだ、その時ではなく。

孤高の騎士と優しい狂人の闘いは未だ遠い未来の事である。

教会を抜け出した時臣と雁夜。現在、彼らは冬木にある喫茶店『アーネンエルベ』を訪れていた。

和装で白髪の青年と深紅のスーツを着た顎髭の青年2人がコーヒートと紅茶を片手にレモン風味のスフレチーズケーキとシナモンが効いたアツプルパイをつまむ姿は違和感の塊以外の何者でもないが、この店内でそんな風景はザラなもの。

ウェイターが青髪赤目、常連さんは和服の上から赤のジャケットと、奇抜な客と店員しか居ないこの店に常識を要求するのは無粋なものだ。

何しろ、この店は『第二の魔法使い』キシユア・ゼルレッチ・シユバインオーグが制作に関わったある意味曰く付きの店なのだから。

「ふむ。雁夜と此処に來ると昔を思い出すな。葵と君と私の三人でよく遊びに來たものだ」

「……ああ、そうだな。お前はよくうっかりで『紅茶』じゃなくて『昆布茶』を注文してたし、俺は飲めもしないブラックコーヒーを頼んで意地を張ってた。……って、やめろよ。昔を懐かしむと、三十路前なのを改めて感じるだろうが」

「ははは、違うない。……で、本題なんだが」  
「分かってるよ」

そう答えた雁夜が袂から取り出したのは分厚い封筒。その表面には『円蔵山調査報告』の文字がプリントされている。

「これが今回の調査の詳細かつ正確な内容だ。ありとあらゆるデータを添付してあるから後で確認しとけよ」

「ああ、ありがとう。……しかし、先程は当主らしかったのに、やはりこうしてみると君は君だな」

「公私の切り替えは社会人の基本だろ。……変わってないのはお前もだしな、時臣。桜ちゃんを送り出す時に限ってうっかりを発動させる事も無いだろうに」

「うっかり？」

「先々代、もとい臓硯の爺さんは俺が帰って来た頃には完全にイかれてた。後継者の俺が海外留学してるのに桜ちゃんを引き取ったのはまだ良いとして、後継者として扱うべき桜ちゃんを拷問してやがったからな」

「なっ!? ……桜は、桜は大丈夫なのか雁夜!?!」

雁夜の発言に血相を変える時臣を見て、雁夜は内心安堵した。やはりこの『うつかり大明神』はワザとあの蟲妖怪に我が子売り渡した訳ではないのだと。……ならば、この男『遠坂時臣』に雁夜は恨みを向けるべきではない。そんな権利は雁夜に無い。自身もワザとではないにしろ桜を蟲蔵にぶち込んだ元凶なのだから。

こいつを恨んで良いのは桜ちゃんだけだ。

そう考えを固めつつ、雁夜は一応の腐れ縁として言葉を続ける。

「まあ、今のところは俺が保護してるから大丈夫だ。だが拷問のせいで感情が欠落寸前だし、お前を恨んでるかもしれない」

「そう、か……………。私がもう少し思慮深く行動していれば…………」

「まあ確かに、何で親戚のエーデルフェルトを頼らなかつたのかを問いたい所だが、今はそんな事はどうでもいい」

「どうでもいい…………? どういう意味かね? 返答次第では私も流石

に怒るぞ雁夜」

ムスツとした表情の時臣に、コーヒードで軽く口を湿らせつつ雁夜は答える。

「過去を悩んでる暇があったら今を考えるべきだろ。……桜ちゃんはまだ生きてるんだ。いつか、この戦争が終わった後で謝って、それから凜ちゃんと葵さんを連れて遊びに来い。戸籍上は俺の子だが、実の親つてのは大事だ。実の親に会ったことが無い人間が言うんだから間違い無いぞ?」

「…………そうか。…………そうだな、いつか近い内に桜に会いに行かせて貰うよ、雁夜」

何やら感動気味に呟く時臣に苦笑しつつ、雁夜はケーキを口に運ぶ。と、逆襲するかのように時臣が口を開いた。

「しかし雁夜。君は好い加減に結婚しないのかね? いや、君が葵を

好きなのは学生時代から知っている。が、そうは言っても魔術師としても社会的にもそろそろ結婚を視野に入れた交際相手ぐらい居ても良い筈だが」

「……悪かったな、横恋慕で」

「いや、横恋慕ではないさ。君と私が葵を好きになったのはほぼ同時期だし。……そういう話ではなく、そろそろお見合いの話ぐらいは無いのかね？ 間桐は遠坂、アインツベルンと同じくかなりの名門だ。縁談の一つや二つありそうなものだがね」

「……縁談か。何故かは知らんが無いな。だけど、それがどうかしたか？」

「いや、見合い程度なら私がセツティングしてやろうかと」

時臣のその発言に思わず咽せつつ、雁夜は手で『要らない』との旨を示す。

「そうか。まあその気になればいつでも言いたまえ」

「ああ……まあ、その日が来ればな」

お茶を濁す雁夜とクスクスと笑う時臣。

腐れ縁で繋がった男二人の会話はそれから暫く続いたのだった。

所変わってケイネスの工房。

先程から同盟に関して検討し合っているランサーとケイネス。それを眺めるソラウはいつものツンと澄ました表情だが、内心ではニヤニヤしていた。

先日ケイネスがデイルムツドの事を調べるべく本屋に足を運ぶのに同行した彼女は何となく『とある雑誌』を手にとって読んだのだ。それこそ、最近のソラウが妙にケイネスに優しかったり、デイルムツドにベタベタしていない原因である。

『水無月』。女性向けコーナーに置いてあったその雑誌はソラウの価値観を突き崩すに十分なインパクトを彼女に与え、デイルムツドの『愛の黒子』など目ではない程の興奮を彼女にもたらした。

BL。某ハンバーガーチェーンのレシートにあるベーコンレタスバーガーの略号ではない。ボーイズラブの略である。ソラウが偶々それを扱う雑誌を手にとったのはある意味運命的なモノだったのだろう。

美少年や美青年によって繰り広げられるストーリーはソラウに自身の特殊な感情を自覚させるに十分な程魅力的であり、彼女は自分が今まで男性に恋愛感情を抱かなかった理由をついに理解したのだった。

そもそも今となって冷静に考えれば『イケメンを前にしてわざわざ魅了を受けないときめかない』のは変ではないか。事実、魅了を試しにレジストした所、ソラウにとってデイルムツドと言えども『ただのイケメン』であり、恋い焦がれる程のモノではなかった。

やはり真に自分の心を揺さぶるのはBLなのだろうと自覚してみれば、何と世界は魅力的であろうか。まず、手近に『優秀だが堅物な主人と忠義のイケメン騎士』などというストライクゾーンの下真ん中直球な二人組が居る時点で天国である。しかもその片方は自身の婚約者でもう片方は自分が魔力供給する事で現世に止まる事が可能な英霊。つまり、横から見てニヤニヤするにはベストポジションな上、

背徳感二倍増しのオマケ付き。

コレで興奮しない訳が在ろうか。いや、無い。

故に、ソラウが少し熱っぽい吐息を吐くのも仕方がないことなのだ。

「ほう……」

「む、どうかしたかね？ ソラウ？」

「ちよつと喉が渴いただけよ。続けて、ケイネス。ついでだから私は三人分のお茶を淹れてくるわ」

「ありがとうソラウ。……さてランサー、やはりネックはバーサーカーだが……」

何とかごまかしてキッチンに向かったソラウは小声で独り言を呟く。

「やっぱり日本に来て良かったわね。本は好きだけど手に入るし、長年探していたモノも見つかったし、紅茶はいまいちだけれど、緑茶は美味しいし」

そう呟きながら緑茶を淹れるソラウ。本来イギリスでは紅茶ではなく緑茶が人気だったというのも納得出来るほどにソラウは緑茶を気に入っている。微かな苦味がお茶請けの甘味を引き立てるのは紅茶と変わらないが、紅茶の香りより緑茶の香りの方が爽やかで、少々紅茶は甘い香りが強い気がする。嫌いなわけではないのだが。

「……緑茶は爽やかで柳の様に<chrome|find|class||find|in|page|find|selected>しなやか</chrome|find>な青年で紅茶は甘いマスクで薔薇の様に華やかな貴公子、って感じね。……結構ツボかも」

ここ数日のソラウの頭脳は妄想方面にアンテナ増設中。ちよつと気を抜くとアレな考えに突入するあたり、彼女の汚染状態はかなりのモノである。数日で此処まで腐敗する辺り、やはり彼女の適性は非常に高かったのだろう。

「あら、考えてる間にお茶が出来たみたいね」

茶葉が開く時間に合わせてセットしたタイマーを止め、カップに緑茶を注いで二人が待つリビングまで戻る。

「お茶が入ったわよ」

「ふむ、少し休息とするか。異存はあるかランサー？」

「いえ、概ねの方針は決まりました。此処は体力的にも精神的にも休息を取るべきかと」

「二人とも相変わらずマジメね。結局どうすることにしたの？」

カップに口を付けつつ問い掛けるソラウに、ケイネスは優しく回答する。ソラウと彼は長い付き合いだし、この男の事は素直に好感が持てる。多少傲慢な部分があったが、天狗になった鼻を折られてからはその傲慢さも消え、一皮剥けた大人の男になったと言えるだろう。だが、その好感のベクトルはやはり恋愛対象ではなく友人に近い。お洒落などにお節介を焼いてやろうとは思うのだが、どうしても友達感覚なのだ。

「間桐雁夜の提案だが、受けても良いと考えている。……教会に居たバーサーカーを見たかな？」

「ええ、私も使い魔を向けていたから見たわよ？」

ソラウとしてはあの主従はバーサーカーが攻めでマスターが受けだと感じたのでよく覚えている。病弱な主人と知的で強い従者。悪くない組み合わせだ。

「あの時、バーサーカーは腰に銃のホルスターを付けていたのだよ。

……まず間違いなく『黒い銃身』だ」

「……あら？ でもバーサーカーは宝具を持っていないんでしょう？」

「ああ、その言葉に嘘はないだろうね。アトラス院から『七大兵器』が盗まれたという話が時計塔で出回っているらしい。……おそらくあれは『現存する宝具級の礼装』であって、彼に付属する宝具では無いのだろう。嘘を言わずに相手を欺くのは魔術師の話術としては基本だからね」

「なる程、あれはバーサーカーが召喚される前からアトラス院にあった物なのね」

『黒い銃身』。エーテルに対する究極兵器。そんなモノが在れば聖杯の浄化などせずに、聖杯戦争を勝ち抜いてから聖杯を撃ち抜けば良



い話だ。聖杯の中身が本当にサーヴァントならば、『黒い銃身』に耐えられる訳もない。

そこまで考えて、ソラウはある推測に行き着いた。

「随分と公平なのね、バーサーカー陣営は」

「ああ、その通り。彼は聖杯を正常化するまで聖杯戦争は中止だと言った。ソレはつまり、聖杯を正常化してから聖杯戦争を再開すると言っているのと同義だ。……御三家など所詮は単なる発起人だと思っ居たが、なかなかどうして高潔な男も居るものだ。景品の不備を補填した上で競技を再開すると言うなら、断る必要も無いだろう？」

そう述べるケイネスと、その意見に賛同するように首を縦にコクコクと振っているランサー。

その二人を眺めるソラウの瞳は何処までも優しく。その頬には微かに朱が差している。

その瞳の奥の感情を知らぬケイネスは正に『知らぬが仏』だと言えた。

冬木にある中華料理店、泰山。そのテーブル席に座る五人の男女。その単語だけ聞けば合コンに聞こえぬ事もないが、残念ながら綺礼に連れられて食事に来た英雄王御一行である。

「いらつしやいアル、綺礼。……今日は友達連れアルか。明日は雨に違いないネ」

「む、これは手厳しいな魃店長。……私はいつも通り麻婆豆腐だ。……お前たちはどうする?」

「ふむ、私はこの中華粥とピータンを頂こう。ああピータンは二人前でお願いするよ」

「我はフカヒレの姿煮と伊勢海老入り生春巻きだ」

「私は炒飯と餃子をお願い致します。舞弥殿はどうなさいます?」

「……中華まんセットを」

「分かったアル」

注文をメモした魃店長はぴよぴよこと厨房に消える。少女以外には見えないのだが、あれで成人して自分の店を構えている立派な大人なのだ。

「何と言うか、あの店長の様な人を東洋の神秘と言うのだろうか」

「確かにそうですね……」

そんなほのぼのとした会話と共に出されたお茶を飲む一行だが、意味もなく集結している訳ではない。

「さて、食事が出来るまでの間にそれぞれの成果を報告しあうとするか」

「良い司会進行だ綺礼君。私から報告出来るのは、『固有結界』を一回発動可能な分の魔力をマスターが蓄積してくれたということぐらいだね。……これなんだが」

そう言うズエピアが腕まくりをすると、其処には三画の令呪が刻まれている。形は雁夜のそれと同じだが、色が紫だ。

「令呪……? ふむ、そうか。令呪システムは間桐の考案だったな、バーサーカー。それはさしずめ命令機能無き令呪、純粋な魔力タンク

としての刻印と言うわけか」

「その通りだ綺礼君。少なくとも六代続く家系は伊達ではないようですね。これを刻んだだけでマスターは鼻血と喀血を発生させてしまっていたが、仕組み自体は完璧だ」

「ズエピア殿、サラツと言いましたけど雁夜殿は大丈夫だったのですか?」

「死徒を舐めてはいけないよポニー君。大抵の傷は輸血パックでも呑んでいれば治るし、重傷でもより上等な血液を飲めば治るのだよ。極論で言えば、心臓と頭が無事なら血液風呂に漬け込んでれば治る」

「……まさに化け物じゃないですかやだー」

ちよつと引き気味なポニーちゃんだが、死徒なんてそんなもんである。そうでなければわざわざ代行者などが出張の必要がない。

そんな内容を説明する綺礼。その横でギルガメツシュがふと疑問を口にした。

「……む、そう言えば吸血鬼。貴様のその『固有結界』とやらは何なのだ?」

その質問に、ズエピアはよくぞ聞いてくれたとばかりに姿勢を正して語り始める。

『虚言の夜』。分かり易く言えば『死徒の召喚』を可能にする能力だね。私が『情報を持っていく』吸血鬼なら私は『召喚』できる。君の『王の財宝』に少々似ているな。財宝の代わりに吸血鬼が貯蔵されていると考えてくれれば大体合っているよ」

「質問しても構いませんか?」

「何かな? 舞弥君」

「何故貴方が自由に吸血鬼を呼び出せるのです? ギルガメツシュの王の財宝であれば生前蒐集した宝物なのでしょうが、あなたが吸血鬼に詳しいという情報はなかった気がします」

「ふむ、何故私の経歴を調べられたのかと思ったが、そう言えば君は一応アインツベルンの情報を見ているのだったね。回答を返すなら、私は別に元々吸血鬼に詳しいわけではない。第六法を改ざんする際、その修正パッチ分の容量が『』にはなくてね。仕方なく吸血鬼に関する

る情報を私が取り込む事で空きスペースを作ったのだ。そんなわけで私は一匹の真祖でありながら、『』の外付けハードディスクでもあるわけだ。そのせいで並列思考が十個中五つもその処理に回されているがね」

真祖は星の端末機。さらにズエピアは『』に接続している。この情報は使い魔経由で舞弥も知っている。だが、改めて本人から聞けばそれどころではない。

馬鹿ほど魔力を喰う能力なものも当たり前。真祖が持つ空想具現化、生まれ持つ固有結界、修練した並列思考、『』から抜き出した情報。それらを同時に展開し世界にキャラクターを書き加える禁忌の術式、宝具に匹敵する『スキル』。むしろ令呪程度で生み出せるなら儲けものではないだろうか……？

そんな思考を巡らせる舞弥。だが、その思考は突如として可愛らしい女性の声で中断される。

「泰山特製激辛麻婆豆腐、出来たアルよ〜」

「おお、来たか……!!」

嬉しそうな綺礼の声に反応し全員が彼の前に置かれた皿を見る。

それは、紅だった。立ち上る湯気、一口大に切られた豆腐と、たっぷりの肉そぼろを内包し、限界まで引き立てられた紅。

「おい綺礼、それは料理なのか……？ 我には沸き立つマグマにしか見えんぞ……」

「切嗣以外でこんなゲテモノを食べる人間が居るなんて……」

「朱を越え、赤を越え、紅まで越えた色合いだねこれは………よもや音に聞く紅赤朱かね……!?!」

「ズエピア殿、どさくさに紛れてボケをかまさないで下さい。貴方だけニヤニヤしてますよ」

「む、よく気付いたねポニー君。……まあ、正直言えば私には美味しそうにしか見えないからねえ……。ギルガメツシユや舞弥君の反応は少々大袈裟だろう」

「ええ、私もズエピア殿と同じく美味しそうに見えます」

意見が綺麗に対立する中、綺礼はふと黙々と喰い進めていた手を止

め、最後の麻婆を乗せたレンゲをギルガメッシュに向けて。

「——喰うか？」

「……………いや、要らん。そのアサシンめに喰わせてやれ。……本当に食えるのかが気になる」

「良いだろう。アサシン、喰うが良い」

「む、有り難い。では」  
パクリ。

小さく口を開いて綺礼が寄越したレンゲの中身を平らげるポニー。その様子を固唾を飲んで見守るギルガメッシュと舞弥だが、二人の予想とポニーの反応は異なっていた。

「ふむ、やはりスパイスの効いた料理は良いものですね」

「無事、だと…………？」

「アサシンがまさかこれほどに強力なサーヴァントだったとは思いませんでした」

驚愕を隠し切れぬ二人にズエピアが少しアドバイスを告げる。

「私は怪物なので余程でなければ痛みを感じない、ポニー君は日常的に大麻を吸っているから痛みに強い、綺礼君は辛みを感じて居るが、一種のマゾミみたいなもので辛ければ辛いほど脳内麻薬ドバドバなので例外。人並みの痛覚をしっかりと持っている君達は食べない方が無難だね」

「ふむ、ちなみに我が食うとどうなると言うのだ、吸血鬼？」

「お口の中が『天地乖離す開闢の星』、といった感じかな」

「相分かった、死んでも喰わん」

やけに神妙な顔のギルガメッシュだが、それもこれまで。

この後は、またしても登場した魃店長が持ってきたフカヒレと春巻きで上機嫌になった彼が「釣りは取っておくが良い」と店長に諭吉さんを大量譲渡したり、舞弥が餡饅をテイクアウトしたり、ズエピアが店長と料理談義をしたりとわいわいガヤガヤとした雰囲気時間が過ぎていく。

一応、戦争中にも関わらず、一切ブレない愉悦軍団であった。

世界の終端にある砂浜の夢。そんな妙な夢を見ていたウェイバーを目覚めさせたのはガクガクと自分を揺さぶる大きな手。おそろく、今ウェイバーが見ていた夢の原因であり、お使いを頼んでいた存在である、彼のサーヴアクト。ライダーこと征服王イスカンドルだ。

「おい坊主。水汲みは終わったぞ」

「ん……？ ああ……今何時だライダー」「昼の二時だが？」

「いやに早くないか？」

「なに、我がマスターが自ら策を考えたと来れば張り切りもする。それに、夜には何やら宴があるようだぞ、ウェイバー」

「宴？ 確かに夜に聖杯奪還戦争の参加者は集合するようには言われたけど、宴？」

「おうよ。川で水汲みをしていた余の元にこんなもんを持った蟲が飛んできてな。ほれ」

そう言つてライダーが差し出したのは葉書大のカード。二つに折り畳まれたそれをウェイバーが開くと、飛び出す絵本の如くスーパーデフォルメされたバーサーカーが飛び出した。

「うおうっ!? ……つてなんだ、立体映像か」

『むむむ、驚かせてすまない』

そう答えるちびバーサーカーだが、その声は抑揚がなく、確実に肉声ではない機械じみた声。それを聞き、ウェイバーはこの手紙の仕掛けを一つ察する。

「答えた……訳じゃないな。あらかじめ受け取った人の反応で何パターンかの回答をするようにしてあるんだな、コレ」

『いかにも。……さて、これからメッセージを読み上げるが、準備は良いかね？』

その問いにウェイバーがコクリと頷くのを感知してから一拍置いて、今度は明らかに録音らしい女性の声が流れ始めた。

『アーテステス……よし。……聖杯奪還戦争参加候補者諸君に追加のお知らせを行います。本日、参加者集合の際、一時の同盟を祝す

べく宴席を設けさせて戴きます。各陣営のマスターとサーヴァント分の席を御用意しております故、どうぞ気軽にご参加下さい。以上。………ん、これ、どうやって録音止めるんですか、ズエピア殿？ズエピア殿？」「カット！』」

何だか最初と最後に気が抜けたが、確かにライダーが言う通り、宴があるらしい。

「なあライダー？ バーサーカー陣営の罠って事はないか？」

「無いだろうな。あのバーサーカーならば食事に毒を入れて暗殺するより、マスター全てを殴り殺す方が早い。彼奴はまだ切り札どころか、技らしい技も使つたらんに身体能力だけで他のサーヴァントと渡り合える化け物だからなあ」

「まあ、そうだよな」

そう言つて納得するウェイバーだが、ライダーもウェイバーも別に聖杯を諦めた訳ではない。バーサーカー陣営は聖杯を欲していない。ならば、本腰を入れてくるのは実質的にはアーチャー陣営。だが、そのアーチャーもどうにもやる気が感じられない。

となれば、まだライダー陣営にも勝ちの目は僅かに残っている。そう信じて、ウェイバー達は地道に歩を進めている。水汲みもその一環だ。

「まあ、宴会は少し忘れて、水を調べよう。……汲む場所は間違つて無いよな？」

「おいおい、地図に書いてある場所に行く程度も出来んなら余はペルシャまで辿り着いとらんぞ」

「それもそうか」

そう言いながらウェイバーは時計塔から持ち込んだ実験セットをテキパキと操作し、適切な試薬を選定、調合。河口に近い順に並べられたサンプルに適量ずつ加えて行く。

「まずは河口から……ん、ビンゴだ」

「おお、色が変わったぞ！ コレはどういう事なんだ坊主？」

「楽しそうだなオマエ。……これは水中に含まれる魔術の痕跡に反応する試薬なんだ。これが反応するつてことは、川沿いのどこかにキヤ



スターが工房を構えているのは確定だな」

「ほう？ そりやまた何でだ？ そもそも、なんで川と当たりを付けたんだ、坊主？」

「僕は使い魔ごしにアインツベルンの森での戦いを見てたんだよ。……キャスターの使い魔はタコとかイソギンチャクに似た感じだった。つて事は、水の魔力形質が高まる立地で拠点を構えるのがベストだ。使い魔は大体、類似する動物と同様の性質だからほぼ間違いない。だから川を調べた。で、何で水中の残留物を調べたかつてのは、朝の報告会が原因だな」

「あの集まりがどうかしたのか？」

『キャスターは魔術の秘匿を無視している』つて言ってただろ？ そんな奴が工房から出た廃液をいちいち処理すると思うか？」

「そりやまあ、垂れ流しだわな……成る程。よく分かった。」

「……でも、こんな地味で単純な作業なんて魔術とも呼べない未熟な技なんだけどな」

「ふむ……なあ坊主。いや、ウェイバーよ」

納得したようにうんうんと首を振ってから、ライダーは真面目な声でウェイバーの名を呼ぶ。その雰囲気は流石に気になったウェイバーが手を止めて振り返るとライダーは何やら真剣な面持ちでウェイバーを見つめていた。

「……何だよ、急に改まって。僕を漸く敬う気にでもなったのか？」

照れ隠しに嫌みを言うウェイバーだが、ライダーは予想外の答えを返してきた。

「ううむ。今までお主を、見所はあるが未だ嘴の黄色いヒヨコ坊主だと思っておったのは確かだなあ。が、それも今までよ。お主は確かに魔術師としては未熟よ。だがな、なかなかどうして良い戦略眼を持つておるではないか。余はサーヴァントとして鼻が高いぞ？」

「……戦略眼？」

「然り。お主は大魔術師の素質はないが、大賢者となる素質は充分だ。まあ言うなれば軍師タイプという奴よ」

「……………ふん、まあ、聞くだけ聞いてくさ。……つ、続きを調べるぞ」

ライダー!!」

賢者と呼ばれて照れていいのか、三流魔術師と言われて怒れば良いのか。そんな複雑な心境のウェイバーはその思考を振り払うようによりスピードを増して作業に没頭する。既にサンプルは中流に至り、試薬の反応は限界に近い。これ以上の濃度になれば別の試薬を用意しなければ。と、ウェイバーが考え始めた、その時。

「ん? ……反応しない、か。なあ、ライダー。此処と此処の間に何か人が潜り込めそうな配管とか用水路は在ったか?」

「む、確か、農業用水路のデカイ奴が在ったな」

「それだ、その奥にキャスターの工房がある」

「……やはり、お前は余の見込み通りだな!! 征くぞウェイバー!!」

「行くつて、この真っ昼間からか!?! 誰かに見られたらどうするんだよ!?!」

「見られたくないのなら、ギリギリまで徒歩で向かい、水路に入ってから戦車を出せば良いのだろうか?」

「ぐ……確かにそうだけどさ。何で急に張り切ってるんだよオマエ!?!」

「そりゃあ、自分のマスターが手柄を挙げたとなりやあ、気合いも入る。次は余が首級をあげる番だとな!!」

「……はあ。分かった、分かったよ。霊体化して外で待ってる。お爺さんに自転車を貸して貰えるか聞いてくるから」

「おうよ!! では、少し行った先の角で待っとるぞ」

そう言つて勇み足で霊体化するライダーに苦笑と溜め息をこぼしつつ、自転車を借りようと階段を下るウェイバー。その足取りは表情に反して軽く、彼の内心を表していた。

結論から言えば、ウェイバー達は難なくキャスターの工房へと辿り着いた。ライダーの盛り上がる大腿筋は原動機付き自転車を遙かに越える速力をママチャリに与え、それはもう風のように冬木の街を駆け抜けたし、幸いにも人払いの護符が効いたのか、誰にも出くわさずに目的まで到着できた。

が、しかし。

「うむ、一足遅かったか。蛻の殻とはなあ」

「つい最近まで居たみたいだけだな。……床の血痕がまだ新しいし、魔力の残滓も濃い。……でも、どこに引越したんだキャスターの奴？」

顎に手を当てて考えを巡らすウェイバーだが、この場にあるものから分かるのは、キャスター陣営が確かに此処で犠牲者を殺害していたという事実のみ。

急な引越しだったのか、あるいは追跡者に対する足止めか。キャスターの張った結界も護衛の怪魔もそのまま放置されており、コレが原因で川に魔力が流れ出していたらしい。

とりあえずウェイバーは電気屋で購入したインスタントカメラで現場をくまなく撮影し、裏にメモを付けておく。魔術でやるよりずっと低コストなのが何だか屈辱的だが、まあ財布が軽くなるのは良いことだ。

「……とりあえず帰るぞライダー」

「うむ、もう調べる事もあるまい。後は、宴の準備のみよな」

「宴の準備……？」

用水路から外に這い出し、一息ついたウェイバーに、ライダーが妙な事を言う。宴席に招かれる側が準備とはこれ如何に。

「ん？ ウェイバーよ。お主、もしや宴席に招かれたことが無いのか？ というか、しっかりとカードを見ておらんだらう」

「ホームパーティーなら何度か出たけど、確かにちゃんとした宴会は初めてだし、確かに音声データは聞いたけどカードは気にしてなかった

な」

「仕方ないのう。ほれ、そんな事だろうと持つてきておいてやったぞ」  
「……有り難う。……………」『フルコース料理による着席パーティーとなりませぬ。ドレスコードはカジュアルで構いません』……………」

意味が分からないで困惑するウェイバーにライダーが安心しろと言おうようにポフポフと頭を叩く。

「そう固くなるな、ウェイバー。おぬしの私服なら充分問題ないだろうよ。余が言っているのは、髪を結うリボンでも探しておけという話だ。長髪が食事に入るのはまずい。まあ整髪料でオールバックにしても良いが、似合わんぞ、多分。」

「…………へアピンでも買いに行くか。ライダー、運転は任せた」

「よし来た、しっかりと捕まっておれよ!!」

言うなりウェイバーを荷台に乗せてママチャリに跨がるライダーと、その腰にどうかしがみつくウェイバー。二人が乗った自転車は高速で街を駆け抜ける。

その日からしばらく、冬木では『マツハマママチャリ』なる都市伝説が噂されるのだが、それはまた別の話。

さて、場面変わってアインツベルン城。此処では先程まで、良い歳した大人が元氣一杯に追いかけてっこをしていた。

逃げるのは衛宮切嗣。鬼はアイリスフィールとセイバー。二対一の勝負で勝てるわけもなく、現在切嗣は捕縛されている。こうなった原因は言うまでもなく、例の招待状である。

「観念しなさいマスター」

「そうよ、観念しなさい切嗣」

「くっ、嫌だ！ 僕はパーティーには出ないぞ！」

「何故だマスター？ 貴方は同盟には賛成だったのではないのですか？ それに、貴方自身が間桐雁夜には貴方自身では勝てないと宣言したのでは？ 隠れても無駄だと言っていましたよね？」

「言ったけど、それとこれとは別問題だ！」

「ならば、何故ダメなのかを聞かせて下さいマスター」

やけにしつこいセイバーに観念したのか、暫くの沈黙の後、切嗣は口を開く。

「……僕は元々、サンドイツとか麻婆豆腐とかカレーとかオムライスとか、そういった家庭的な食べ物が好きなんだ。……パーティーで出て来るフルコースみたいな上品な食べ物は苦手なんだよ」

「あれ？ 切嗣、アインツベルンの本宅では毎日そんな食事だったじゃない。残さず食べていたけど？」

「……それは食べ残すのは食べ物に失礼だからだよ、アイリ。それに、アハト翁に『カレーライスが食べたい』なんて言う勇氣は僕にはない」  
沈痛な面持ちで頭を垂れる切嗣に、なんと言ったらいいのか分からないという表情のアイリスフィール。だが、そんな二人にセイバーは首を傾げつつ声をかける。

「……マスター、招待状は良く見るべきです。品目は書いてありませんが『提供させて戴く御料理は今回召喚された各サーヴァントに因んだ地域の料理となります』と書いてあるではないですか」

「……それ、僕が高級料理が苦手な事の解決になっているとは思えないんだが、セイバー」

「何を言うのです切嗣。よく考えて下さい。今回のサーヴァントの出身地を」

「……セイバーはブリテン、ランサーはアイルランド、アーチャーはメソポタミア、ライダーはマケドニア、キャスターがフランス、バーサーカーがエジプト、アサシンがシリアだろ？ ……これにどんな意味がある？」

「フランス以外に高級料理の要素がないではないですか。特にブリテンに」

「……あ」

呆れたように告げるセイバーの言葉にはたと気付いた切嗣は顎に手を当てて考え始め、しばし沈黙。

そして、セイバーとアイリスフィールが見守る中、とうとう折れて宴会に参加する事となったのだった。

「なあ、セイバー。何でそんなにワクワクしてるんだい?」

「何を言っているんですか切嗣、バーサーカーの手料理を食べられる機会などそうそうありませんよ!!」

「いや、バーサーカーの手料理という響きに微塵の期待も出来ないんだが……?」

「マスターは彼の料理を食べた事がないのでしたね。絶品でしたよ、昨日の夜貰ったクッキー。……じゅるり」

「……余ってるかい?」

「いえ、気付いたらお腹の中でした。恐るべき魔性の菓子ですよアレは」

「いや、君の食い意地が張ってるだけだろ、それ!? ズルいぞセイバー!」

「気付かない方が悪いのです!」

「腹ペコ王に改名しろよ、もう」

「あらあら、まあまあまあ。仲が良いわね、二人とも。流石はマスターとサーヴァントよね」

「仲良く見えるか、コレで!?!」

セイバー陣営は今日も小学校レベルです。

さらに視点は移動して、最後の招待客であるランサー陣営。

貴族二人とエリート騎士団員で構成されたこちらの三人組は、流石に宴会など慣れたもの。ドレスコードに沿ったそれ程堅苦しくない服を吟味し終え、今は息抜きのティータイム。

テーブルの上には紅茶とスコーン。紅茶には砂糖の代わりにメイプルシロップを入れて、フレーバーをつけている。

「ねえケイネス」

「何だい、ソラウ?」

「この『英霊に因んだ』料理ってどんなモノなんでしょうね? と言うか、料理には期待して良いのかしら……?」

「心配無いさ、ソラウ。料理のジャンルはともかく、美食が楽しめるだろうからね」

「どうしてかしら?」

「あのギルガメツシュが参加するんだよ? 半端な物を出したらシエフの首が飛ぶ。物理的に。なあ、ランサー?」

「ケイネス様のおっしゃる通り。家庭料理が出て来たとしても、英雄王の舌を満足させられる程のものであれば見掛けだけ高級な料理より価値が在るものではないかと思われます」

「なるほどね」

そんな話をしつつもソラウはすっかり打ち解けているランサーとケイネスを見て内心ニヤニヤしているのだが、料理が気になるのも事実。

「……でも、誰がシエフなのかしら?」

「ふむ。……確かにそれは謎だね、ソラウ。ランサーは思いつくか?」

「え? バースーカーでは無いのですか、ケイネス様?」

「バースーカー!?!」

キョトンとした表情で返すデイルムツドに、流石に驚愕する二人。普通に考えればマキリが雇ったコックではないのだろうか?

「昨日子供を協力して助けた後、彼が何やら軽く飲み食いしていたので、私と騎士王が『何を食べているのか』と問うたのですが、どうにも、彼自身が焼いたクッキーを食べていたらしい。で、去り際に余りを私と騎士王で半分に分けると言って、コレをくれたのです」

そう言っランサーが取り出したのはビニール袋。中には星、月、ハート、涙といった形のクッキーが詰まっている。ランサーも試食したと言うので食べてみれば、確かに美味しい。更に形毎に味が違うという地味に手の込んだ一品だ。

「彼曰く片手間に作った手抜きだから不味くても責任は取らないと言っていてこれですから、本気の料理の腕は相当なモノかと」

「……これは確かに期待できるな」

「成る程、彼ほどの錬金術師なら寸分の誤差無く、一切の無駄なく材料を調合する事も可能だものね。」

「私もファイオナ騎士団の一員ですので野外料理は得意なのです。だからこそこの菓子の出来は関心する他ありません」

そう言っつて納得した三人は、つついまたクツキーに手を伸ばす。

ランサー陣営の午後のティータイムはこの瞬間延長が確定したのだった。



日が沈み、月が昇る頃。冬木教会にある結婚式用の会場を借りて『聖杯奪還同盟』の締結が行われていた。

「では、此度集った各陣営は冬木教会監督役が聖杯の浄化を確認するまで、同盟陣営との戦闘を、一切行わず、聖杯浄化の為に尽力する事。それを破った際、マスターであるご自身を殺害するように令呪を持ってサーヴァントに命じて頂きたい。もちろん、この誓約に使用した令呪は監督役の私が補填させていただき、更に新たな令呪一画を『聖杯浄化協力』の対価として贈呈させていただきます」

そう、厳粛に告げる言峰璃正神父。その行為が指すのは『今回の同盟は一度結べば最後、破れない』という事実。まともな思考を持つ魔術師ならば、暫し迷う筈のそれ。メリットとデメリットで言えば、メリットが勝っているとはいえ、そのデメリットは無視できない。サーヴァントに条件付きとはいえ自分を殺せと命令しなければならぬのだから。

だが、この宣言直後に右手の甲を光らせた者が二人。

そもそもの提案側である間桐雁夜、及び遠坂時臣である。

「間桐雁夜が令呪を以てズエピア・エルトナム・オベローンに命ずる。私が聖杯浄化前に同盟陣営に自発的な攻撃行為を行った場合、私を殺害せよ」

「遠坂時臣が令呪を以て奉る。英雄王よ、私が聖杯浄化が成る前に同盟陣営に自発的に攻撃した際、私の首を切り落として頂きたい」

「ふん、聞くだけ聞いておいてやる。我の手を煩わせるなよ、時臣」  
「了解したよ雁夜。君が不義理を行った際は私が飲み干してあげよう」

その後素早く、二人の手に令呪二画が補填される。その光景に反応し、次に動いたのはウェイバー・ベルベットだった。

「ああ、もう!! ライダー!! お前に令呪を以て命ずるっ!! 僕が聖杯浄化より前に同盟相手に自分から攻撃しようとしたら僕を殺せっ!! ……痛くないように頼む」

「ガッハツハ!! よう言うたぞウェイバー!! 最後の注釈が締まらないか!! おぬしも一丁前の男子ではないか!! 良いぞ、このイスカンドルがその命、必ず果たそう!!」

蛮勇とでも言うべきウェイバーの行動に遂に決心が着いたのか、それとも今まで損得勘定に忙しかったのか。残るケイネスと切嗣も漸く令呪に意識を乗せる。

「衛宮切嗣が令呪を以てセイバーに命じる。聖杯の浄化が確認される前に僕が同盟陣営を攻撃したら、僕を殺せ」

「令呪を以て命じる。ランサーよ、私が聖杯浄化以前に同盟相手を自発的に攻撃した際、その『必滅の黄薔薇』を以て我が心臓を貫け」

「……フィオナ騎士団、双槍の騎士、輝く貌のデイルムツドの名に掛けて、我が主の誇りのため、その時は我が槍を以て御命令を実行致します」

「切嗣、あなたの珍しく見せた誠意、私が無駄にはしない。一切の私利私欲を捨て、あなたの介錯を務めよう」

その返答と共にウェイバー、ケイネス、切嗣にも補填令呪二画が行き渡った所で、言峰璃正神父は一つ頷いてから発言する。

「此処に盟約は成った。………ではこれからは同盟陣営同士の情報交換と作戦立案の為の時間としていただこう。……間桐家が食事の手配を行ってくれた為、喉を潤し、腹を満たしながら存分に語ってくれたまえ」

その言葉と同時に、机の上に料理が出現する。テーブルクロスに編み込まれた受信術式と厨房の送信術式からなる物質転送魔術。単純だが、人手が足りない現状では便利な魔術である。

さて、まず現れたのはボトルとグラス、そしてカナツペ。グラスの中にあるのは黄金に輝く、甘い香りのするお酒。ケルト神話の時代よりアイルランドに伝わるこれは勿論ランサーにちなんだ物だ。

「バーサーカー。この酒は、ミードか？」

「流石にランサー君はすぐ分かったようだね。ミードとは日本語にすれば蜂蜜酒と呼ばれる酒だ。その中でもコレは複数の魔術的工工程でポーシヨンとしての特性を付与した『黄金の蜂蜜酒』と呼ばれるモノだね。で、前菜として用意したのはキャスターに囚んだフランス風フオアグラスステーキとバナライスのカナツペ。甘さとしよっぱさ、熱いものと冷たいもの。対照的な取り合わせだが、恐れることなく一口で食べてくれたまえ。生ハムメロンに匹敵する夢のマリアージュだと自負している」

その言葉を聞き、全員がグラスに口を付ける。次の瞬間、酒精が口内で香りと共に花開き、一瞬で味覚を覚醒させる。その、鋭敏になった舌で味わう一品目。滑らかなフオアグラのクリーミーさをバナライスをより強化し、その上で砂糖の甘味と岩塩の塩味、そして肉汁の旨味が染み込んだ薄切りフランスパンが全てを包み込む。

酒嫌いのウェイバーでさえ旨いと思える酒と、一口だけで完成された前菜に皆が舌鼓を打ち、胃が次なる美味を求めて活動を始める。

「……ふん、酒も摘みも、どうにか我が喰うに足る物を用意したようだな吸血鬼?」

「君がくれる及第点は、本職ではない私には過ぎたモノだよギルガメツシユ」

「いや、誇るが良い。趣味もこの域に達すれば既に一つの技といえる。何より、あえて一口分しか用意しない事で腹を刺激し、空腹をかきたてる。それによって此処までの美味を喰ってなお次への期待感を抱かせるとは流石よな?」

そう言つてニヤリと笑うギルガメツシユは御満悦らしく、グラスの中身を景気良く飲み干してから問いを投げる。

「雑種共よ。この食事を手掛けた我が道化に免じて、我と語らう栄誉を授けよう。貴様等は、聖杯に何を願う?」

その問いを聞くと共にすぐさま答えを返したのは、やはり王を名乗る者の一人。征服王イスカンドルである。

「確かに食とは語らいと共に在るべきモノ。ならば余も答えねばなるまい。余の願いはこの料理を作った男と同様よ。即ち、受肉こそ我が

願いだ」

「ほう、征服ではなく受肉を願うか、雑種よ？ お前が言うのだ。『身の程を弁えて質素な願いを叶える』などという殊勝な考えではないのだろうか？」

「然り。我が征服は我が肉体によつて成されるべきモノ。杯に世界を取らせて何が楽しいのだ？」

そう言いながらライダーはグラスを使わずに蜂蜜酒をラツパ飲みする。作法も何もない飲み方だが、それでも様になるのが王の風格という奴なのだろう。

「成る程、その気骨は認めてやらんでもない。だが、私の配下で無い者にそう易々と財宝を下賜する気はないのでな。故に貴様が私の許に下ると言うならば、杯の一つや二つ程度いつでもくれてやる」……ハツハツハ、それはできん相談だわな。しかしなあ、ギルガメッシュ。その言い分なら別段聖杯が欲しいって訳じゃあないんだろう？ なんで聖杯戦争に参加したんだ？」

ライダーのその問いに、ギルガメッシュは鼻を鳴らしてから答えを返す。

「我は人類最古の英雄王、ギルガメッシュ。我が蔵にはあらゆる宝具、あらゆる宝物の原点を所蔵しておる。故に、全ての宝はその起源を我が蔵へと遡る事が出来るのだ。であれば、宝である聖杯もまたその出自を我が蔵に起因させるのは当然よな？」

「まあ、そりやそうかもしれんが……」

「ならば、我が財を手取るに相応しいと思えん雑種を我が手ずから処断するのになんの問題もあるまい。……そうよな、我は今気分が良い。証拠の品を見せてやる故、しばし待て雑種共」

そう言つてギルガメッシュは手のひらの上に、宝具を射出する時と同様の揺らぎを生み出し、一冊の辞書のような物を取り出してパラパラとページを繰り始める。

「ああ、吸血鬼よ。しばし時間がかかる故、次の料理を出して構わんぞ。我が許す」

ギルガメッシュのその声に合わせてズエピアが指を鳴らす。と、

テーブルに湯気を立てるスープが入った深皿が出現する。

「近くの養鶏場で購入した地鶏を使ったモロヘイヤと地鶏のスープだ。言うまでもなく、私の故郷、エジプトに因んだ料理だね」

紹介を終えたズエピアが口を噤むと、全員が一口スープを啜る。その中で切嗣がボソツと言葉を漏らした。

「……………飯が欲しくなるな」

「それも予想済みだとも」

更にパチリと指を鳴らすズエピア。次の瞬間、テーブルには暖かいバターライスが乗った皿が追加されていた。

「マナー的には大問題だが、私はあえてスープとライスを混ぜて食べることを提案させて頂こう。スープだけでも美味しく、ライスだけでも美味しく、そして合わせてリゾット状にしても美味しいように味付けしてある。日本料理の『ひつまぶし』に通じる所もあると言えよう」  
「ふむ、組み合わせで味を変える料理ですか。初めて食べましたが実に美味しいですバーサーカー」

「そう言って頂ければ重畳だ、セイバー君。……時に、君の願いは何か教えて貰っても良いかね？」

「私の願いですか。私の願いは故郷の救済。聖杯を以て我がブリテンの滅びの運命を変える事です」

毅然として言い放ったセイバーに、ライダーが困惑した表情で言葉を返す。

「なあ騎士王？ お前は歴史を変えると言ったが、それはお前の時代、お前の治世を生きた全ての臣民への侮辱ではないのか？」

「……………滅びを良しとするのは武人のみ。民草の願いは救済そのものだ。正しき治世、正しき統制こそ彼らの望みに他ならない」

「ううむ、どうにも余には理解できんなあ。理想に殉じ、正しきの奴隷となる王など、民草を救うだけの装置でしかないではないか。救われただけの連中の末路は悲惨だぞ？ それを良く知るのは他でもないお前自身だろう、騎士王よ？」

「……………私は」

セイバーは何か言い返さねばならぬと思いながらも言葉を紡げな

い。脳裏に飛来するあのカムランの丘が彼女の思考を妨害する。と、その時。セイバーに声をかけたのは意外にも、未だ目録を繰るギルガメッシュであった。

「セイバーよ、貴様は正しい。……その華奢な姿では到底背負い切れぬ正義という責を自ら背負おうとするその姿はなかなか希少な馬鹿者だ。……誇るが良い、我が寵愛に値する程の希少性だぞそれは」

「……貴様、私を愚弄するのか!？」

ギルガメッシュの微笑に憤懣やるかたないというように言い返すセイバー。

そんな一触即発の空気を壊したのはそもそも最初に問うた側であるズエピアであった。

「ふむ。どうにも君達は『王』ばかり気にして政治形態を考慮に入れないようだね。国によって必要な王は異なるのだよ?」

「む、なにが言いたいのだ? バーサーカーよ」

「ふむ。ではまずライダー君の場合、政治形態は独裁政治。この場合、王とは強いリーダーシップとカリスマを持ち、果断に富み、民の欲望を背負って国を運営するべきモノだ。彼の政治形態に置いて王は国であり、民の羨望の的である事が望ましい」

「ほう、分かっておるではないか! それこそ王と言うものよ」

そう言つてニカリと笑うライダーだが、ズエピアはいやいや、言うようにと首を振る。

「その決断はまだ早いぞライダー君。次はギルガメッシュの場合だ。彼も独裁政権だが、彼の場合は司法、立法、行政のみならず宗教、経済、戦争、この全てを彼だけで全てこなした化け物だ。彼は最高裁判官であり、生きた憲法であり、政治の支配者であり、崇め奉られる神であり、最大の消費者であり、そして万軍に匹敵する最終兵器でもある。まあ、言うなればギルガメッシュさえ居れば全て片付く国だ。彼が王なのは最も優れた存在であるからに他ならない」

「吸血鬼よ、当たり前前の事を繰り返すでない。我が至高の存在であるのは当然であろう?」

「まあ、否定はしないとも。……さて、セイバー君」

そう言つてセイバーに向き直るズエピア。その視線をセイバーはしっかりと迎え撃つ。

「君の場合、政治形態は円卓による議会制だろうか？ 君の国では円卓の騎士が民草の為に尽力し、君はその中心である大黒柱として、あるいは象徴としての王であれと望まれたのだ。故に、清く正しく美しい君こそがブリテンの王であるのは間違いなく最善だろう。だがね、セイバー君。初心を見失うのは良くないよ？」

「私が初心を見失っている？」

「うむ。君が議会制政治の国で王であつた以上、『歴史をねじ曲げ、ブリテンを存続させる』事に対する採決を円卓の騎士に要請する必要があるのでは無いだろうか。故に君の願ひは『円卓の騎士全員と相談した上ででた結論を実現させる』というもので在るべきだと思うのだが、どうかね？」

そう穏やかに問うズエピアの声をセイバーは瞑目しながら反芻する。成る程確かに円卓とは『皆が対等である』ように願つた故に生み出されたものだ。その円卓の騎士たちと時に相談し、時に論争して国を動かしてきたのがアルトリア・ペンドラゴンの治世であつたのではなかつたか。

「それは……………確かにそうかも知れませんが。私の独断専行が彼らの意見を踏みにじつて良い訳がない。まずは円卓に問うてみるとします。ありがとう、バーサーカー。確かに私は理想に追われて騎士王たる自分を見失つていたようだ」

そう返すセイバーに、うむと頷いてからズエピアは彼の結論を述べる。

「王道とはこのように王と国によって異なる。故にその在り方は固有であり、比べられるモノではない。それを比べるというのは、1キログラムと1メートルのどちらが優れているかを論じるようなものではないかね？」

「成る程。まあ、確かにそうだな。すまんな騎士王、余計な事を言うたようだ。余と貴様では国も民も全てが異なる。ならば比べるのは間違いであつた」

「いや、私も危うく間違いを犯すところだったのは同じだ。気にするな征服王」

ライダーの詫びを受け入れたセイバー。彼らがお互いに笑みを浮かべると時を同じくして、ギルガメッシュが目録を蔵にしまい、黄金の杯を取り出した。

「おい雑種共。やはり聖杯の原点も我が蔵にあったようだぞ？」

そうやってギルガメッシュが掲げる杯には確かに夥しいという言葉でも足りぬ程に魔力が溢れ、妖しげな輝きに満ちていた。今まで主の横で静かに食事をしていたランサーでさえ、思わず息を飲み、マスター連中は目を見張って椅子から腰を浮かす程のそれを持つギルガメッシュはニヤリと口を歪めて、言葉を紡ぐ。

「取り出すだけと言うのも芸のない事だが、我にはいまいち使えないのよな」

「む、ギルガメッシュよ。ならば余の願いをだな」

「戯け。我と我が臣民以外に我が財を使う権利はないと申したのであるが。この財は連発可能だが、叶える願いはそう大した物ではない。我が名を覚えていない程度の宝だぞ？ ……そうよな。貴様の受肉は可能ではあるが、赤子になる」

「ああ、そりゃあ駄目だなあ」

「魔力タンクとしては優秀なのだがな。 ……ふむ。仕舞うか」

そう言ってすんなり直してからギルガメッシュはふとズエピアに目をやる。

「吸血鬼よ、次の品目はまだか？」

「いや、君達の王の格がどうこうでタイミングを見失ったのだがね？  
で、早く終わらせようと口を挟んだら今度は聖杯の原点を鑑賞し始めただろう？」

「ふむ、特に許せ」

「……一応は臣下なのだから我慢するのでしょうか。 ……次はギルガメッシュに因んだ料理だ」

「む、私の番か」

「流石にメソポタミア料理はレシピが見つからなかったので、チグリ



ス川流域に伝わる焼き魚『マスグーフ』を用意した。使用した魚は鯉だ。鯉のあらいとして生で食べられるぐらい臭みが少ないものを使用した。魚本来の旨味を全面に押し出す料理なので鮮度と品質には拘っている」

テーブルに切り分ける為のナイフと共に現れた、開きにされた大きな鯉の丸焼き一匹。とだけ言えばシンプルな料理である。が、シンプルな料理程、その調理には細心の注意と丁寧な素材の厳選が求められる。ステーキ然り、刺身然り、一流と三流では雲泥の差が生じるのがシンプルな料理の特徴であると言えるだろう。

今回、いち早く手を付けたのは最も上座に座るギルガメッシュ。優雅かつ手慣れた所作で魚の身を平等に切り分けて分配し、その上で自らが一番先に頬張る。その目は真剣そのものであり、自身に因んだ料理には一切のミスを赦さん、とでも言うようなオーラに自然と彼以外の参列者の視線はその反応を伺うべく彼に注目する。

瞑目しつつ咀嚼し、舌全体で料理を検分する英雄王に、流石のズエピアも額に一滴の汗を浮かべざるを得ない。

何とも言えない沈黙。

それを破ったギルガメッシュの声は、怒声や罵声ではなく、穏やかな笑いだった。その表情はこの戦争中で彼が浮かべた笑みの中でも異質。最古の英雄の風格を見せ付けるような高貴さに溢れる笑みである。

「ふ、吸血鬼よ。一つでも気に喰わぬ所が有ればその首切り落とすつもりであったが、なかなかどうして美味ではないか。誉めて遣わす。今後も励むが良い」

「そんなに旨いのか？ どれ、余も一口。おお、すげえなこれは……！」

齒ごたえ、柔らかさ、火の通り具合、そのどれもが一級品。これが取り分けるべき食材で在るべき事すら忘れて丸々一匹平らげてしまいうような極上の逸品である。

征服王の感嘆の声を聞くその他の面々も口に笑みを浮かべてそれを頬張る。無表情が売りの切嗣と冷徹なケイネスでさえ優しげな微

笑みを浮かべているあたり、人を笑顔にするには旨い料理が一番だという俗説は真理らしい。

「この一匹が焼けるまでに10匹弱がスタッフの晩御飯行きになっているからね。これで駄目なら本当に死ぬ他無い状況だった。首の皮一枚繋がったのは僥倖だ」

「スタッフとは誰だバーサーカー？」

「聖堂教会聖杯戦争隠蔽班の皆さんだよ、ランサー君。影の功労者たる彼等に差し入れて来たのだ。栄養剤片手に日夜働く彼等のお陰で我々は戦闘出来ているのだし、差し入れぐらいいしてもバチは当たらない」

「それは良い心がけだな。失敗とは言いが、喰うには支障ないのだろう？」

「焼き具合などが微妙にしくじっただけだから充分に美味しいはずだ。安心したまえ」

「ふむ、これも丁寧で実に美味しいですバーサーカー。……ブリテンにも魚は居たのですが、何故我々はあんなに雑な調理をしていたのか……」

「戦乱の世では仕方ないだろう、セイバー君。食に贅沢になるには平和な世が必要だからね」

そう答えつつ、ズエピアは次なる料理を呼び出す。手頃なサイズのボウルに盛られたサラダ。コレが四品目目のようだ。

「シリア風パセリサラダ『タツブーレ』。アサシンにちなんだ料理だ。パセリは付け合わせのイメージが強いが、シリアではこの様に野菜としてサラダにする。パセリの香りで魚の味を舌からぬぐい去り、次の肉料理に挑んでくれたまえ。このコースは肉と魚の二つの料理をメインに据えているからね」

「オリーブオイルとパセリの香りが良いわね、これ」

「気が合うわねアインツベルン。パセリをサラダにするなんて考えもなかったけど、パセリって美味しいのね」

女性陣はどうやらお気に召したらしく、アイリスフィールとソラウの何気ない会話が行われる。一度話し始めれば止まらなくなるのが

女性の特徴らしく、二人はキヤイキヤイとお喋りなど始めているあたり、別に三人も集めずとも『女三人寄れば姦しい』は適応されるようだ。

だが男性陣はサラダで口をリセットしたその先に期待が向く。肉料理を期待してしまうのはやはり男子の性なのだろうか。

残るモチーフは二つ。セイバーか、それともライダーか。即ち、イギリス料理か、マケドニア料理かとも言える。

「おやおや、男性陣とセイバー君は随分肉料理を楽しみにしているようだね?」

「騎士たる者は体が資本。なればこそ肉は重要だ。そうですね、ランサー?」

「然り。フィオナ騎士団では狩りの獲物の調理は必須技能だった。肉はそのまま筋肉となる為、騎士としての肉体を研ぐためには重要な物だからだ」

そう言っただけで理由付けを始めるランサーとセイバーだが、『お肉食べたい』という内心がだだ漏れである。

「では、最後二品目は同時に提供するでしょうか。マケドニア料理の『プレスカヴィツツア』とイギリスのデザート『桃のシェリートライフル』だ」

ズエピアがそう言うと同時にテーブルの上から空になった皿が消え失せ、ワイングラスに盛り付けられた華やかなデザートとハンバーグに似た肉料理が出現する。まあ、イギリスが料理ではなくデザート担当なのはイギリス人たるウェイバー、ソラウ、ケイネスには分かっていた事だ。デザートと紅茶だけはイギリスの物でも美味なのだ。デザートと紅茶だけは。

「プレスカヴィツツアか、懐かしいのう」

「征服王、ハンバーグとは違うのか?」

「うむ。プレスカヴィツツアにはパン粉が入っておらんのだよ。それにスパイスを効かせた味付けも特徴よな。……うむ、旨いっ!!」

「ああもう。ライダー! 口が肉汁まみれだぞ?! こっち向け!!」

そう言っただけでライダーの口元をナプキンで拭いているウェイバー、マ

イ箸という有る意味反則な道具で日本人らしく食べている雁夜、優雅に切り分けて食べている時臣、セイバーと二人揃ってモキュモキュと幸せそうに頬張っている切嗣と、それを見守るアイリスフィール。そして、ケイネスの為にハンバーグを切り分けるランサーと、そんな主従を見て内心テンション急上昇なソラウ。

そんな中、いち早く食べ終えたセイバーは桃のシェリートライフルへと食指を伸ばす。シェリー酒を染み込ませたスポンジ生地の上にクリームと共にカットされた桃のシラップ漬けとメントが乗ったそれは花のような見た目を裏切らない華やかな甘味でセイバーに多幸感をもたらす。

「ふふふ、菓子ではイギリスも劣りませんね。菓子では」

「確かに美味よな。我が道化の腕も存分に影響しているのは事実だが」

そんな会話が自然と交わされるようなテーブルに最早諍いの種は見られない。

かくして、聖杯奪還戦争は穏やかにその幕を開けたのであった。

「ねえ、旦那」

「何でしょうリュウノスケ？」

「なんだってこんな山奥に引越したの？」

「リュウノスケ。あの拠点は感づかれたかも知れないですよ。フランス軍元帥の勘です」

「おお!! なんかクールだね、元帥の勘って!!」

そんな風にわいわいと騒ぐのは現在冬木をお騒がせ中の愉快な殺人コンビ、キャスター陣営である。

「で、旦那。あの馬鹿でかい洞窟の魔力がいるって言ってたよね？使えそう?」

「ええ、問題ありません。我々はあれを用いて、より強い冒涇の儀式をしなくてはなりません。そうですね、リュウノスケ!!」

「旦那ってとことん神様が嫌いだよね」

龍之介がそう呟いた瞬間、キャスターは吼えるように語り始める。「そうですね。神は決して我々を救わず、我々を罰しない! かつて私が積み重ねた八年におよぶ悪行は神ならぬ人の強欲によって罰せられ、千の幼子は救済されることなく悲鳴と嘆きを我が城で叫び続けるのみ!! この世に神など居ないのですよリュウノスケッ!」

そう言って吼えるキャスターの声を龍之介は慟哭の様に感じていた。裁かれないがためにこの世で悪徳を犯し続けた男に、神はいかなる裁きも与えなかったのだ。その嘆き、その悲しみは到底推し量れるものではない。

だが龍之介は敢えて否定の言葉を投げかける。いや、彼の唯一の信条に基づき、否定しなくてはならない。芸術家である彼が感じた神様は確かに居るのだから。

「旦那。神様は居るよ」

そう呟く龍之介の顔をキャスターは息を呑んで見つめる。純朴で忠実な自らのマスターが確固とした信念の下に口を開いたのを感じたのだ。

「何故です？ リユウノスケ？ この信仰の薄い極東の島で生まれた貴方が何故そう思うのです？」

「旦那。人間のハラワタや血がなんであんなに色彩豊かなのか分かる？ どうして、この世はこんなに伏線だらけなんだ？ 黄金比とか円周率とかマヤの予言とか伏線以外の何物なんだろう？ ……そう考えたことはない？」 そう言つて龍之介は大气越しに世界を抱き締めんとするように両手をめいっばい広げる。

「こんな愉快でイカレた世界!! 悪も善も、狂気も愛も全てが溢れたワンダーランド!! こんな舞台、誰かが脚本書いてないとあり得ねえ!! きつと誰かが書いてるんだ。登場人物50億の大河ドラマを書いてる飛び切りなエンターテイナーがいるんだよ。そんな奴を形容するにはやっぱり、そりゃあもう、神様としか言えないでしょ。」 キャスターは彼の言葉を吟味するかのように暫し無言で虚空を見据えてから、再び龍之介を見据えて、神父に相談する敬虔な信徒の如く低く厳粛な声で問い掛ける。

「……では、リユウノスケ。果たして神は、人間を愛しているのでしょうか？」

その問いに龍之介は一切の迷い無く即答で返す。

「もう、そりゃ、若干キモいぐらいにぞつこんだよ旦那。だって、この世界の脚本を45億年不眠不休の年中無休で書き続けているんだ、愛がないとやってられないでしょ。きつと神様はこの脚本をノリノリのラリラリで書いてんだと思うよ。愛と勇気に感動して、愁嘆場にはガン泣きして、恐怖と絶望はホラー映画気分ですぐらいきり勃たせて目え剥いてんのさ」

龍之介はそこで一旦言葉を切り、一呼吸の後に結論を告げた。

「神はこの世の全てを愛してるんだよ。正義、勇気、愛、希望。そんなポジティブな展開はもちろん大好きだ。でもそれと同じぐらいに悪や絶望、恐怖に憎悪。そんなネガティブな展開も愛してるんだよ。でなけりゃあ、生き物ごとにご丁寧にハラワタの色を変えるなんて手間の掛かる事するはずがねえ。……だから、旦那。この世は神様の愛に満ち溢れてるよ」

そう告げる龍之介の声をキャスターは神の創りたもうた一片の聖句に聞き入る聖者のような静肅さでもって受け止め、その顔を静かな至福に満ち溢れさせる。

「心服いたしました、龍之介。我がマスターよ。この時代、最早信心も神意も無い最果ての地、そう思っていました、貴方のような聖人に相まみえることが出来るとは……」

「いや、そんな。照れくさいよ」

「しかし………貴方の宗教観に拠るならば、我が流神も茶番なのでしょうか？」

「いやいや、神様は一流のエンターテイナーだよ？ 汚れ役もしつかりばっちりこなしてみせるつもんさ。だから旦那の強烈なツッコミには大喜びでボケを返してくれると思うよ？」

そう返答されたジル・ド・レエは最早愉快極まるというように腹を抱えて哄笑する。

「流神も！ 礼賛も！ 貴方にとっては同じ崇拜であると言うのですね!! ああ、なんと深遠な哲学でしょうか？ 遍く万人を愛玩人形とする神もまた道化とは……成る程！ ならばその悪辣極まりない趣向も領ける!!」

ひとしきり笑ったキャスターは、ギリリとその双眸に狂氣的な情熱の焰を灯す。

「宜しい！ ならば一際鮮やかな絶望と慟哭でもって、神の庭を染め上げてやろうではありませんか!! リユウノスケ!! 天上の演出家に我らの描く最高級のクールを届けますぞ!!」

「また何かすげえ事やるんだね!? 旦那ツツ！」

そう言って嬉々として笑う龍之介とキャスター。彼らの笑い声は地下の洞窟で反響し、劇場を満たす観客の声の如く空間を満たす。

だがそれが『手に負えない何か』を目覚めさせたのだと気付かなかったのが彼等の命運を確定させる。

突如として洞窟内に迸った黒い泥の奔流は、気付く隙すら与えずに、キャスターと龍之介を飲み込んだ。

後には、黒い光を放つ魔法陣——大聖杯が残るのみである。



食事も終わり、飲み会の様相となり始めた会場。知らぬ間にサーヴァント組とマスター組に別れていたこの状況。そんな中でウェイバーだけは何故かライダーに連れられてサーヴァント組に混じっていた。

で、現在、余興としてギルガメッシュの持つ金の聖杯。略して金聖杯に、何か適当な願い事を一人一つ願おうという酔った勢い以外の何者でもないお題でサーヴァント達が盛り上がる中、ウェイバーはなんとも言えない顔でオレンジジュースを飲んでいるわけだ。

「余は何を願うかのお……」

「我はもう決めたぞ、雑種共」

「ほう、ならば願ってみてはどうかね、ギルガメッシュ。私を含めて皆、未だ考えつかないのだからね」

「フツ、我が願いに瞠目せよ雑種共！ 『聖杯よ時臣めをもう少し面白い味のある奴にしろ。してくれ。して下さい』」

ギルガメッシュの願いは実に微妙。神社の願い事レベルのそれだが、聖杯がしっかりと輝いた辺り、きつと叶ったのだろう。微妙な願いが。

「切実な雰囲気でしょうもない事を願いおったぞコイツ」

「英雄王、貴方は酔うと素直になるタイプなのですか……」

「我を貴様等の尺度で考えるな。我は『本当はエルを生き返らせたい』など毛ほども考えておらんわ馬鹿者が」

「ギルガメッシュ、ただ漏れになっているぞ。思考とかギャップとか」

そんな中、静かに考えていたランサーが口を開く。

『モラルタとベガルタを再び我が手に』

「ランサー、酔っても未だ真面目か貴様ツ!？」

「コレは罰ゲームですね」

「む、俺はそんなルールなど聞いていないぞ騎士王!？」

「私が決めました、今」

「なん……だと……?!？」

完全に英霊というか、大学生のノリで話が進む中、罰ゲームをどうするかで更に盛り上がる英霊共。今夜は全員私服な事も相まって、完全にただの学生にしかみえない。そんな中でもちやつかり二振りの剣がランサーの胡座の上に乗っかっていることで聖杯の信憑性が上昇しているのはまあ、酔っ払い共には関係の無い話である。

「罰ゲームはどうするのかね?」

『自害せよ、ランサー』とかどうでしょう」

「それ、もはや罰ゲームじゃなくて罰だろ!? コーラ一気飲みとかにしとけよ!？」

思わずツツコミを入れるウェイバーに、『お前天才じゃね?!』みたいな顔で振り向く英霊共。もはやコントとしか思えないが、酔っ払いに常識は通じない。

無駄に迅速にスーパーマーケットでコーラを購入してきたズエピアのお陰というか、何というか、既に一気飲みが始まっている辺りस्पェック高い奴らがフザケるとロクな事にならない。

「ランサーの、ちよつと良いところ見てみたい! それ、一気! 一気!

一気!!」

「くっ、ノリノリ過ぎるだろう騎士王!?! ……南無三!!」

妙に古臭い言葉を吐いて、500ミリのコーラを一気飲みするランサー。咽せることなく飲めてしまう辺り、無駄にस्पェックを浪費している。

「……プハッ!? 飲みきったぞ……ゲフ……騎士王……ゲフウ……」

「ガハハハハ、やるではないか!! 余も願いが決まったぞ? 『ウェイバーの身長がまだ成長しますように』」

「ファックツ!? 何願ってくれやがりますかオマエはアアアアアツ!？」

「おお、ウェイバー君ナイスツツコミではないか」

「クハハハハッ!! 愉快だなライダーのマスターよ? 我が財である

『ピコピコハンマーの原点』を下賜してやっても良いぞ?」  
「誰が要るか?」

キレツキレのツツコミが気に入ったらしいギルガメツシユのから  
かにツツコミ、更に笑われるウエイバー。

箸が転がっても面白い状態なのか、ギルガメツシユには珍しく「我  
にツツコミを入れるとは不遜だが、良いぞ。特に許す」などと言われ  
ているが、酔っ払いにツツコミをいちいち入れるのも疲れたのか、  
ウエイバーは大きく溜め息を吐いてオレンジジュースを飲む作業に  
戻る。もうツツコまないぞ、などとフラグを立ててしまっているのに  
気付いていないあたり、彼も酔っているのだろう。

「さて、余の次は誰が願うのだ? 騎士王か? それともバーサー  
カーか?」

「私が願います、良いですねバーサーカー」

「構わないよセイバー君。トリは任せたまえ」

「では、『聖杯よ、ブリテンの料理をもう少し手軽に美味しくして下さい  
い』」

セイバーのその願いに、聖杯はその身を毎度の如く輝かせる。  
が。

——エラー・EX宝具の改竄は不可能です——

「宝具ですかッ!?!」

「むう。なぜ、飯が宝具になっておるのだ?」

「ふむ、コレはもしかや……」

「二知っているのかズエピア!?!」

「うむ。民明書房ではないのだがね。……宝具とは人々の願いや認識  
が形になったものだ。セイバー君のエクスカリバーがその例と言え  
よう。……で、此処からは仮説なのだが、全人類の『イギリス料理は  
マズい』という認識が既に概念宝具の域に辿り着いているのではない  
だろうか」

なんてこつたい。

そんな空気が溢れる中、セイバーが実に渋い顔で次善の願い事を言  
う。

「……仕方ありません『大きなライオンのぬいぐるみが欲しいです』  
今度はしっかりとセイバーの膝の上に可愛らしいライオンが現れる。  
セイバーはふてくされたのかそれに顔をうずめてモフモフし始めた。

「ふむ、案外年相応の趣味もあるのだね。……では、最後は私か」

「うむ、我を楽しませよ吸血鬼」

「いや、今回は君達を着に私が楽しむ番だ。喰らえ諸君!! 『聖杯よ。この聖杯戦争に参加した英霊の生前の関係者と直通するテレビ電話を寄越したまえ!!』」

謎の沈黙。意味不明な願いに困惑しているのがセイバー、ライダー、ランサー。そして、ズエピアの真意を理解して戦慄しているのがギルガメッシュだ。

だが、そんな面々に構う事なく、黄金の聖杯はズエピアの前に空中投影型のSFチックな電話を呼び出す。その大きさはちょうどポケベル程だ。本来数字のボタンが付く部分に刻まれた文字がサーヴァントのクラスになっっている以外は別段変化はない。そのボタンをズエピアは素早く「セイバー」にセットし通話ボタンを押す。「お約束だが、言っておくでしょう。ポチツとな」 そんな間抜けな声のあと、画面に映ったのは……………。

『王よ!! 何故女性である事を隠しておられたのだ!! まさか叔父上が叔母上だったとは知りませんでしたよ!? 永遠の17歳とか私の好みストライクですよ!?!』

『ガウエイン。キモいぞ teme』

『ガウエインは元からだ。しかし、お前も先程「まさか女だっただど……そりゃ、オレを認知しねえ筈だわ。オヤジとか吹き込みやがつて、死ねよモリガンの糞ババア」などと呟いていた気がするのだが？

モードレット?』

『死ね、ランスロット』

『……何故!?!』

円卓の騎士らしき残念なイケメン共である。

「ふむ。予想外に愉快ではないかね。ねえセイバー君」

「ぬおおお………」

首まで真っ赤にして、おおよそ乙女らしからぬ呻き声を出すセイバーとそれをニヤニヤと眺めるズエピア。そんな状況を見て、ギルガメッシュがぼそりと漏らす。

「吸血鬼、我ですら考え付かぬ拷問を生み出すとは、よもや天才か!」  
「いや、英雄王。そりゃ、今更すぎるだろうよ。あやつ之才覚は余でも知つとるぞ?」

そう言つてライダーがツツコむ隙に、どうにか復活したセイバーはテレビに向かつてまくし立てる。

「言えるわけ無いでしょう! 私に女だと知られば円卓の騎士がどうなつていたか分からない訳ではないはずだ!!」

『え? そんなの永遠に仲良しだったに決まつてるじゃないですか』

「あるえー!」

「セイバー君、セイバー君。キャラ崩壊しているようだが大丈夫かね?」

「いや、俺の見る限りお前が原因だろう、バーサーカーよ」  
「何のことかな?」

そう言うズエピアの注意が逸れた隙に、セイバーはズエピアの手にある電話のボタンを押す。そのボタンは……『ギルガメッシュ』

「おのれセイバー!」

『やあ、ギル。元気そうだね』

そんな風に言つて画面に登場したのは翡翠のような長髪を持つ女性らしき人物。「……我の友、エルキドウド。その程度察しろ」

何やら急に大人しくなったギルガメッシュに、画面の中の人物……エルキドウドは、よよよと泣き真似をしつつ告げる。

『水臭いじゃないかギル。2人で裸になってあんなになるまで組んず解れつして汗を流した仲なのに、友達だなんて』

「……ほう?」

エルキドウドの爆弾発言にサーヴァント全員が「ぬおおおおう!」な

どと悶えるギルガメッシュに視線を向ける。

「英雄王、詳しく」

「コレは予想外の展開だね。もはや性別違い程度では驚かないが、流石にこれは」

「ガツハツハ、英雄王、やはり隅に置けぬ奴よな!!」

「成る程。これがソラウ様が熱弁されていた『幼なじみ系カップル』というモノなのだな」

「ぬぐぐぐぐぐ………。事実なのが質が悪いぞエル……。が、我が手ずから貴様等のその勘違いを正してくれる。……。エルが言っているのは取っ組み合いの大喧嘩の事だ、雑種共」

『幼なじみ系カップルは本当だけどね』

「それも嘘だぞ、雑種共」

『やれやれ。こんなに愛を囁いても糠に釘とはね。そもそも、毎日一緒に寝てたのに夜這いの一つも無いとか何処まで甲斐性無し………』

「ぬわああああああ!?!」

流石に耐えきれなかったらしいギルガメッシュは神速でボタンを切り替える。

次なるボタンは……『ランサー』だ。

「む、俺か」

『デイル! 頑張ってるか?』

「おお、オシーン殿か! ああ、新しい主も良い人だし、俺でもやっていけそうだ」

『それは良かった。その国では俺たちケルトの英雄はあまり知られてないらしいけど頑張ってくれ!』

「ああ、任せろ友よ」

そんな会話を交わすデイルムツドとオシーン。ある意味由緒正しいテレビ電話の用法だが、ギルガメッシュとセイバーは何やらつまらなさそうである。

「吸血鬼、最後に貴様のボタンを押すが良い。いや、押せ」

「そうです、バーサーカー。自分のボタンを押すのです」

「ふむ、別に構わないがね？ ポチツとな」

その声と共に画面に現れたのは……ロリ、老人、長身男性、そして南京錠。共通点は唯一つ、全員の目が紅いことである。

『……ズエピアか。久しいな』

「ネロ君か。混沌は制御出来そうかね？」『……いや、どうにも安定性に欠ける』

『やあやあ、ズエピア君。死んだんじゃないのか？』

「相変わらずだな、コーバツク君。遮られたネロ君が鍵穴に針金蟲をねじ込んでいるが、無事かね？」

『大丈夫だ、問題ない』

「フラグ乙とだけ言っておこう」

そんな会話の中、黙っていた老人、宝石翁ゼルレツチがぼそりと呟く。

『特定した』

「怖いのでその言い方はやめてくれたまえ。何を送りつけるつもりかね？ カレイドステツキだけは御免被るよ」

『チツ……』

「やはりそうだったのか」

相手はともかく、交友関係は比較的マトモなズエピアに、ギルガメツシユとセイバーは歯噛みする。そんな中、横から伸びた指が『ライダー』のキーを押す。

「余の相手も見せろ。……ってなんだ、ブケファラスか」

『ヒヒーン』

「馬かよ!?!」

英霊全員から素で突っ込まれ、ガツハツハと笑うライダー。

そんなテンションとノリと酒の力を借りて、宴はまだまだ続く。続くと思ったら続く。

朝。昨夜の宴会の影響か、雁夜が目を覚めたのは日が昇ってから数時間たった午前九時。隣にある桜の布団には、既に桜の影はなく、リビングから『白き月姫ファンタズムーン、次回も見てね！ マーブルく、ファンタズムっ!!』などと子供向けアニメの音声が流れている。そんな中、部屋の中で異彩を放つ存在が一人。フリルなどの飾り気を排し、エプロンに幾つかポケットを付けた機能的重視のメイド服を着た小麦色の肌を持つ女性。ぴよこんとハネた触角の様な一房の前髪が可愛らしいが、その表情は非常に薄い。

その顔を、雁夜はどこかで見た気がした。

「……マスター、間桐雁夜の起床を確認」「……誰だ？ ……いや、待て、どこかで」

「私はラニⅡⅣ。我が師、ズエピア・エルトナム・オベローンに錬成されたホムンクルスです。……覚えておられますか？」

「……らにふおー？」

「……昨夜の記憶を失っているのですね、マスター雁夜。……黄金の聖杯に何か願いませんでしたか？」

その質問に数秒考えを巡らせていた雁夜は、唐突に昨夜の記憶を取り戻した。

「あああああ!？」

「思い出されましたね、マスター雁夜」

『ズエピアの錬金術が観たい』って願った気がする……」

「その通りです。貴方は余興として錬金術の披露を要求し、ズエピア師がそれを実行。師が生前使用されていたホムンクルスである私、ラニⅡⅣを再錬成なさいました。その後、血中のアセトアルデヒドの増加現界に達したマスター雁夜が睡眠を開始。此方の隠れ家までズエピア師によって転移させられ、今まで休息されていました」

その説明で改めて状況を把握した雁夜はがっくりとうなだれる。



酔っていたにしては、悪くはないが良くもない願いだが……。

「……どうせなら、もつとマシな事を願えば良かった」

「……？ マスター雁夜、ズエピア師は錬金術師です。錬金術師が錬金術を取り戻したのは喜ばしい事では？」

「……いや、まあ、そうなんだけど。……この聖杯戦争がロールプレイングゲームに似ているのは分かるか？」

「ええ、それが何か？」

「ロールプレイングで一番大事なステータスは、ズバリ幸運だ。幸運って奴は、命中、回避、クリティカル、アイテムドロップにエンカウント率と、多彩な状況に補正を掛ける。それを上げとけば良かったと思うてな」

「成る程。確かにその理論は理解できます。が、それは対象が通常の錬金術師だった場合です。私の師、ズエピア・エルトナム・オベローンの錬金術は並の錬金術師を山と積まねば届かぬ領域です。普通、ホムンクルスとはパーティーの余興程度で気軽に、それも適当な生ゴミから作る物では無いのですよ？」

「……ちなみに、普通だと？」

「大量の人間の遺伝子サンプルから適切な物を選び、素材を選定し、術式を構築し、錬成陣を組んで適切な日、適切な場所で儀式を行います。時間にして約一年以上掛かりますね。それを師は片手間に一瞬で生ゴミを素材に行ったのですよ。遺伝情報を完全に解明した上で暗記し、更に電子レベルで錬成できる師だからこそその荒業です」………今更だが、とんでもないサーヴァントだな、ズエピア」

「真祖は最高位の精霊ですので、妥当なレベルかと」

そう答えてから、ラニⅡⅣはさて、と言うように咳払いをして、話題を切り換える。

「マスター雁夜。納得いただけただけのならばりビングでランチをお食べ下さい。私はズエピア師より『あなた方の世話』を命じられておりますので」

「……わかった」

そう言っつて雁夜はゴソゴソと布団から這いだし、間仕切りの向こう

で和服からいつものジャージ姿へと着替える。

間桐一家の一日は、新たなメンバーを加え、今日も始まったのだつた。

さて、視点は変わり、アインツベルン陣営。朝のティータイムを楽しむ切嗣とアイリスフィールを前に、セイバーは居心地悪そうにもぞもぞとしている。

まあ、主にその周囲を取り巻くスーツ姿の三人組が原因なわけだが。

「む、王よ、顔色が優れませんが……」

「察しろよ、ガウエイン。オレ達が居るから気まずいんだろ？」

「……その通りだ。……特に、私が原因だろう」

「ランスロット。てめえもそのマイナス思考をどうにかしろ。ウチの親父……じゃねえや、えーつと、姉さん？ は基本的に大らかで天真爛漫だ。食い物の怨みを買わねえ限りはな」

とまあ、ランスロット、モードレット、ガウエインの残念騎士トリオである。セイバーは彼等のひそひそ話に溜め息を一つ吐いて切嗣に質問する。

「……何故、黄金の聖杯で、よりによってこの三人を召喚したのですか切嗣。ステータスオールE、宝具無し、スキル無しの最弱サーヴァントが三人いた所で戦況が変わるとは思えません……」

「……舞弥の代わりだ。ランスロットは伝承通りの破壊工作技能と潜入能力を持つているし、モードレットは騎士道を無視した白兵戦、いわゆるCCCの使い手。ガウエインはアイリスフィールの護衛に打って付けの騎士道馬鹿。セイバーのサポートにはベストな布陣だと思っただが。それに、ランスロットとモードレットに銃を持たせれば上手く行けばキャスターのマスターを手早く処理できる」

切嗣の声には何の躊躇いもない。確かに一度捕獲された舞弥は『ナニカサレタ』可能性がある以上、仮に奪還したとして手近には置けないのは判る。それに、切嗣の言うようにランスロット、モードレット

の二人は切嗣の補佐として適任であるのも確かだし、ガウエインが手伝ってくれるのはセイバーとしても有り難い。だが、セイバーはそれでも気になる事があった。

「……切嗣の目的は理解しました。ですが……あなた達は納得したのですか？ サー・ランズロット、サー・ガウエイン、モードレッド」「ん？ まあ、オレのスタイルを肯定してくれるマスターなんだ、オレは文句無しだぜ」

「私は再び王に仕える栄を与えて頂いたので満足です」

「……私も赦されるならば再び貴女に仕えたい。王よ」

「……納得済みですか。ならば良いのですが……」

そう言うセイバーの表情は不服、と言うよりは秘密がバレたときの気まずい表情である。そんなセイバーを見て、今まで静観していたアイリスフィールは思わず笑みをこぼしてしまう。

「む、何が可笑しいのです、アイリスフィール」

「ああ、気分を悪くしないでね、セイバー。やっぱり貴方は可愛いなと思っただけだから」

そう言うアイリスフィールの発言にセイバーはからかわれたと思ったのか、プクツと頬を膨らませて不満を示す。が、横から伸びた人差し指三本にむにとつつかれ、むくれ顔は一瞬で解除された。

「ぶはっ。……何をするのでですか!!」

「姉さん、可愛い顔が台無しだぜ？」

「その通りです、貴方には笑顔が似合います、王よ」

「……すみません。あまりに可愛らしかったのでつい」

「あらあら、『おとめげえむ』みたいね、セイバー」

何やら花がまき散らされそうなセリフをサラリと吐くイケメン2人と男装女子。それと、くすくすと笑うアイリスフィール。

「……むう。……まあ確かに大人気ない表情でした。……時にアイリスフィール、その『乙女ゲーム』とは何ですか？」

「イケメンに囲まれてイケメンハーレムを築き上げるゲーム、らしいわ。ソラウさんいわく。あと、イケメンとイケメンがネチヨネチヨした友情を育む『びいえるげえむ』と言う物もこれに含まれるそうよっ」

「ブハアッ!?!」

「あら、大丈夫? 切嗣?」

紅茶がモロに気管に入ったらしい切嗣は、ゲホゲホとむせつつ、天に向かつて吼える。

「人の! お嫁さんに!! なに吹き込んでくれてるんだあの魔女ツツ!?!」

アインツベルンの森に、今日も切嗣の音が響き渡る。

ある意味、これが一日のテンプレートになりつつあるアインツベルン陣営であった。

さて、今度は切嗣のシャウト先であるランサー陣営。彼等は今、各々思い思いの朝を過ごしている。

モラルタ、ベガルタ、ゲイ・ジャルグ、そしてゲイ・ボウ。それら四つの武器を切り替えて朝のトレーニングを行うランサー。

紅茶を飲みつつ、昨夜の会談で得た情報から新たな礼装を制作するケイネス。

そして、今日も朝の『読書』を楽しむソラウ。

そんな中、昨夜と異なる点と言えば……………。

「ふむ、やはり広々とした拠点は良いものだな」

「ええ、あなたの『拠点の拡張』という願いはシンプルイズベストだったと思うわ、ケイネス」

「訓練場を造って戴いたおかげで、我が槍の冴えも一層鋭くなっております」

というわけで、拠点が巨大化している。前回の反省から高層化はせずに二階建ての庭付き一戸建て邸宅へと変化したランサー陣営の拠点は訓練用の中庭を備えた他、強化魔法による住宅自体の強度上昇、多重結界による敷地内への侵入阻止、十重二十重の致死トラップ。

現在、ケイネスが構築しているのはそれに加えてより防衛力を上げるために配置する、番犬代わりのゴーレムである。

「ふむ、こんな所か」

「ケイネス様、それが昨晚言っておられた『月霊髓液・改』ですか？」  
「ああ、まず魔力供給をバッテリー式にした。勿論、魔力炉などに接続したまま運用する事も可能なうえ、緊急時には私からも魔力を供給出来る。まあ、バッテリーでも一日は駆動出来るので、普段はバッテリーで充分だし、この敷地内では常に魔力炉と接続しているのだがな。次に、圧力感知力を更に強化し、周囲の音を拾うことで擬似的な視覚すら持つに至った。最後に、学習機能を付け足した事で、私がい

ちいち指示せずとも行動出来る。私とソラウには攻撃出来ないように設定しているので安全性も万全だ。昨夜のホムンクルスから自律性と単独行動性を盛り込むことを閃いたのだ」

そう自慢げに語るケイネスに、ランサーはふと気になった部分を指摘する。

「む、私には攻撃可能なのですか……？」「ああ。だが、悪意あつての事ではないぞ、ランサー。そうだな、テストも兼ねて実演と行くか」そう言つてケイネスが指を弾くと、『月霊髓液』はその姿を、人型へと変じさせる。腕の様な部分の先に長い棘を生やしてぎこちなく構えるその姿は、どことなくランサーに似ている。

「これが、『月霊髓液・人間形態』。まあ、何だ。お前も手合わせする相手は必要だろう、ランサー？ たかが傀儡だが、油断はするなよ？ この礼装は敷地内ならば不死身だ。どれだけ切り飛ばされても回復する。その上学習機能も付加されているのだ。すぐに追い付かれるかも知れんぞ。……ああ、ランサー。流星にゲイ・ジャルグには弱い。訓練用の槍を使え」

「有り難き幸せ!! より一層訓練にも身が入りまする!!」

そう言つて訓練場の真ん中で槍代わりの鉄の棒を構えるランサーと、その動きを真似ているらしい月霊髓液。暫く、軽い打ち合いをしていた両者の動きは次第により熾烈なモノとなり、訓練場に闘気が満ちあふれる。一度受けた手は二度と受けない強敵を相手にランサーの口元は獰猛な獣のように弧を描く。

その姿を見てデータを採りつつ、ケイネスは独白する。

「ふむ。月霊髓液との打ち合いでランサーは強化され、それに合わせて月霊髓液は進化。結果として拠点の防衛力が増加し、ランサーは鍛え上げた武を背後を気にせず振るえる。……我ながら、完璧なプランだ」

そうこぼすケイネスに、普通ならば誰も異は唱えない。それほどにケイネスの編んだ策は素晴らしい物だ。だが、策ではなく、在り方に口を挟む者が一人。婚約者のソラウだ。

「駄目よ、ケイネス。天狗にならないと誓つたのは貴方だったでしょ

う？」

「む……。すまない、ソラウ。いや、ありがとう。危うく、以前の私に戻る所だったよ。この国では『勝つて兜の緒を締めよ』というからね。策が成った時こそ、気を引き締めねば」

「その意気よケイネス。あなたはランサーとカップリン……じゃなくて、コンビなのだから。ランサーの武を使いこなす策士でなくっちゃ」

「ああ、まだまだ努力が必要だな。ならば、早速次の作戦を練ろう。一分一秒が惜しいからね」

そう言つて顔にかかる髪を払い、再び魔術に没頭するケイネスと、その姿に微笑みつつ戦場を颯爽と駆ける主従を『妄想』してニコニコ笑顔のソラウ。そして、地獄の訓練を受けながらも楽しそうなランサー。

努力を尽くす天才という怪物に着実に近づくケイネス達は、今日も地道に足元を固めるのだった。

さて、努力と言えば、やはり遠坂。泳ぐ白鳥よろしく優雅に振る舞うために水面下で途方もない努力を積む、ある意味脳筋なこの血族の現当主、遠坂時臣は、自室で紅茶の香りを楽しんでいた。

そんな中、部屋の隅にあるソファに座るのはぐったりとしたギルガメッシュと肌を艶々と光らせているエルキドゥ。

昨夜の『多少の面白み』補正なのか、それとも素なのか、時臣が願ったのは『エルキドゥの召喚』。妙な所で頭を働かせた時臣が『ギルガメッシュを触媒にして』召喚したため、性能はどこぞの騎士トリオよりはマシなオールD。宝具はないものの、スキル「気配感知」Eランクながらも所持しており、不意打ち対策には充分なステータスを持つエルキドゥの召喚はまあ、比較的良好い策だっただろう。

が。英雄王からすれば、ある意味で災難だった。まあ、ナニが災難だったかは言うまいが、ソラウさんが迸るパトスで神話に成りかねな

いっただけ言っておく。

「ごめんよ、ギル。今度から手加減するから」

「……頼む。今の我は意外にピンチなのでな………現界を保つのも辛……く………」

そう言い残してギルガメツシユはガクリとソファに沈み込み、泥のような眠りに落ちる。エルキドゥは肉体スペック特化なのに対し、ギルガメツシユは宝具特化。

今の今まで不眠不休だった彼が爆睡するのを誰が笑えようか。

そんなギルガメツシユの頭を膝に乗せ、優しく頭を撫で始めたエルキドゥ。その様子を見ていた時臣は、ふと気になった事を質問する。

「エルキドゥ様」

「なんだい？ 遠坂時臣」

「申し上げにくいのですが、貴方の性別が少々気にかかるのです。男性なのか女性なのか………」

その質問に、エルキドゥは、むう、と口に手を当てて暫し考えを巡らせる。

「うーん。今は女の子だよ？ 膝枕はやっぱり女の子じゃないとね。

男の子だと柔らかさが足りない」

「今は……？ つまり、性別を切り替えられるのですか？」

「本来は姿も自在なんだけどね。弱体化したから現状では若干しか変化がないんだよ」

性転換は若干なのだろうか？ という疑問を、時臣は紅茶で飲み下す。

「ふむ。理解しました。妙な質問をしてしまい申し訳ありません、エルキドゥ様」

「あはは、そう畏まらなくても良いよ？ ああ、それと、僕の性別は面倒だから男の娘って事で宜しくね」

「……分かりました」

正直余計に面倒な気がする。そんな感想と共に『エルキドゥは天然系』と脳に刻み込んだ時臣はふと思いついた次の質問を口にする。

「……時に、英雄王の事なのですが……昨夜小耳に挟みましたが、お好



きなのですか？ 恋愛的な意味で」

時臣のストレートな質問に、眠って居るはずのギルガメッシュの耳がピクリと動く。が、それに気付いたのはエルキドウのみ。

確かに視界に収めているのに、気付かない辺りT・U・E。――遠坂うっかりエフエクト―は未だに猛威を奮っているらしい。

「うーん。恋愛より家族愛かな。ギルは、なんか手の掛かる弟って感じなんだよね。目を離れたらすぐに訳分かんない法律作るし、こっそり遊びに出かけるし。でもそこが可愛いんだよね。なんて言うの？

あれだ『馬鹿な子ほど可愛い』ってやつ？ もうね、ギル可愛いよギル。例えば昨日もお風呂で……………」

「わああああああ!？」

何やら絶叫しつつ飛び起きた英雄王。が、素早くエルキドウに捕獲され、その膝にちよこんと座る羽目になる。

「む、おはようございます。王よ」

「おちおち寝ていられんではないか!? 何コレ。我、虐められてない?」

「パニックったギルも可愛いねー。地味にレアだし?」

「うっ!! ……………ハア。厄日から厄年に変更かもしれぬな、我の運勢」

「悟ったみたいな顔してもお姉さんの追撃からは逃げられないゾ?」

「うわあ、ウゼエ」

完璧に童心に帰っている2人と、38度のヌルい眼差しでそれを見つめる時臣。

相も変わらぬギルガメッシュ陣営は、今日も余裕を持って慢心していた。

さて、ウェイバーとライダーは、現在お好み焼き屋を訪れていた。時刻は丁度正午。腹の虫をなだめるべく店に入った2人は奥の座敷でくつろいでいる。

「しかし、お主の昨日の願いはなかなか上策だったな、ウェイバーよ」  
「……『並列思考の取得』だろ？ まあ、二つしかないけど、それでも前とは段違いだからな。……軍師がトロいのはマズいだろ、ライダー」

「然り。軍師たるもの常に冷静に頭を捻らねばならん。……だがしかし、その真価を発揮するのがツツコミあたりが、お前らしいよなあ？」

「それを言うなよな」

そう言つて膨れてみせるウェイバーにライダーはガツハツハといつもの豪快な笑い声と共にこんがり焼けたお好み焼きを寄越す。そのソースと鰹節の香りに釣られてチマチマ食べつつ、ウェイバーは昨夜の宴会を回想してふと呟く。「そういうえば、何でお前だけ馬だったんだ？」

「さあなあ？ ブケファラス以外は忙しかったのではないか？」

「忙しい………？」

「英霊つてのは案外暇がないんだぞ？ 巨大隕石から地球を救ったり核戦争を阻止したりしなきゃならんからな」

そう言つて、ライダーはお好み焼きをバクリと喰らう。普通、お好み焼きは一口で半減しないのよな、などと思いながら、自分のサーヴァントのデカさに呆れるウェイバーだが、そんな中、偶々見覚えのある男が来店した事に気付く。

「なあ、ライダー。……あれ、バーサーカーだよな？」

「ん？ おお、ありゃあ確かにバーサーカー。女連れとは羨ましいが……見覚えの無い連れだな」

その声に此方に気づいたのか、ズエピアと連れの少女達はテクテクとウェイバー達に近寄ってくる。

「やあ、昨夜ぶりだねライダー君、ウェイバー君。……相席宜しいかな？ どうにも他の席は家族連れらしくてね」

「おう、構わんぞ？」

「おい、相談する素振りくらい見せろよライダー……別に相席自体は良いけどさ」

そんな会話をしつつ座席を移動するウェイバーとライダー。結果的に丁度女性陣と男性陣が向かい合わせに座る形になる。

「……で、バーサーカーよ。そっちの連中は誰なんだ？ 余の勘では人間ではないようだが……」

その質問に2人組の左側。赤毛の少女が鈴の音のような美声を不機嫌そうに響かせる。

「私を知らないなんて、随分古いのね、この猪は。……まあ、マネージャーの知り合いみたいだし、串刺しは勘弁してあげるわ」

「君も有名なのだがね、エリザベート君。……紹介しよう。竜の血を引く美少女で、趣味はお風呂、最近頑張っているのは料理。ギター片手に音楽業界に殴り込みを掛ける……予定の吸血系アイドル、エリザベート・バートリー君だ」

「しっかり脳味噌に刻みなさい、さもないと物理的に刻み込むわよー」  
そう言っつてビシリと指を突きつけるエリザベート。まあ、その姿にツツコミを入れない訳には行かず、ウェイバーは冷や汗と共に口を開く。

「いや、何で血の伯爵夫人がアイドルなんだよ……」

「あら、ナイスレスポンスよ、チワワ。まあ、アイドルについて語りたいのは山々なんだけれど、長くなるから今は良いわ。私のバンドメンバーを紹介しないとだし」

そう言っつてチラリと横に座る長身白髪 of 男性に目をやるエリザベートに釣られて、ウェイバーとライダーの目線も動く。視線を集中させられた男性は優雅な所作でお冷やを飲みつつ、挨拶を返す。

「私は、ヴラド三世。またの名をヴラド・ドラクリヤ。かつてルーマニアを続べた王だ。……此度はある条件をもとに現界している」

「……と、いうわけで、ヴラド君だ。まあ、彼の依頼は既に完遂してい

るのだが」

「む？ 気になるではないか。何なのだ？ その願いとは」

征服王の疑問に、ヴラドは苦笑を浮かべて返答する。

「私の伝記をしたためて出版するという契約でね。……忌まわしいドラキュラの名を少しでも薄められればよいのだが」

「む。……ああそうか。お前さんは謂われのない悪名を背負つとるんだったな」

「然り。我が国、我が治世に悔いはない。故に何の理由もなく貶められるなど耐えられんのだ。……聖杯を得る事が出来ぬならば、出来る範囲で汚名返上をしなければなるまい？」

そう言つて穏やかな物腰で話す彼は、成る程確かに伝承の吸血鬼とは思えない。にも関わらず、何故ズエピアに召喚されたのかとウエイバーは思考を巡らせる。そんな彼の表情を読んだのか、ヴラドは注釈を付ける。

「……不名誉な事に、私は吸血鬼化のスキルを所有している。彼に呼び出されたのはそれが原因だろうな。それと、言い忘れたが、私はキーボード担当との事だ。……人質時代にチェンバロを覚えたとはいえ、昔とつた杵柄レベルなのだが。あと、趣味は裁縫だな。……私の自己紹介は以上だ」

そう言つて口を閉ざすヴラドは、お好み焼きのメニューに没頭する。

そんな中、ウェイバーは流石にズエピアの行動を察していた。

「発動したのか？ 固有結界？」

「ああ。そろそろ良い頃合いだからね。時間があるときに敷設しておかないと」

彼が何気なく告げるその言葉はどうしようもなく重大で。

嵐の気配を感じさせる物だった。

冬木の地下に広がる下水道。その一角を改造して作られた雁夜の工房の中心、居住用の空間として作られたリビング。そこで雁夜は胡座をかいたまま、何やら苦々しげな表情を浮かべていた。

「マスター雁夜。表情が優れませんが、どうされましたか？」

「……」

「マスター？ 体調に異常があるのですか？」

「……」

「……………マスター？」

無反応、と言うより思考に没頭してそもそも『聞いていない』雁夜に話し掛けるラニⅡⅣ。そんな彼女を見かねて手を差し伸べるのは、頼れる幼女——養女でも可——の桜である。

「まかせて、ラニちゃん」

「おや。桜さん、何をするつも……」

ラニⅡⅣが問うより先に桜の身体は雁夜に向かって駆け出し、雁夜の胡座を踏みつけて跳躍。

「しゃいにんぐ・桜・ういぎーどっ！」

その側頭部に挟り込むように回転力と魔力の乗った膝を叩き込み、雁夜を「ひでぶ!!」という声と共に蹴り倒す事に成功した。

「……………うう。何事だ？」

「おはよう、おじさん。…………ラニちゃん、おじさん元に戻ったよ」

「エクセレント。素晴らしい蹴りです、桜さん」

「桜ちゃん、プロレス好きだね……。で、何かあったのか？」

そう言って立ち上がる雁夜。桜のプロレスごっこには既に適応したらしく、素早く回復している。完全に死徒の能力の無駄使いだが、まあ話が早く進む分ラニⅡⅣには得しかないので気にする様子はない。

「マスター雁夜の顔色が悪かったので声を掛けたのですが、応答がなかったのです」

「ああ、成る程。まあ、何だ……町に現れる怪魔の数がどんどん増えて

てな」

「怪魔が増加……つまり、キャスターの行動が活発化している？」

「それも尋常な数じゃないんだよな、これが。……今日だけで100は蟲に喰わせたつてのに、まだ減った様子がない」

「それは不可解ですね……。師に相談されては如何ですか？」

「それはそうなんだが、ズエピアに頼りつきりつてのものなあ……」

そう呟く雁夜に、ラニⅡⅣは溜め息を吐きつつ助言する。

「自身を高めるのは良いことですが、時と場合によります。……戦争で情報共有を洩ると取り返しの付かない事態を招きかねません」

「……………確かに。……ラニⅡⅣ、電話を取ってくれ」

「エクセレント、良い判断です」

そう言うラニⅡⅣが差し出す電話を慣れた手付きでコールする雁夜。コールするのはズエピアのケータイ。

此処最近で他人の話聞く事が多くなった雁夜は以前よりも切り替えの早い男になっていた。

一方その頃。双子館の間桐陣営バーサーカー組は三時のおやつタイムを楽しんでいる。其処にいるのは、ズエピア、舞弥、ポニー、エリザベート、ヴラドの五人。

オレンジマーマレードがたっぷり入ったシフォンケーキとキャンディ産茶葉のミルクティーを楽しみつつ、彼等は現状整理をしているのだ。

「しかし、随分増えましたね、英霊。正直混乱気味なんです。教えて！ズエピア先生！」

「ふむ、大分我々のほのぼのの感に毒されてきたね、ポニー君。……しかしまあ確かに君や舞弥君には説明していかないな。……丁度良い機会だし、軽く説明するでしょう」

そう言つてコホンと咳払いをし、ズエピアは指を三本立てる。

「現状、大別すれば冬木にいる英霊は3タイプだ。まず、冬木の聖杯に

呼び出された我々七騎のサーヴァント。次に黄金の聖杯から呼び出された四騎のサーヴァント。そして、私の固有結界から投影された死徒2体。イレギュラークラスのアヴェンジャーも含めれば、実に12騎の英霊と2体の吸血鬼が揃った事になるね。……此処までで質問は?」

「マネージャー。私とヴラドはサーヴァントじゃないの?」

「む、エリザベート君には説明した気が……まあいいか。……君達は私が召喚した使い魔だからね。当然だが、英霊ではあってもサーヴァントではない。違う点は肉体の構成要素だろうか。サーヴァントが霊子で身体を構成しているのに対して、君達は普通に血と肉と骨で出来ている。まあ、私の固有結界は『死徒の肉体を生成』、『肉体に召喚したい吸血鬼の霊魂を定着』、『使い魔完成』のプロセスで出来ているから当たり前だが」

「つまり、我々は現在の肉体に憑依している状態であり、正確には召喚術より神降ろしの儀式に近い訳だな」

「ナイス補足だヴラド君。……まあ君達を私は生前に何回か見たことがあるのでね。降霊は容易だった」

そう言うズエピアに、ヴラドとエリザベートは首を傾げる。

「あら? 私マネージャーとはこの戦争が初対面だと思っただけだ」と

「私もお前と会った記憶は無いぞ、ズエピア」

「君達を私が一方的に知っているだけだからね。エリザベート君は1595年に『ロミオとジュリエット』の初上演以降ちよくちよく劇場で見掛けたし、ヴラド君は戦場で一回見かけている」

「戦場?」

「当時、戦場は我々吸血鬼に取って数少ない安全な狩場だったからね。血の匂いを追っているときに、串刺し死体を並べる君を見つけたただけの話だ」

そう言うヴラドは納得したような表情で頷いた。

と、その時、ズエピアの携帯がピロピロと安っぽいコール音をならした。雁夜からの電話だ。

「もしもし。何かあったのかね、雁夜」

『ああ、実は……………』

「成る程。まあ、怪魔の増殖が活発化しているならばキャスターが動いたと見て間違いない。…………何をしでかすのかは流石に分からないがね」

『…………アイツはサモナーだよな』

「む？ 今更だね。確かにキャスターはサモナータイプの魔術師だが」

『いや、間桐もサモナーだからな。…………で、間桐の視点から考えたんだが』

「ふむ」

電話の向こうで雁夜は息を整えてゆっくりと発声する。

『ズエピア、キャスターは多分、近い内に最高戦力を召喚するつもりだ。怪魔はそのためのデコイに過ぎない。雑魚をバラまいてからじっくり本命に取り掛かるつもり何じやないか？』

「成る程。…………彼の最高戦力が想定通りならかなりマズいな。アレが召喚される前にキャスターを見つけなくてはなるまい」

『そのとおり。最悪の仮定ではアレが召喚される』

そう言つて溜め息を吐く雁夜とズエピア。その会話を小耳に挟んだのか、ポニーが疑問符を頭上に浮かべて質問する。

「アレとは何です？」

その質問に二人は同時に言葉を返す。

「邪神クトウルフだ」



夕暮れの街。その陰を縫うように走るのはパーカーのフードで顔を隠した異様な一群。三人一組のスリーマンセルで迅速に獲物を狩っていく彼等は疲労の影を一切見せず、黙々と作業をこなす。

だが、疲労はなくとも疑問はある。

彼等が狩りを始めてかれこれ三時間。既にその短刀で百の獲物を刈り取り、スリングショットで千の獲物を貫いたというのに、何故に獲物の数が減らぬのかと。

「マリク、綺礼様には連絡したか？ この数は異様だぞ」

「うむ、既に携帯電話を用いて連絡済みである。故にモハメドよ、喋るより手を動かすが良い」

「そりゃわかってるが、キリがないんだよなあ……」

そうこぼしてしまうのも仕方がないほどの数の暴力。

アサシン達は辟易しながらも短刀を投げる手を止めず、単純作業に明け暮れるのだった。

一方此方は四人一組。セイバー率いるキャメロットの騎士達はアインツベルンの森に侵入した怪魔達の処理に追われていた。

その装備は城に置いてあったロングソードをアイリスフィールが錬金術で強化しただけの質素なものだが、各々の技量で十分に強化されたその太刀筋は迷うことなく怪魔を切り裂いていく。

「ランスロット、そろそろあれを」

「了解した」

そう言つて積み上げられた怪魔の死体が回復するより先にランスロットが灯油で焼き尽くす。正直に言つてスーツ姿の彼が20リットルタンク片手に死体を焼く光景は何というか、強面と深紫の髪に相俟つてヤクザの死体処理にしか見えない。

ちなみに、彼が死体焼き担当なのはセイバーとガウエインが焼き加

滅をミスして上手くトドメを刺せず、モードレットが自爆でスーツの裾を焦がすというハプニングが原因であり、彼がやりたくてやっているわけではないのだと此処に明記しておく。

「しかし姉さん、話には聞いていたがキリがないな」

「ええ、あのキャスターの物量は異様なレベルですから。……しかし、今回は私へのストーカー行為でもなく、本格的な攻撃とも言えない散発的な怪魔の群れ。キャスターの意図が読みかねますね」

「オレ達を心理的疲労で追い詰めるつもりなんじゃないかな……？」

「それならばキャスターはもつと外道な手段を取る筈です。……ふむ、こういう搦め手は我々には思いつかないので何ともいえませんね。切嗣はキャスターの意図が読めますか？」

そう問い掛けるセイバー、この場に切嗣がいない以上、何も知らない者が見たとすれば意味の分からない行動。だが、近代兵器のインパクトで忘れられがちとはいえ衛宮切嗣は魔術師である。

セイバーの着るスーツ。そのネクタイピンに仕込まれた会話用の魔術装置はセイバーの眩きをしつかりとマスターに伝えていた。

『喋る暇があるなら手を動かしてくれないか、セイバー』

「手は抜いていません。……そもそも、キャスターが直接操っていないのであれば、この程度の魔物は私にとって何の障害にもなり得ませんから」

『それなら良い。……キャスターの目的だったかい？ まあ、十中八九「釘付け」が目的だろう。詳しい事はランスロットに訊いてくれ。……君と違って僕にはこの化け物は手強いからね』

そういう切嗣の声の背後で断続的に魔獣の雄叫びのような砲声が聞こえて居る辺り、本当に忙しいのだろう。

実際彼は城の屋上にミニガンを据え付けて孤軍奮闘しているのだから忙しいなどというレベルではないのだが、それに対する理解をセイバーに求めるのは酷だろう。

「ランスロット、切嗣のいう『釘付け』とは何です？」

「……陽動作戦の内、死兵を用いて敵を一定の地点で足止めする作戦

です。普通ならば兵士を無駄遣いするため余り有効な手段ではないのですが……………」

「キヤスターの無限の兵力があつてこそその手段ですか……………つくづく贅沢な戦術が好きですね、あの『元帥』は」

「ガウエイン、そこはオレ達の貧乏ブリテンと違ってアイツは国家予算並の私財を持つてたんだから仕方ないんじゃないか？」

そう返すモードレットにガウエインが納得したように『ああ、成る程』などと言っている。騎士らしいが天然なガウエインと騎士らしくないがしつかり者なモードレットの従兄弟コンビは中々しつかりかみ合っている。カムランの丘の悲劇が起ころなければ、こんな光景もあつたのだろうかと思ふと思うセイバーは、徐々に『聖杯に託す願い』を変質させつつあつた。

さてさて、三人一組、四人一組と来て、お次は二人一組。歩幅の合わない二人三脚が微笑ましいライダー陣営は夕焼けの空を駆けていた。

と、いうのも一時的な同盟関係にあるバーサーカー陣営からのたつての希望があつたからだ。

「うわあ、本当に街中怪魔だらけぞライダー。……………空飛べて良かったよ、本当に」

「まあ、流石に街中で『遙かなる蹂躞制覇』をぶち込む訳にはいかんしなあ。それは兎も角、頼まれた『偵察』は出来とるのか、ウェイバー？」

「今やってるよ。……………だけど、バラバラと怪魔が居るだけでキヤスターの魔力は見つからない。……………気になるのは川には怪魔が少ない事だけど、川には人間が居ないから当たり前なんだよなあ」

そう言つてウンウンと唸るウェイバーに、ライダーはゆっくりと戦車を旋回させつつ問い掛ける。

「おいおい、流石にキヤスターの魔力が一切無いつてのは変だぞ？これだけの召喚をしてるなら痕跡位はあるんじゃないのか？」

「そう言われても無い物は無いんだよ……」

心底困ったという表情で眼下の街を双眼鏡で覗き込むウェイバー。異変が起こったのはまさしくその時だった。

「なっ……!?!」

「ん？ どうしたウェイバーよ」

「怪魔が、怪魔が消えた!!」

「はあ？」

訝しむライダーだが、事実街から一瞬にして怪魔が消えたのは紛れもない事実。セイバー陣営、アサシン達、間桐陣営を含めたあらゆる陣営が困惑する中、続けざまに次なる異変が発生した。

その瞬間、ライダーは突如として自身にかかる負担が増加したことを察し、全力で降下、困惑するウェイバーを担いで戦車から降りるなり戦車を収納し霊体化した。

普段から実体化に拘っているライダーのその行動に流石にウェイバーも異常を察し、問いを投げる。

「おい!?! いきなりどうしたんだよ!?!」

「……落ち着け、ウェイバーよ。……しかし、これはかなりマズいなあ」

「………何が起こったんだ?」

今度はゆつくりと問うウェイバーに、ライダーは一つの、とんでも無い異常を伝える。

「……………聖杯からのバックアップが途絶えた」

聖杯からのバックアップ断絶。

そんな異常事態にすぐさま対応したのはやはりと言うべきか、神童ケイネス率いるランサー陣営だった。

「屋敷内の魔力炉を一時的に停止し、術式改竄。バイパスを形成、私を中間に挟み魔力供給ラインを偽装、魔法陣修正。魔力炉再起動。……………ふう、何とかなつたか」

一息で魔術を操り、どうにかランサーへの魔力供給を維持したケイネスは額の汗を拭う。とっさに行動出来たのは幸運だった。もし、ケイネスがパニックに陥れば苦しむのは魔力供給担当のソラウなのだ。そんな状況にならなかつた事を心底から喜び、安堵の溜め息を吐いたケイネスだが、すぐに気を引き締めてランサーに向き直る。

「何か問題はあるか? ……遠慮はするなよ、情報は正確に把握したい」

「はっ! ……やはり聖杯と比べると魔力供給に不安がありますが、一応宝具を用いた戦闘も可能です。が、その際はケイネス様とソラウ様に御無理をさせてしまうかも知れません」

「そうか。…………ランサーと同時に礼装を使用することが難しいとなるとバッテリー駆動の『月霊髓液』に頼ることになるな…………」

そう言つてブツブツと考えを巡らせ始めたケイネスの姿に、ランサーも自分出来ることはないものかと頭を捻る。

そんな中、ランサーの視界の隅にソラウが大鍋を火にかけている姿が映る。

「ソラウ様、俺に手伝えることはないでしょうか」「あら、ありがとうランサー。じゃあ、この鍋にお湯を沸かして頂戴。蒸留水がタンクにあるから」

「お任せ下さい。…………しかし、コレは錬金術の用意でしょうか?」

「どちらかと言えばウィッチクラフトよ。魔力をブーストするポーションを作つておこうと思つたの」

その説明にランサーは「成る程」と納得しかけたが、ある疑問に行

き着く。

「……こんなに大量に作るのですか？」

「確かに私が飲む分にはかなり多いけど、魔力供給に困っているのは私達だけじゃないでしょう？ ベルベット君とかはかなり辛いんじゃないかしら。キャスターが暗躍しているんだし、味方が減るのは困るのよね。気休めだけれど無いよりはマシだわ」

そう言いながらラベンダーやカモミールなどをゴリゴリとすり潰すソラウに、ランサーは笑みを零す。その笑みが気になったのか、ソラウは手を動かしながらもランサーに問う。

「どうかしたの、ランサー？」

「いえ、改めて俺は良いマスターに巡り会えたのだと思っただけです。……それより、俺も全力で手伝いますので何なりとお申し付け下さい」

敵に塩を送るような行動を良しとしたソラウの決断。その高潔さに改めて貴族の令嬢としてソラウを見直したランサーは、減少した魔力を補って余りある気力に満ちていた。

この二人のマスターと共にある限り、いかに魔力が足りねども自分の槍は消して折れぬ。そう確信したランサーはソラウの手伝いとケイネスとの作戦談義に専念するのだった。

さて、同時刻。遠坂邸では時臣が紅茶を飲んでいた。といっても、聖杯の異常に対策しようとしなかった訳ではない。もちろん対策として魔力炉の起動や宝石の使用も考え、実行しようとしたのだ。

が、ギルガメッシュがそれより一枚上手だっただけのことである。「ふん、この事態にも関わらず紅茶を啜っている辺り、お前も大物よな？」

「私が手を打つ前に王が黄金聖杯で魔力を供給なさったのが原因です。……それに、サボタージュしていたわけではありませんよ」

そう言つて時臣はギルガメッシュに数個の宝石を見せる。そのど

れもが大粒の一級品だが、それよりも特徴的なのが、その内部に渦巻く強烈な魔力だ。

「まあ雑種にしてはなかなかの財だが……我にこれをどうしろと？」

「いえ、実はそれは王の為に用意したわけではないのです」

「……………ほう？」

ギルガメツシユは宝石を手でいじりつつ蛇のように微笑む。回答次第ではただでは済まないだろう事間違い無しの状況だが、時臣はあくまで余裕の態度を崩さない。

「それはエルキドウ様の為に用意した物です。王と違いインファイターだとお聞きしましたので、瞬間的な肉体強化は有効かと考えたのですが」

「ふむ、エルを強化するつもりであったか。…………まあ、策としては及第点か。良いぞ、先の不敬は不問としようではないか」

ギルガメツシユはニヤリと笑い、弄んでいた宝石をコトリと机に戻す。

と、同時にギルガメツシユの背に翡翠色の疾風が飛び付いて来るが、最早ギルガメツシユも時臣も慣れている。

「呼んだかい、ギル」

「…………相変わらずの地獄耳よな、お前は。時臣がこの宝石をお前に献上してきたのだ」

「本当？　ありがとうねトッキー」

勝手にあだ名が付けられている時臣だが、学生時代も似たようなあだ名だったので本人としては違和感はない。

「…………所でエル」

「何だい、ギル」

「何とはいわんが、当たっておるぞ」

「当ててるのさ」

余裕を持って優雅たれ。その家訓を基準に考えればある意味お似合いトリオなアーチャー陣営は普段と変わらぬ行動を行う。

だが、その内心ではより一層キャスター討伐と聖杯奪還の意志を強めるのだった。

冬木教会。その礼拝堂の裏手にある綺礼の私室に、アサシン達が集合していた。最早完全に人間レベルに性能が落ち、一人一人はマスターである綺礼よりも脆弱だが、最後の砦である気配遮断だけは未だに死守している。

そんな彼等は魔力を蓄えるべくマスターの綺礼と共にコンビニ弁当を食べていた。ポニーが格安で買ってきた賞味期限ギリギリな廃棄用の弁当なのだが、まあ中々に悪くない。勿論オムライス弁当や鮭弁当、鳥そぼろ弁当などだけでトンカツなどは無い。

「綺礼殿、これからどうします?」

「む、ポニーか。……今の所は様子見だな。時臣師から聖杯を調査するようにと命じられたので私はこれから山登りだが」

「……私達はあの山に入れないですよね」

「弱体化が激しい以上、不可能だな。現状でまともに動けるのは単独行動を持つアーチャーと冬木聖杯ではなく黄金聖杯によって現界しているランスロット、ガウエイン、モードレッド、エルキドゥだけだ。……バーサーカーですら魔力を節約せざるをえんだろう。まあ、いざとなれば令呪があるが、使用回数に制限がある以上ここぞという時しか使えまい」

「では今まで通り、私達はピーピングですか?」

その質問に、綺礼はふむ、と顎に手を当てて考えを巡らせる。

「人間並みになってしまった以上、スカウト小隊として扱うべきかもしれないな。……今から各自の得意不得意を把握するのは面倒だが、背に腹は代えられまい」

「では、得意不得意を文章に纏めておきますね」

「ああ、任せたぞポニー」

ある意味、漸く本来の『ハサン』、つまり『無限の特技を持つ暗殺者』として行動を始めたアサシン陣営は、弱体化にあらがうべく行動を開始する。



遠い異国の異教の教会で、マシヤフが再臨しようとしていた。

バーサーカー陣営、もとい吸血鬼御一行は一時的に下水道にある雁夜の工房に集まっていた。その理由は単純にして明解である。

「……ふむ、やはり輸血パックは便利だね。血液が供給出来ればこの状況もマシになるといふものだ。……それでも、私のステータスはA+からB+に低下してしまうがね」

「それは仕方がないわよ、マネージャー。でも、この輸血パックって、私達の為にあると言っても過言ではないわね」

「いや、過言だろう。本来は医療用の筈だ」

「ヴラド君、前から思っていたが、君はもう少し冗談も嗜むべきだと思うよ」

というわけで、雁夜を含めた四人で仲良く血液補給中である。吸血鬼は血液補給で魔力を補えるのが強みだが、それでも『日光を浴びても問題無い』という利点が消失したのは痛い。というか、弱点が復活した以上非常に弱体化している。

「やはり、日光と流水の二つが弱点になったのは痛いね」

「かなりのハンデだよな」

「正直、橋を渡るのもおっかなびつくりだものね」

というわけで、油断するとドブに落ちただけで死にかねない身体になってしまったのだ。この下水道に来るまでに凄まじい冒険をしてきたのはいうまでもない。人生ハードモードである。

「お風呂は大丈夫なのかしら」

そう呟くエリザベト。彼女に取っては重要事項なのは間違い無い。

「あれは『流水』ではないからね。シャワーは厳禁だが」

「じゃあ、髪のお手入れが出来ないじゃない」

「そこはこう、盥に張ったお湯に髪を浸してだね……」

ある意味一番弱体化しているバーサーカー陣営。だがしかし、彼等に悲観の色は無い。

何しろ彼等が真に頼みとするのは、暴力ではなく策謀なのだから。

さて、一方此方はライダー陣営。マツケンジー宅に戻ったウェイバーとライダーは部屋の床に魔法陣を敷いて魔力の回復に専念していた。

冬木は全域がかなりの霊地なのでこの程度でもマシになるが、他の土地だったらと考えればぞっとする。もしそんな状況なら、ライダーは既に消滅しているだろう。

「はあ…………。なんでこうなったんだ?」「余に聞かれてもなあ。……お前の方が魔術には詳しいだろうに」

「まあな……。聖杯のバックアップが途絶えたって事は、聖杯の魔力が尽きたか、聖杯が破壊されたって事だ。でも、その原因が分からない。……いや、分かってるけど、信じたくない」

「分かっておるなら良いではないか。現状ではどうせこの部屋に引きこもる他無いしな」

苦虫に苦汁を和えた物をバケツ一杯喰つてもこうは成るまいと言うほどの渋面で呟くウェイバーに、ライダーはなんら気にした素振りもなく言葉を返した。

カチリとゲーム機の電源を入れ、煎餅を齧りながら『アドミラブル大戦略Ⅳ』をプレイし始めるライダーに、ウェイバーは溜め息を吐きつつ横から煎餅を一枚かすめ取る。

「む、余から篡奪するとは。やるなウェイバー」

「そんな所で感心するなよ……。第一、この煎餅は僕が買ったやつだろ」

言いたくないなら言いたくなるまで言わなくとも良い。そんなライダーの気遣いに、若干、ほんの少しだけ感謝して、ウェイバーは2コンを手取る。

「おお!! 漸くプレイする気になったかウェイバー!」

「勘違いするなよ、僕も暇潰しが欲しくなっただけだからな」

「そういう事にしとくが、どの陣営でプレイするんだ、ん?」

「……イギリス」

「おう、じゃあ操作はだな……」

嬉々としてゲームを教授してくるライダーと素直にそれを聞いてプレイを始めるウェイバー。二人の協力プレイはマーサ夫人が夕食の準備が出来たと呼びに来た後、夕食を挟んで深夜まで続く事となる。

そのプレイの結果については、ウェイバー率いるイギリスとライダー率いるドイツの変態科学同盟による核搭載型パンジヤンドラム改が猛威を奮ったとだけ記しておくでしょう。

さて、残るセイバー陣営だが、彼等は少々他の陣営とは毛色の違う悩みを抱えていた。というのも、セイバーには強力無比な魔力炉心『竜の心臓』が備わっているため、切嗣から供給される魔力を増幅すれば現界分の魔力を捻出出来る上、切嗣とアイリスフィールは夫婦なのでパスが繋がっているためアイリスフィールの魔力もセイバーに供給出来る。

故に魔力に関しては其処まで深刻な問題ではない。深刻なのは、アイリスフィールが『アインツベルンの女』で有るが故に悟った聖杯の異常の正体だった。

「聖杯の魔力が失われて聖杯が正常に戻った、か……」。僕にはいまいち状況が把握できていないんだけど、これはつまりアンリマユが現界したということなのかい？ アイリ？」

「……分からないの。アンリマユが聖杯から居なくなっただけなのよ。聖杯から失われた魔力から逆算すればもうアンリマユは冬木を消し飛ばすくらいのアクシオンを仕掛けて来ても良いはずなのよ。それだけの事を片手間に出来る魔力をアンリマユは持っているわ」

「……冬木から出て行ってしまった可能性は？」

「うーん、アンリマユが聖杯を媒体に産み出された以上、聖杯からはそ

う遠くに行けないはずよ」

「……そうか、ありがとうアイリ。セイバー達はどう見る？」

そう言って切嗣は話をセイバーと愉快な仲間達へと向ける。

「オレは百パー、キャスターの仕業だと思っぜ？」

「モードレット、もう少しお淑やかに出来ないのですか？」

「切嗣、取り敢えず街に行けば何か分かるかもしれないですね」

「……ガウエイン、ツツコミ所は其処ではないだろう。……モードレットは根拠を示せ。あと王は……王はその、クツキーあげますからそれでも食べて下さい」

天才タイプで説明が足りないモードレット、天然なガウエイン、脳筋なセイバー。彼等を逐一フォローするランスロットの姿に切嗣は彼が反逆者になった原因が分かったような気がした。ついでに猛烈なシンパシーも感じたが、その思考を振り払い、ランスロットに促されて話を始めたモードレットへと注意を向ける。

「えーつと掻い摘んで言うのだな。まずは、怪魔の消滅とほぼ同時に聖杯の魔力が消滅しただろ？ で、怪魔の大量召喚の目的は陽動だ。ということ、逆説的に考えれば『本命』が有る筈なんだよな。陽動だけでも無意味だから。……で、その他諸々の状況等も参考にして、俺はキャスターの目的は聖杯から魔力を奪う事であり、その陽動として怪魔を放ったんじゃないかと考えた訳だ」

「おお、あの粗野でガサツで馬鹿極まりない言動の裏にこれほどの考察が有ったとは。ただの頭のイかれた呆け茄子かと思っていましたが見直しましたよモードレット」

「わー、ありがとーガウエイン君。頼むから死んでくれよマジで」

そう言って戯れる従兄弟組を横目に切嗣はランスロットと共にブツブツと計略を巡らせる。

そうしてしばしの間、アインツベルンの城に従兄弟喧嘩の喧騒とハードボイルド組の話し声、そしてセイバーとアイリスフィールがはぐはぐとクツキーをほおぼる音だけが響くのがあった。

その夜の冬木は異様な静けさに包まれていた。家々に明かりはなく、街灯の明かりのみが街を照らす。その光景は何とも言い難い寂寥感と、一種の終末を感じさせる。

市民の市外退避。

その遠坂時臣の決断は「一般常識」の埒外にある。彼は魔術師なので一般人ではないが、魔術師としての「一般常識」に当てはめたとしても100万人を超える住民を市外に避難させるなど正気の沙汰ではない。規模が膨らむほどに神秘の秘匿に必要な労働力も膨らむ以上、当然である。

故に、遠坂時臣にその決断を行わせたのは彼に固有の常識。つまり、「貴族の常識」であった。貴族たる遠坂の領地は冬木である。ならば領主は領民を保護せねばならない。故に、戦況悪化が明らかとなった以上領民の避難は当然の事。そんな現代人からすれば馬鹿を通り越して気が触れた狂人の振る舞いと思えぬ思考。だが、時臣にはそれらを行いうる手段があった。

綺礼に命じてアサシン集団に避難誘導と暗示の呪具を使用させ、教会の伝手で『都市ゲリラのバイオテロ』というそれらしい理由をでっち上げ、警察や自衛隊を金と暗示で動かして冬木から市民を逃がす。

その結果、今の無人の冬木が形成されたのだ。

が、しかし。流石の時臣も僅か数時間で作業が終了するなどは毛ほども考えて居なかった。にも関わらず現在冬木市が蛻の殻になっているのは彼のサーヴァント『英雄王ギルガメッシュ』が意外にも手を貸したためである。

宝具『蜃の吐息』。集団幻覚を生じさせるだけの物だが、その効果範囲の広さから今回ギルガメッシュが時臣に渡した宝具だ。これにより、外部から見た、冬木の街は大量の虫とカラスが飛び回り、瘴気のように霧が満ちる如何にもバイオハザード状態と言わんばかりの様子に見える。

「……時臣よ、私の宝物を下賜してやったのだ。手抜かりはあるまい

な？」

「万事抜かりありません。……綺礼と璃正殿にも確認して戴いたので間違い無く市民を退避できました」

「ならば良い」

ソファに座り、ワインを浴びるように飲むギルガメッシュと書類の山を整理しつつ、紅茶を啜る時臣。遠坂邸の日常と化したその風景の中、時臣は疑問を隠せぬという表情を浮かべている。

今まで、自由気儘に振る舞ってきた英雄王が何故今になって時臣に手を貸したのか？

その疑問が何時までも頭の隅に引っかかって居るままなのだ。その表情を読み取ったのはソファのギルガメッシュではなくその後ろ。ソファの背もたれに腰掛けたエルキドゥだった。

「トツキー、さてはギルが手伝った理由が分かってないね？」

「……ええ。顔にでていましたか？」

「モロ出しだったよ」

「……私としたことが、優雅さに欠ける振る舞いをするとは」

そう言って頬を掻く時臣に、エルキドゥはニコリと笑って告げる。

「ヒントはね、トツキーがギルの臣下だって事だよ」

「私が英雄王の臣下である事がヒント……。ああ、成る程」

エルキドゥの言葉を切欠に閃きを得た時臣は納得の声と共に微笑する。

「私の領民は王の領民というわけですね」

「あたり。トツキーは頭の回転は悪くないよね、ドジっこののにさ」

「ドジ……ですかね？」

「自覚してないあたり真正だね」

そう言って時臣をからかうエルキドゥと、からかわれて戸惑う時臣。その二人の会話に口を挟んだのは静かに酒を飲んでいたギルガメッシュだった。

「……時臣よ、気づいているか？」

「……王？」

「明日でこの戦争は終わるぞ」

その断言は、今までのギルガメッシュのあらゆる声より良く通った、金の煌めきのような一言だった。そして続く一言は、剃刀すら鈍に感じる鋭さを以て放たれる。

「出陣の支度を抜かれれば唯では済まさん。……此度の敵は、我も慢心を捨てるべき相手故な」

その真剣な呟きは、時臣の気を引き締めるに十分過ぎる物であった。

英雄王ギルガメッシュが何を感じ、何を察したのかは時臣が計り知れるものではない。だがしかし、彼が慢心を捨てるとなればその重大さは嫌でも分かる。

未だ見えぬ敵の影は、確かに至近に迫っていた。



機械油のツンとした匂いと、何かを擦る音。戦場の香りが漂うその中に、セイバー陣営の全戦力が集結していた。

エクスカリバーを念入りに磨くセイバー、コンテNDERをオーバーホールする切嗣、鏡面のようになるまで鎧を磨くガウエイン、籠手のリベットを調整するモードレット、何故かデカイスコップを入念に整備するランスロット。主義、主張、戦闘スタイル。その全てが異なる五人の戦士にある唯一の共通点。

『戦争は準備が全てであり、準備がいかに完全であったかが即ち勝敗である』

その信念だけは、全員がプロフェッショナルとして共有していた。だが、勿論それ以外に共通点が無いわけではない。例えば、ランスロットと切嗣。比較的思考が似通っている二人は、整備の傍ら戦闘談義に花を咲かせていた。

「潜入と破壊工作が最小被害で最大効率を……………」

「ゲリラ戦において竹槍を如何に活用するかが勝敗を……………」

「スコップ接近戦最強説に対する銃剣擁護論は……………」

エトセトラ、エトセトラ。山盛りの外道戦術論にセイバーはツツコミを入れたかったが、今回は外道のキャスターが相手。であれば毒を以て毒を制すの精神も仕方がないかと無理矢理納得して妥協している。

そんな中、果敢にも会話に乱入したのはモードレットだった。

「やっぱり、近接格闘におけるナイフの有用性は不動だよな」

「原始的な分ステルス性が高いし、達人はワンアクションで全て終わらせるからね」

「…………片手にマイクロUZI、片手にスコップ」

「最強すぎる」

スコップ教の信者が拡大しているが、まあ、それも仕方がないと言える。

ホームセンターで土木用の金属製剣先スコップ、通称ケンスコを見たランスロットとモードレットの邪道騎士コンビが「これがあればブリテン無双だった」と言う程度にはスコップは便利である。斬る、突く、殴る、穴を掘る、地面に突き立てて簡易テントの支柱に使う、フライパンの代用に使う。パツと見ただけでこれだけの使用法が2人の脳裏に去来したのだから、興奮してしまったのもご愛嬌だろう。

流石に衝動買いしたランスロットは、セイバーとガウエインにツッコミを受けたが、二人を相手にスコップで大立ち回りを演じて打ち勝つというスコップ適性を發揮してしまつた為にセイバーとガウエインも強くはツッコミを入れられなくなった。

どんな武器でも扱える男にどんな武器にもなり得る道具を握らせただのだから、その強さも当然なのかも知れないが。

因みにそのスコップ、悪乗りしたアイリスフィールが『強化』の術式を組み込んだせいで最早ちよつとした礼装である。丸めた新聞紙を鉄パイプ並に強化できる術式を組み込まれたスチール製のスコップ。その強度は言わずもがなだ。

「……しかし、王よ」

「何ですか？ サー・ガウエイン？」

「ランスロットのあの強さは何だったのでしょうか？ 正直、アロンダイトより戦いにくかつたのですが」

「……確かに」

そう言つてガウエインの言葉に苦笑するセイバー。

その原因は、スコップの形状にある。柄の後ろにある三角形の輪を持って扱う以上、その部分は関節のように稼働する。ランスロットはその動きを活用し、戦闘を行っていたのだ。言わば、ランスロットの右腕を1メートル延長した挙げ句関節を一つ増やした様なもの。その上、スコップはハルバードと似た性能の武器なのだ。訳の分からない挙動をする上に斧としても槍としても使える武器。実に厄介極まりなかつた。

それに引き換え、アロンダイトは破壊不可避とはいえ、形はシンブルな長剣である。騎士らしい騎士であるガウエインからすれば、そち

らの方が戦いやすかったのだろう。

そう言つて説明するセイバーに、ガウエインは自身も苦笑いを返した。

「確かにあの挙動をするハルバード相手に剣では分が悪いですね」

「ええ、しかし、遠距離から攻撃できるバイクやスピアならば対抗可能でしょう」

「遠距離攻撃機能付きのスコップなら僕が持っているけどね」

そう言つてセイバーに茶々を入れたのは切嗣。どうやら彼の礼装の整備は終わつたらしく、「確かこの辺りに……」などと言つて武器が収納してある木箱を漁っている。

「ああ、あつた。これがそうだ。37mm軽迫撃砲」

「……確かにスコップですね。しかし、砲なのですか、コレは？」

疑問を口にするガウエインにの目の前で切嗣は手早くスコップを変形させ、簡易の迫撃砲を作つてみせる。

「おお!? カッケー!!」

「ああ、モードレットは合体変形とか好きでしたね」

「漢の浪漫だからな!!」

「……女だろう、お前」

「ランスはいちいち揚げ足取るなよう」

バカな事を言い合う騎士トリオだが、セイバーはそんな些事より気になることがあつた。

「切嗣、貴方が自分から私に話を振るのは珍しいと思うのですが、どうしたのです?」

「ああ、ちよつと話があつてね」

「成る程、雑談から入つて話を膨らませようと言うわけですか。……」

まともなコミュニケーション出来るんですね、切嗣」

「お嫁さんが居るんだ、会話力ぐらいあるさ。……さて」

セイバーと軽い冗談を交わしてから、切嗣はその雰囲気改める。

「僕が何も言わなくても此処に集まっている以上、君達も想定済みだとは思うけどね。……僕の読みでは明日が正念場だ」

「ええ。遠坂も市民を逃がしたようですし、間違いないでしょう」

「僕もアイリを避難させたしね」

そう言う切嗣の台詞で、セイバーはアイリスフィールの不在に初めて気づいた。つい先程までこの城にいた彼女をどこにどうやって避難させたというのかと視線で問うセイバーに切嗣は真面目な様子で答える。

「ジオフロント、と言うのは聖杯からの知識にあるかい？」

「地下都市……ですか？」

「その通り。その極小版を、間桐陣営が作ったらしいんだよ。……つまり、アイリは今間桐の工房にいる訳だ」

「……彼等は私からしても信用に足るとは思えません。しかし、貴方がそんな根拠で行動したとは思えないのですが？」

『自己強制証文』を使ったからね。此方の要求はアイリスフィールの保護、彼方は対価として久宇舞弥の引き取りを願った。……実質、此方が一方的に得した状況だね」

「ふむ、実にお人好しの彼等らしいですね。……で、舞弥はどこに居るのです？」

キョロキョロと辺りを見渡すジエスチャーをするセイバー。その背後のドアを開き、人が入ってくる。その気配に振り返ったセイバーはある違和感に気付いた。

其処にいたのは確かに久宇舞弥だが、彼女の目が、紅いのだ。

「……吸血鬼化、ですか？」

「……お久しぶりです、セイバー。生憎、私は死徒ではありません。

……改造人間ではありませんが」

そう答える舞弥の台詞を引き継いで、切嗣が話し始める。

「此方に帰ることを知った舞弥が、彼らに頼み込んだらしくてね。……錬金術をフル活用した魔術サイボーグ。下級の死徒なら圧倒できるパワーとエーテライトによる神経回路の高速化、眼球の魔眼化、エーテライト反応炉による半永久駆動がウリらしい」

「……そんな事をして舞弥は大丈夫なのですか？ バーサーカーが如何に天才とはいえ、流石にそれは、ヒトを止めることなのですよ？」  
「……お気遣い有り難う御座います。ですが、私が望んだ事ですので。」

……今までの無力な私では今回の戦闘に耐えられないと思われ  
……故に、私は自己改造を選択しました」

「……どうして其処まで？」

「私は、自身を切嗣の武器だと考えています。武器の使命は強くある  
ことですから。……まあ、私の我が儘が無かったとは言えません。私  
は其処のコンテナーに嫉妬していましたから」

「銃に……嫉妬？」

舞弥が放つ言葉に、セイバーは首を捻る。自身を武器だと割り切る  
その精神も気になったが、何より、彼女の口から聞いた『銃に嫉妬し  
ていた』という台詞がセイバーには気にかかったのだ。

「……私は武器です。武器である以上、切嗣が最も頼みにする武器足  
り得たかつたのです。……つまり、私は切嗣の『秘密兵器』になりた  
かつたのですよ」

その回答は、正に『武器故の感情』なのだろう。

その瞳に一種の信念を見たセイバーはこれ以上の問答は無意味と  
悟り、切嗣に向き直った。騎士には騎士の道があるように、武器には  
武器の道があるのだと理解して。

「……話は済んだみたいだね。さて、セイバー。今回、遠坂のお陰で周  
囲を気にせず戦える。故に、僕はこれを君に返すよ。これで君は『エ  
クスカリバーを放てる』ハズだ」

「……っ!? これは……」

その輝きを忘れたことはない。

セイバーがかつて持っていた究極宝具『全て遠き理想郷』。アハト  
翁に発掘され、アイリスファイルに搭載され、切嗣に託された『宝具  
の現物』。

それが今、時を越えて所有者の手に帰ったのだ。

「君からすれば勝手な話だけれど、その鞘はアイリスファイルに持た  
せていたんだ。……彼女を傷つけたくはなかった。だが、黙っていて  
すまない、セイバー」

「……構いません。貴方がそうした気持ちも分かりますから。……し  
かし、私にこれを返したという事は」

「ああ」

セイバーの言葉に切嗣は立ち上がり、セイバーの瞳を正面から見据える。

「……僕は再び正義の味方を目指すよ、セイバー。……父を殺し、母を殺し、幾千の人を殺めた僕が、そうなれるのかは解らないけれど。改めて考えたんだ。……聖杯でヒトは救えない。……ヒトを救えるのはヒトしかない。……だから僕は、人類全ての為に死ぬまで戦う。彼等から悪と罵られても、外道と蔑まれても。この冬木での戦争を、人類最後の戦争にするために。僕は悪を切り、思いを継いでいくよ」

魂を吐き出すような言葉はゆつくりと、切嗣の口から放たれた。正義に裏切られ、正義に絶望し、それでも、正義を目指す。

正義の味方、衛宮切嗣は今此処に完成した。

その姿に、セイバーは暫し瞑目し、エクスカリバーを床に突き立てる。

「——問おう、貴方が私のマスターか」

「ああ、僕は衛宮切嗣。正義の味方だ。——告げる。 汝の身は

我の下に、我が命運は汝の剣に。聖杯のよるべに従い、この意、この理に従うのなら。我に従え。ならばこの命運、汝が剣に預けよう」

「セイバーの名に懸け誓いを受ける。 貴方を我が主として認めよう、衛宮切嗣」

斯くして、今此処に漸く契約は成立した。

第四次聖杯戦争における『セイバー陣営』は今此処に成立した。

すれ違う歯車は噛み合い、契約のラインは魔力を迸らせ、竜の心臓で増幅された魔力は、『全て遠き理想郷』を通じてセイバーの左手を蘇らせる。

完全となった騎士は夜の帳の彼方を見据える。

迫り来る、終わりに向けて。

無人の冬木に日が昇る。いつもなら活気に溢れる街は今、静寂が満ちる廃墟と化し、実に不気味だ。

そんな中、ウェイバーは無人の街に練り出していた。

災害発生 of 混乱で放置されたコンビニエンスストアから弁当を頂戴し、公園に向かう彼の背後。そこに立つ霊体化したライダーは、相も変わらず口が減らない。

『ウェイバーよ、お主本当にそれだけで良いのか?』

「それだけって、お前と一緒にするなよ……」

そう言うウェイバーが自分の分として確保したのは豚の生姜焼き弁当と野菜ジュース。一方、ライダーはカツ丼と焼肉弁当、ミートドリアにシーザーサラダ、ついでにコーラが1リットル。軽く二人分の食事を『篡奪』していた。

『むう、小食は病の元だぞ?』

「……大食も病の元だよ、バカ」

相変わらずの漫才は、物寂しさを僅かに緩和し、ウェイバーの思考をクリアにする。ウェイバーにはさっぱり解らないが、ライダー曰わく『今日が決戦になるぞ』との事だ。備えるに越したことはない。

そこまで考えて、ウェイバーはふと数日前のライダーの発言が引っかかった。彼を召喚したその日、彼は確か、『余が真に頼みとする宝具は他にある』と言っていたような気がする。

「……なあ、ライダー。お前の最強の宝具、そろそろ教えといてくれな  
いか?」

『む、言っておらんんだか? ふむ、余の最強宝具は簡単に言えばサーヴァントの大量召喚能力を持つ固有結界だ。我が軍勢を呼び出し、敵を蹂躞する。分かり易い宝具であろう?』

「成る程、お前らしい宝具だな。で、呼び出すキーは何だ」

『キー?』

「呼び出す兵士には何か共通点があるんだろ?」

『ああ、余と強い絆で結ばれた英傑どもを呼び出す。お前が知ってる

連中なら、ブケフアラスとかだな』

「ああ、あの馬か。……少し考えとくよ」『何を考えるのだ?』

「お前の最強宝具をより最強にする方法」

そう言って「むむむ」と唸りながら頭を捻るウェイバーにライダーは暫し呆気に取られてから、大声で爆笑する。

『ガツハツハ!! やはり余はお前と組んで良かったぞウェイバー!!』

「何だよいきなり。……僕以外にお前のマスターがいる訳ないだろ?」

『然り!! 余とお前に蹂躪できぬ敵は居らん!!』

響き渡る笑い声とウェイバーの溜め息を吸い込む空は冬の澄み切った青。

勇者と賢者の凸凹コンビは迫る決戦に備える。

それが、別れに繋がるとしても。

間桐の地下工房、その出口でズエピアと雁夜は最後の出撃に臨んでいた。桜には、ズエピアが帰国すると伝えて。

「ズエピア先生、かえつちやうの?」

「ああ、そろそろ家に帰らなくてはならなくてね。突然の別れになって済まない、桜君。まあ、ラニⅡⅣは今後も雁夜の家ホームステイする事になっているから、安心したまえ」

「……………わかりました」

「良い子だ」

しゃがみこんで桜の頭を撫でるズエピア。その背後には臙靨の遺品である『日傘』をさした雁夜が泣きそうな顔で立っている。

「……桜ちゃん、おじさんはズエピアを空港まで送るから、帰るのが遅くなるかも知れない。ご飯はラニⅡⅣに頼んであるからしっかり食べるんだよっ。」

「うん」



雁夜の言葉に釣られるように、立ち上がるズエピア。だが、彼はふ  
と思ひ出したように、紅いペンダントを取り出して桜に差し出す。

「御守りだ。記念に取っておいてくれたまえ」

桜が、それを受け取るのを見て、ニコリと笑った彼は今度こそ身を  
翻して出口に向かう。

その背に、桜は告げる。

「先生、またね」

「……………ああ、また会おう桜君」

「やくそくだよ」

「ああ、約束するとも」

そう言い残して出口をくぐるズエピアの背に、桜はラニⅡⅣが呼び  
に来るまで手を振り続けていた。

「果たせない約束、か」

「どうしたズエピア、随分しおらしいな。お前らしくないぞ」

「泣きそうな顔で言っても説得力が無いのだがね、雁夜」

「既に泣いてるお前よりマシだ」

「……………化け物が泣くわけがないだろう。狐の嫁入りではないかね  
？」

「……………随分、紅い雨だな」

「ああ、紅い雨だ」

「行こうか、ズエピア。歩いてるうちに雨も止むさ」

「……………ククツ、今日は随分詩的だね雁夜」

「何とでも言え」

傘をさす彼等に降る雨は暫く止みそうになかった。

静寂の夜が明け、無音の朝と虚無の昼を越えて。再び魔術師の時間が訪れた冬木の街。

その中にいる全ての魔術師が腹の中で何かが蠢くような不快感を感じていた。

異常魔力による魔力回路の不調。その原因は明白。キャスターが満を持して出現したのだ。

その魔力は今までに無いほど歪み、重力が倍になったような圧力と幼子の爪を削ぎ落とすような悪意に満ちている。

その発生源にいち早く向かったのは、5人でメルセデスベンツェに乗り込んだセイバー陣営。

切嗣がリミッターを叩き壊し、セイバーが運転するそれは白銀の矢と化して無人の街を突き抜け、凄まじいドリフト走行で未遠川の中流域、海浜公園へと到着。その間約三分。10キロはある道のりをその速度で走破したベンツェから、セイバーと三騎士、そして若干気分が悪そうな切嗣が降り立った。

「切嗣、大丈夫ですか」

「……戦闘に支障はないよ」

軽く言葉を交わして切嗣の無事を確かめた、セイバーは立ちこめる濃霧の中目を凝らす。河の中程。水面に立つそれは間違い無くキャスターだ。

だが、しかし。

「何かがおかしい……」

そう呟いたセイバーの声を拾ったのか、キャスターはダラリと脱力していた体をガタガタと揺らしつつ、セイバーの方に向き直る。その姿を見て、セイバーは漸く違和感の原因に気が付いた。キャスターの顔は血の気が失せ、特徴的なその目は白目を向いて口からは涎を垂れ流している。そしてその首に、黒い触手が巻き付いていた。

「なっ……!?!」

驚愕するセイバーを前にキャスターは陸に揚がった魚のようにパ

クパクと口を動かし、必死に首を締め上げる触手を解かんと腕に力を込める。そうして、漸く吐き出されたキャスターの言葉は、セイバーをさらに驚愕させるに充分だった。

「お……逃げ……な、さい……。ジャ……。ン……。ヌ」

「おい、キャスター!?! 逃げろとはどういう……!?!」

その問いとほぼ同時に、キャスターの首からゴキリと鈍い音が響く。巻き付いた触手はそのままキャスターを水中へと引きずり込み、暗い水面から何かを咀嚼する様な音が少しして、それきり水面は静かになった。

突然過ぎる事態に困惑するセイバーと警戒を強める切嗣。三騎士も普段の和気藹々とした雰囲気消逝し去り、周囲を油断無く見渡す。そんな中、彼等の耳に響いたのは、迸る雷鳴だった。

「A l a l a l a l a l a l a l a l a i e !!」

「っ?! ……何だ、ライダーですか」

「何だとは何だセイバーよ。……それに、余だけではないぞ。なあ、ランサー、バーサーカー」

「相乗りさせて貰って言うのは何だが、もう少しマシな運転をしてくれないかね……」

「ああ、俺も酷い目にあつた。……ところでセイバー、キャスターは何処だ?」

若干青い顔で問い掛けるランサーに、セイバーは苦い顔で口を開こうとする。だが、更なる訪問者がそのセリフを遮った。

「あの外道めは蝟に食われた。……それより雑種ども、喋るのは良いが、今はそれ所ではないようだぞ?」

「……居たのですかアーチャー」

「いや、綺礼と時臣がチマチマと準備しておつたのを待っておつたせいで今来たところだ。……しかし、何とも不快な蝟よな」

「……さつきから蝟と言っていますが、何のことです?」

「アレだよ、セイバー君」

疑問を口にするセイバーに答えたのは、ズエピア。夜の闇を見通す吸血鬼の視力で捉えた水の底を指し示すズエピアに訝しむ視線を向

かけたセイバーだが、それより先に水面から『蛸』が姿を表した。ゆつくりと立ち上がる巨体。無数の触手が犇めく頭部だけで優に15メートルはあるだろう巨体はコウモリのような羽を広げ、脳味噌を握りつぶすように不快な遠吠えを放つ。

「——ツツツ!?!」

その場にいる全員の頭にダイレクトに響くおぞましい音。その中で、ズエピアの影からスルリと這い出した桃色の歌姫がクルリとマイクを振って対抗するように叫ぶ。

と、同時に、パタリと音が止んだ。

逆波長。怪物の声を打ち消すその音は彼女の肺から生み出されるドラゴンブレス。竜の血を引き、類い希な音感を持つ彼女にとって、この程度の芸当は実に容易い。その姿を見て音波攻撃は効かぬと見て取ったのか、巨大な怪物は咆哮を中断し、此方の様子を伺い始めた。

「……良いタイミングだエリザベート君」

「……バーサーカー、あの化け物は一体」

エリザベートを労うズエピアと、油断無く剣を怪物に向けながら問うセイバー。比較的回復が早いその二人の様子にハツと正気に戻った英霊達は怪物に向け挑むような視線を投げ、彼等を後から追ってきっていたケイネス、時臣、雁夜の三人も到着次第魔力を練り上げる。

その緊迫した空気の中で、ズエピアの返答が嫌に良く響く。

「アレはクトウルフ。クルウルウ、九頭竜などの別名がある怪物だ。……最も、魔術師であればこの呼び方の方が脅威を察しやすいか。ゾスの星のアルティメット・ワン『TYPE—ZOTH』。一つの星における究極生物がアレだ」

その声と共に、ズエピアは影から更にウラドを呼び出して命じる。「ヴラド君、エリザベート君、作戦を建てる時間を稼いでくれないかね」

「任せるが良い。私は防衛戦は得意だからな」

「プロデューサー、後で温泉旅行を要求するわよ」

軽口と共に駆ける二人を確認し、ズエピアは並み居る英雄とそのマ

スターに向き直る。  
「さて、作戦会議を始めよう、諸君」

「では、作戦開始だ。不測の事態も考えられるが、各自臨機応変に対応してほしい」

作戦会議を締めくくった切嗣のその言葉で、各サーヴァントが一斉に動き始めた。それに反応し、川縁から怪物に攻撃していたエリザベートとヴラドもサーヴァント達に同調する。

彼等の先鋒となるのは、水面を駆けるセイバー。エリザベート達に注意を向けている怪物の側面、人間で言えば側頭葉にあたる部分に向け、一撃を打ち込む。各パーツはおぞましい異形とは言え、この怪物は全体的に見れば不気味なまでに人間じみている。ならば、人体の急所へと攻撃するのは当然の対処といえるだろう。

「――風王鉄槌ツツツ!!」

跳躍と共に解き放たれた暴虐の嵐は、無防備極まりない怪物の頭を捉え、柘榴のように弾けさせる。その余りの呆気なさにセイバーは一瞬動揺する。

その一瞬が拙かった。

伸縮する怪物の腕から繰り出された裏拳はセイバーの全身をモロに捉え、音速でセイバーを弾き飛ばした。子供が投げた石のように水面を二回、三回と跳ねるセイバーは魔力放出と共に身体を捻り、どうにか姿勢を整える。

だが、休む間もなく怪物の拳は再びセイバーに振るわれた。弾け飛んだ頭は既に再生し、挙げ句に飛び散った無数の肉片が見慣れた怪魔と化して容赦なくマスター達に襲い掛かる。だが、セイバーとて無策に突っ込んだ訳ではないのだ。

「やれッ、アーチャーッ!!」

「王たる我に命令するでない」

怪物の注意を一身に引き受けたセイバー。陽動としての役目を果たした彼女の視線の先、立ち込める雲の合間から黄金の飛行宝具が疾走する。疑似太陽炉を搭載したその舟は物理法則を無視した動きで怪物に接敵し、停止。

その船上で弓に酷似した装置を構えるギルガメッシュは迸る輝きを引き絞り、怪物へと解き放つ。

「――『終焉齎す雷鳴の矢』」

幾千の焰を束ねたかのようなその矢は、黄金の舟『ヴィマーナ』の炉心から供給され、一条の光線と化して怪物の上半身を跡形もなく焼き払う。天文学に長けた人物が居れば、その正体を悟ったかも知れない。

古代インドにおいてインドラの焰と呼ばれたその矢の正体は『 $\gamma$ 線バースト』。宇宙においてしばしば発生するその現象は、極超新星爆発などで発生した膨大な $\gamma$ 線が一直線に照射する現象だ。

$\gamma$ 線という名を耳にしたことがない人物には $\gamma$ 線の別名を補足しておこう。

X線。医療などで使用される放射線の一種として広く知られるそれが、 $\gamma$ 線の別名だ。

ならば、それが『可視光線』として放たれている現状が如何に凄まじいモノであるかは想像するに容易いだろう。放たれた $\gamma$ 線の余りの威力に大気が電子的励起状態に陥り、プラズマとなって発光しているのだ。

だがしかし、その破壊の光を放ったギルガメッシュは素早く船首を反転させながらその美貌に洩面を浮かべていた。

「チィッ!! 魂がないのかこの蝮は!!」

アーチャークラスである以上、ギルガメッシュの視力は並みのサーヴァントの数倍を誇る。その視力に裏打ちされた視界が、速やかに再生する怪物の姿を見て取っていた。消し飛ぶのが一瞬ならば再生も一瞬。既に七割方再生した異形の巨人は飛び回るギルガメッシュを叩き落とさんとその腕を高速で伸ばし始める。流星にその程度で捕まるギルガメッシュではないが、不利には変わりない。その窮地を救ったのはランサーだ。

「無尽に再生するならば、再生できぬ傷を与えれば良いのだろうか？」

――必滅の黄薔薇ツツツ!!」

見事なフォームからの投擲は怪物の眼を食い破り、頭頂部を貫通す

る。だが、如何にランサーと言えど川岸から天を衝く巨人の眼を穿つのは不可能だ。

しかし、今のランサーは頼もしい相棒の背に跨がり、空を駆けていた。薄く、薄く延ばされたその翼で空を駆ける白銀の飛竜と化しているのは、時計塔の天才、ケイネス・エルメロイ・アーチボルトが生み出した最高傑作『月霊髓液・改』。水と風の二重属性を持つ彼が川縁から重量軽減と流体操作、気流操作などの魔術を駆使して騎竜を動かしているのだ。

魔術教会において神童と呼ばれたその実力が今、遺憾なく発揮されていた。

だが、たかが片目を失った程度で、怪物は止まらない。ランサーに貫かれた眼が再生できぬとみるや、『新たな眼』を穿たれた目の辺りに発生させて対応したのだ。

「……そう簡単には取らせてくれんか。だが、俺は一人で戦っている訳ではないぞ、怪物」

古に伝わる竜騎士と化したランサーが黄薔薇を回収する姿に怪物が気を取られたその刹那、その死角についてももう一組の『竜騎士』が空を駆けた。

翼を広げ飛翔するエリザベートに抱えられたヴラドである。

『竜の子』と名乗って久しいが、まさか竜騎士として空を駆ける日が来るとはな」

「感傷に浸ってないで早く攻撃しなさいよ!? あたし、飛ぶのは得意じゃないんだからね!?!」

「おお、すまん。……では刮目せよ。『串刺城塞の極刑王―カズイグル・ベイ―』ツツツ!!」

ヴラドの咆哮と共に、水面下から突き出される二万本に及ぶ杭は怪物の肉に食い込み、その巨体を磔にする。更にトドメとばかりに撃ち込まれるのはヴラドが投擲した巨大な槍。上下からの串刺しにより固定された怪物を確認したエリザベートは素早く反転、『射線上』から退避する。

それと同時に立ち上るのは黄金の聖火。



地上全ての英雄の憧憬を一身に背負うその姿は、教会に掲げられた一片の聖画の如く美しく、地を照らす太陽のように力強く、天より見守る月のように儂い。

人類全ての願いの結晶。星が鍛えた神造宝具。

その剣を振り上げるセイバーは正に『騎士の王』であつた。

「――約束された」

魔力が爆ぜる。

灼熱が奔る。

極光が吼える。

込められた威力をそのままに、大上段からそれは振り下ろされた。

「――勝利の剣ツツ!!」

冬木の街が閃光に包まれる。

その光の中で、怪物が吼えた。

セイバーの放った聖剣の光は徐々に薄れ、冬木の街に再び夜の闇が舞い戻る。その中にソレは立っていた。

楕円形の東部から髭のように垂らした無数の触手、朱く燃える瞳、先程までは肥満体型に近かった肉体は筋骨隆々という表現がしつくりと当てはまるようなモノへと進化を果たし、猫のように曲がったその背から生える翼はその巨躯を天空に羽ばたかせるに遜色ない強大なモノへと変じていた。

そして何よりの変化は、まるで今までのソレが『眠っていた』のではないかと思わせる様な尋常ならざる圧迫感。その総身に魔力を巡らせたソレは最早『怪物』の域を超越し、理外の存在へとその身を昇華していた。

その姿はまさしく『魔神』。

セイバーの放った輝きはさながら寝室に差し込む朝日の様に眠れる神を目覚めさせたのだ。

その威圧に反射的に魔力放出を行い、全力で後方へと退避したセイバーの『直感』は、実に優秀であると言えよう。

セイバーが回避してからコンマ一秒。魔神から放たれた殺戮の波動が進路上のあらゆる存在を撃滅せんとセイバーが先程まで立っていた地点を蒸発させて行つたのだ。

その攻撃に目を見張つたのは何もセイバーだけではない。その場に居る全てのマスターとサーヴァントがたつた今放たれた一撃に瞠目した。さもありません、その一撃は、実に記憶に新しいモノなのだから。

γ線バースト。

英雄王ギルガメッシュが放った宝具の一撃を、この魔神はそっくりそのまま規模を拡張して放つてみせたのだ。

宝具の模倣をその身一つでこなしてみせるその様に、驚愕するなど言う方が理不尽というものだろう。

人間に限らず、あらゆる生物は驚愕を感じる瞬間、全身の筋肉が収

縮する事による硬直状態に陥る。反射的に筋肉を硬化させその身を守ろうとする本能が働いたためだ。

だが、その硬化の中で動く影が三つ。

『アルティメット・ワン』とはそういう『モノ』だと知っていたズエピア、『神殺し』の逸話を持つギルガメッシュ。そして、『精神と行動が分離』している衛宮切嗣である。

お互いに現在動ける人員を瞬時に把握した彼らはアイコンタクトと手信号で素早く意思を交わし、残りの人員の『硬直が解けるまでの時間』を稼ぐべく迅速に行動を開始する。

その中で最初に動いた切嗣が腰に装備したポーチから手早く取り出したそれはジョイスティックに携帯電話と最新式の小型液晶ディスプレイが連結された奇妙な装置。切嗣がそれを手早く操作すると、排気音と共に巨大なタンクローリーがアクセル全開で川縁に向かって爆走する。

直線道路を狙って配置した事もあり、遠隔操作装置を搭載した暴走車両は既にメーターを振り切る程の速度に到達。ハンドリングなど到底不可能なレベルになっている。

その前方。川まで数メートルという位置に、ズエピアはスタンバイを完了していた。

突撃するタンクローリー、待ち構えるズエピア。

両者が交錯した次の瞬間発生した現象は漫画の様に馬鹿馬鹿しい光景だった。衝突の瞬間。ズエピアはタンクローリーのバンパーを掴むと同時に全力で持ち上げ、丁度巴投げの要領で後ろに倒れ込みつつ車体の進行方向を仰角45度へと強制変更。ズエピアの筋力と元々の加速という二つのエネルギーを得て飛翔したタンクローリーは月夜を駆けて魔神クトウルフへと飛来する。当然、甘んじて受けるはずもなく腕を伸ばして防御する魔神のその腕は、突如として地に墜ちた。

上空のヴィマーナから放たれた、ギルガメッシュによる斬撃が、正確無比にその肩を斬り飛ばしたのだ。

ギルガメッシュの右手に握られたその剣の銘は『カラドボルグ』。

一振りですべての小山を切り裂いた逸話を持つその剣は、視界に移る範囲全てを切り裂くことが出来る遠隔斬撃能力を持つ魔剣だ。

が、この宝具には欠点が一つ。持ち主の筋力値で能力が左右される点である。その威力は累乗される様に増加し、仮に筋力E Xの筋肉達磨が振るえば視界全てにエクスカリバーを放つような化け物じみた威力と化するが、筋力Cのサーヴァントが振るえば精々10メートル斬撃を飛ばすのが限度だ。筋力Eともなれば、ただのよく切れる剣である。

現在、防御を優先した装備で固めているギルガメッシュの筋力値はBのまま。この数値では精々斬撃を狙った標的に100メートル飛ばす程度の真似しか出来ないが、それでもこの場で使う分には十分に強力である。

切り落とされた腕は既に再生しているが、最早防御不可能な懐にまで飛び込んだタンクローリー。それを起爆させたのは、切嗣が放った84ミリ無反動砲『カールグスタフM2』の砲弾だった。

対戦車戦にも用いられるその砲弾の爆風で飛散するタンクローリー。それからまき散らされるのは、ガソリンではない。工業用98パーセント濃硫酸。環境への配慮など一切無しにまき散らされた30トンに及ぶその薬品は川に落ちては強酸性を示し、反応熱により煮えたぎった硫酸蒸気を撒き散らす。更に直接魔神へと降りかかった濃硫酸はその体表に付着した水分子と急激に反応し、高熱と皮膚の炭化で魔神の動きを停止させる。

軽くこの世の地獄であると言えるその状況が完成する頃には全ての陣営が再びその動きを取り戻していた。

それを見て取ったギルガメッシュは川の流れによって流出する硫酸へと、爪の先程の骨に似た塊を落とす。彼が所蔵するユニコーンの角の欠片。万能薬として名高いそれは流出する硫酸を無毒化し、海へと至る頃には寧ろ元の水質以上であると言って良い程まで浄化していた。

最後までキチンと作戦の始末をするその姿に一切の慢心はなく、所

蔵する宝物を惜しみなく投入して戦う様はまさしく神話の再現と言えよう。

その姿に触発されたのか、次に行動したのは川縁で迫り来る無数の怪魔と交戦していた遠坂時臣である。

「ロード・エルメロイ。魔力回路に余裕はありますか？」

そう問いかける時臣の声に、ピクリと反応したケイネスは一瞬思考を巡らせた後、正確に返答を返す。以前の彼であれば見栄を張ったかも知れないが、ランサーから教え込まれた『戦場に置ける情報共有の重要性』をしつかと記憶している今の彼にはそんな愚かな選択肢は浮かびすらしなかった。

「……簡単な中級魔術ならば行使可能だ。それ以上は礼装の駆動に支障をきたしかねないのでね」

「成る程、では小規模な竜巻を起こすことは？」

「怪魔共を取り囲むだけならば造作もない。……だが、威力は保障しかねるな」

「その点は私が。……火属性一つしか持ち得ぬ非才ですが、そのみを今まで研鑽して来ましたので」

時臣の言葉に、彼が何を為そうとしているのかを悟ったケイネスは思わず笑みを浮かべた。成る程確かに風と火は切っても切れぬほどの相性が良い。風は炎を強め、火は上昇気流を発生させる。その二属性を放つのが、天才ケイネスと秀才遠坂時臣であるならば、最早その威力は推して知るべしといったところだ。

二人が詠唱を始めたのは全く同時。響き合う詠唱と満ち溢れる魔力は、『待機』を命じられ、ライダーと共に出番を待っていたウェイバーに、ある意味で絶望を与えた。自身とは格の違う高位魔術師二名による合成魔術師の威力を推定し、その実力差を正確に推し量った故の絶望。

だが、それよりも大きくウェイバーの心を揺さぶったのは強敵を前にした『興奮』だった。人の身でその域まで至った二人の魔術師への憧憬と尊敬。鳥肌が止まらぬほどの興奮は脳内麻薬をとめどなく溢れさせ、その頬を朱く染める。

そんな彼の眼前で、遂にその魔術は完成した。

「――焼き尽くせ」

「――吹き荒れよ」

起動のキーワードと共に出現したのは天と地を繋ぐ焔の柱。風の魔力で編まれた緻密な螺旋を駆け上がる焔は天に登る竜のようにも見える。その色は青白く、火焰を生み出した術者の技量を否応無しに感じさせる。その威力は怪魔の群を一瞬で灰燼に帰す程のモノであるにも関わらず、それは一種の芸術とも言える美しさを持っていた。「ほう、時臣の奴め、なかなかどうしてやりおる。……であれば、詰め

の甘さは少々大目に見てやろうではないか」  
立ち上がった焔を一瞥し、そう言ってニヤリと笑ったギルガメツシユは金色の小型宝具を魔神に向けて発射する。固定ダメージを与えるという地味ながら便利な宝具『ヴァジュラ』。その一撃でもって『時臣に向きかけた』魔神の意識を強引に自身へと向けさせた英雄王は、魔神との戦闘をより一層激化させる。穿ち合う波動の嵐と宝具の雨。ヴィマーナはそのあちこちに被弾し、ギルガメツシユ自身も宝具で防御したとはいえ少くない数の波動を受けている。

その戦闘の傍ら、右手方面ではセイバーが鉤爪と拳撃の嵐を必死の形相で凌ぎ、左手方面ではランサーがソニックブームと共に振るわれる豪腕に四苦八苦しながらもどうにかチマチマと『必滅の黄薔薇』による呪いの一撃を加えている。

そんな状況でありながら、当の魔神は眠たげな目を触手でこすり、セイバーやランサーへの攻撃のついでに時々尻を搔いている。

そんな片手間である攻撃すらサーヴァントで辛うじて対処できるレベル。

その状態でさえ、三大騎士を以てしても辛うじて拮抗していると言える魔神の戦い。

そんな中で間の抜けた『ポヒーン』と言う音と共に、周囲に音声が響きわたる。

「三大騎士の消耗が激化。これより戦闘要員をスイッチする」

拡声器越しに響く切嗣の声。  
その声が告げる符丁は、新たな戦局の到来を告げていた。

スイッチ、と言えども、一般的にはカチカチと押して電源を入れるアレを想像する人が多いであろう。が、今回切嗣が言った『スイッチ』はスポーツ用語に当たる。

役割、例えば前衛と後衛などをスムーズに入れ替える事を指すそれは、たった今起こった挙動に相応しい言葉だ。

ギルガメッシュが『天の鎖』で釣りをする様な動きで素早くセイバーを確保し、ランサーと共に撤退。

と、同時に『神威の車輪』に相乗りしたライダーとズエピアが魔神に向かい接近。当然、易々と接近を許す筈もなく、魔神は触手から殺戮の波動を放たんと魔力を充填する。

その魔神に向けて、切嗣の右手が火を噴いた。トンプソン・コンテNDER。彼の愛銃たるそれが射出したのは衛宮切嗣の名を『魔術師殺し』たらしめた彼の切り札。

対魔術礼装『起源弾』。

その弾着と同時に魔神はギシリと固まり、その魔力は雲散霧消した。切嗣の起源である『切断』と『接合』。その干渉を受けた魔神の魔術回路が無茶苦茶に切断され、ランダムに再接続された影響である。

普通の魔術師であれば精神、肉体、魔力、その全てが再起不能と化するその礼装は確かに魔神にも通用したのだ。

だが、通用しただけである。

「やはり足止めくらいしかできないか……」

起源弾を受けてから僅か数秒で復活した巨大な邪神を見上げる切嗣はそう呟いて、背後に乗り付けたフォルクスウオーゲンタイプワン『スカラベ』に乗り込む。

その車体を駆るのは言峰綺礼。聖堂教会の代行者として幾多の怪異を屠ってきた修羅がこの場に切嗣の協力者として現れたのは、偶然の事ではない。

「……衛宮切嗣。お前の部下は既に出撃した」

「……そうか。しかし、君が来てくれるとは思わなかったよ。事前に



調べた情報じゃ、冷酷無慈悲な代行者サマだったからね」

「おや、こんな純朴な神父に随分な評価を下したものだな。そう言うお前は随分外道な手法で魔術師を殺めてきたらしいではないか」

「酷いなあ、僕はただの子煩悩なパパさんなのに」

軽口を叩きながらバックパックから取り出したパーツを手早く組み立て、ブローニングM2重機関銃を組み立てた切嗣はリアガラスを遠慮なく叩き壊して魔神に向けて銃弾の雨を叩き込む。その姿に肩をすくめる綺礼は援護射撃とばかりに自らも片手で黒鍵を投擲しつつ文句を言う。

「ふむ、私の愛車はそれなりに値が張ったのだが。修理代の請求書には誰の名を書けば良いのかね？」

「ユーブスタクハイト・フォン・アインツベルン様へ、で頼むよ」

「ふむ、衛宮切嗣ではなく？」

「婿養子だからね。親の脛をかじらせて貰うさ。所で、君の宗教は質素儉約を歌ってるようだけど、外車なんて買っても良いのかい？」

「丈夫で安心なモノを買えば、長い目で見れば儉約に繋がるだろう？」

「まあね。……それより、そろそろ来るよ」

切嗣の呟きに軽く頷く綺礼。その直後、赤い輝きが川縁で瞬いた。

その輝きを知らぬものは、この場には魔神のみ。

聖杯戦争に置ける切り札の一つが、たった今切られたのだ。

「ウェイバー・ベルベットが令呪四画を以て命じる。ライダーよ全身全霊を以て宝具『王の軍勢―アイオニオン・ヘタイロイ―』を展開せよ。その際、内部に魔神クトウルフ、ならびにこの場にいる全てのサーヴァントとそのマスター、そしてその協力者を取り込むこと。及び、軍勢の展開は楔型配置ではなく、隊を二つに分け、対象を包囲する形を取れ」

ウェイバーのやたらに細かい命令は、令呪の輝きをより強力に輝かせ、ライダーに魔術師的強制力を持って伝わった。とは言え、事前に打ち合わせていた以上強制力と言うよりサポート力と言う方が正しいが、それはこの際どうでも良い。

次の瞬間展開されたライダーの固有結界はその様な些事が一切気

にならぬほどの規格外など宝具だったのだから。

蒼天の下に広がる大砂漠。その場所にかつて彼に仕えた英雄豪傑を独立サーヴァントとして召還するその宝具はランクにしてE xを誇る、正真正銘の奇跡だった。だが、それだけでは終わらない。ライダーの固有結界。その内部が、突如として薄い闇に包まれる。その原因は、晴れ渡る蒼天が、夜の帳に包まれ、赤い月が登った為だ。

固有結界の重ね掛け。『その場所の夜』という特殊な心象風景である『虚言の夜』であるからこそ可能なそれは、『王の軍勢』を強化し、より強く世界を構成する。

更に、セイバーとその配下の騎士トリオが、その武器を掲げ、高らかに詠唱する。

「決着術式『聖剣集う絢爛の城―ソード・キヤメロット―!』」

その声と共に月夜の砂漠に現れたのは焔の結界。円卓の騎士が生み出す、強力な結界であるそれは、あらゆる空間転移を封殺し、エクスカリバー等の聖剣でなければ傷つける事さえ出来ない最高クラスの結界だ。

その展開と同時に、イスカンドル率いる『王の軍勢』に二個小隊が合流する。明らかに自衛隊の装備を拝借したと思われるその小隊は言わずもがな、80名のアサシン達である。

綺礼の下を訪ねた久宇舞弥と共に自衛隊の基地から武装を手早く盗み出した彼等は、手慣れた手付きで各々の武装を構えている。『専科百般』と『蔵知の司書』による合わせ技で久宇舞弥から教わった運用法を全員が共有した為である。

さて、では彼等と共に行動して居たであろう久宇舞弥は何処にいるのか。

その答えは、この軍勢が揃うまでの時間が如何に稼がれたかにある。

鳴り響く回転音、魔獣の咆哮の様な爆発音。それは、余りに巨大な兵装を担ぐ久宇舞弥の手で寸分の狂いなく魔神クトゥルフに叩き込まれ続けていた。G A U—8『アヴェンジャー』。ゴールキーパーや

A—10 『サンダーボルト2』の主砲として名高いその機関砲を分かりやすく説明すれば、劣化ウランで出来た牛乳瓶を発射するマシンガンと言う説明になる。

だが、当然ながらそれだけで魔神が食い止められる筈がない。ならば何故、彼女は時間を稼げたのか。

その答えは、現在魔神を蝕んでいる黒い魔力にあった。

「やはり予想通り、あの魔神は聖杯の中身を喰っていたようだね。冬木の地脈から吸い上げた魔力でアヴェンジャーを封殺していた様だが、此処は固有結界。『世界の外』では流石の魔神も完全にはアヴェンジャーを封殺出来ないだろう」

「……毎回思うが、よく気づくよな、ズエピア。まあ、地下で暮らしてたら地脈の動きにも敏感になるのは解らんでもないけど」

「単なる年の功だよ。雁夜もあと10世紀程生きれば身につくさ」

「ソイツは気の長い話だな。……で、やれそうか?」

雁夜の問い掛けに、ズエピアは軽く頷くと、その場に集った全兵力に呼び掛ける。

「諸君!! あと30分耐えてくれたまえ!! この結界内でケリを付けるぞ!!」

その呼び掛けに呼応して鬨の声をあげる無双の軍勢。それらを上空にて見下ろすギルガメッシュはその片手に『黄金の鍵』を呼び出し、その時を待つ。

「A a a l a l a l a l a l a l a l a i e !!」

魔神に突撃する征服王。

聖剣を解放する騎士王。

双剣と双槍を繰る槍兵。

銃弾を浴びせる暗殺者。

宝具の雨を生む英雄王

黒い銃を構える狂戦士。

数多の英雄が死力を尽くすその戦場に、終わりの時は、もう手を伸

ばせは届く場所まで迫って来ていた。

唸る剛腕、弾け飛ぶ兵士、突き刺さる槍、吹き出る青い血潮。

アヴェンジャーの影響で魔術を使用しなくなったとはいえ、魔神の肉体はそれ単体で十分に強力であった。

鉤爪の付いた拳が振るわれる度に衝撃波が発生し、まるで風の前の埃のように『王の軍勢』が吹き飛ばされる。

その衝撃波を最前線で可能な限り受け止めているのはセイバー。既に二回頭を潰され、その四肢は最早数えるのも馬鹿らしい程に折れ、ひしゃげ、つぶれてきた。

だが、それでもセイバーは倒れない。

『全て遠き理想郷』の能力の一つ、絶対再生能力。その常時発動型の効果を利用し、セイバーは強引に立ち上がっているのだ。

最早、青い装束は返り血と自らの血でどす黒く変色しているがそれでも尚、セイバーは立ち上がる。その力の源は、彼女の背を護るようにズタボロになりながらも戦い続けていた。

右目を喪いながらも一切鋭利さを失わぬ剣筋。ある時は死体の槍を投げ、剣を振るい、盾で殴りつけ、斧で叩ききる。獅子奮迅と言うに相応しい働きを見せるランスロット。

全身に返り血を浴びながら、ある時は落ちていた兜を蹴り飛ばし、剣をブーメランよろしく投げ飛ばし、槍で高飛びしてドロップキックを放つ腕白少女、モードレット。

何時ものノホホンとした雰囲気を一切見せず、剣に焰の魔術を付加して火焰と刃の暴風と化した正義の騎士、ガウエイン。

生前叶わなかった夢の共闘は、セイバーを奮起させるに留まらず、その勇猛さを伝播させた周囲の戦士達も甯猛な笑みを浮かべて迷うことなく魔神へと突撃していく。

その狂乱の中で、セイバーは再び聖剣を振りかざし、魔神に挑む。

『約束された——』

その輝きはこの場の全ての戦士の願い。

『——勝利の剣ツツツ!!』

我らに、勝利を。

空を駆ける飛竜の背で絶え間なく双槍を振るいつつ、ランサーはかつて無いほどの興奮を感じていた。主君の期待を背負い、一騎当千の強者と共に巨大な怪物と闘う。

まさしく誰もが夢想する騎士の姿。

生前手に入らなかつたそれは、間違い無く彼が切望したモノ。

この瞬間、確かにランサーの願いは叶ったのだ。

紅い旋風が魔神に突き立つ度に、魔神の身体がビクリと痙攣、その隙を突いて間髪入れずに黄の閃光を叩き込む。全魔力を動員してアンリマユの封じ込めに当たっている魔神からすれば、ランサーは不愉快極まりない事だろう。何しろ『破魔の紅薔薇』が魔力を一時的に遮断する影響で未だにアンリマユを封じられず、『必滅の黄薔薇』の与える傷は再生能力が効きにくい。魔神の身からすれば『再生不能』などという事にはならないが、傷の治りが遅いというのは実に不快に感じているに違いあるまい。

挙げ句の果てに、ランサーに対して攻撃しても結界のようなモノで威力が減衰されて反撃を受けるのだ。

ランサーの持つ双剣『大いなる激情―モラ・ルター』と『小さな怒り―ベガ・ルター』。その内の『小さな怒り』の常時発動効果は『敵の攻撃の三割を肩代わりする』というものだ。

つまり、100の威力を与えたい場合、142以上の威力を載せた攻撃でなければ、ランサーに期待していたダメージを通すことは出来ないのだ。さらに、双剣の運用法でいう「守りの剣」にあたるそれごとランサーを破壊するとなれば、先程から時折放たれている『約束された勝利の剣』クラスの攻撃を放たねばならないだろう。

そして、守りがあれば攻めもある。

『必滅の黄薔薇』を腰のホルダーに戻したランサーが抜きはなつたのは『大いなる激情』。

『小さな怒り』と対をなすその剣は、効果も同じく対となっている。『小さな怒り』で肩代わりした分の攻撃を纏めて斬撃の威力に上乘せするという効果は単純だが強力だ。

全ての武器を取り戻し、真の意味で現世に再臨した英雄デイルムツド・オデイナの右手が裂帛の気合いを以て繰り出される。

その瞬間。人の怒りが小さなストレスを元に爆発する様に、蓄えられた『小さな怒り』は『大いなる激情』と化して放たれた。『憤怒の一撃―モラ・ルター―ツツツ!!』

放たれた斬撃はスツパリと怪魔の頭から臍までを切り裂き、噴き出す青い血に下で戦う大軍勢が興奮の雄叫びをあげる。

ランサーは、その歓声に答えるように槍をクルリと回すと、再生を始めた怪魔へと再び急降下突撃を開始した。

鳴り響く雷鳴、回転する車輪。空を駆ける『神威の車輪』を駆るライダーは大爆笑していた。その原因は、彼の隣で情けない叫びをあげ、涙と鼻水まみれながらも魔神に向かって健気に初級の魔術を放つウェイバーに他ならない。

「ガツハツハ!! ウエイバーよ、情けない顔をしとる割には一人前の漢ではないか!! まつこと、余のマスターがお前で良かったぞ」

「グスツ……。情けない面で悪かったな」

「いやいや、泣こうが鼻を垂れようが糞を垂れようが、お前は今戦つてるんだ、誇つて良いぞ、ウェイバー」

「糞は垂れてないツツツ!!」

「……この状況でも突っ込めるあたり、マジで大物かもなあ、お前は……どうだ、余の臣下にならんか?」

先程から迫る怪魔の触手に突撃し、戦車の横に取り付けられたブレードで以て怪魔を切り裂いていたライダーのその台詞に、ウェイバーは一瞬だけ固まり、すぐに復活して魔術を再開する。

「バカ、僕がマスターでお前がサーヴァントだ。誰が臣下になんかな

るもんか」

そう言いきったウエイバーに、今度はライダーが固まる番だった。その隙をついて、ウエイバーは小さな追撃を加える。

「……………でもまあ、友達にならなってもやっても良いぞ。……………一緒にゲームもしたしな」

その言葉に、再起動したライダーはかつて無い大声で何々大笑した。その声に魔神を含む結界内の全員がチラりと空を仰ぎ見たと言え、どれほどの大声かが解っていただけだろうか。

「フハハハハハハハッ!!! よくぞ言ったな!! ウエイバー、いや、わが友よ!!」

ライダーの笑いに呼応するように、『神威の車輪』はより一層激しく雷鳴を纏い、より一層速度を増して疾走を開始する。その車上で、顔を拭ったウエイバーがライダーに叫んだ。

「おいライダー!? 突撃か?」

「然り!! やはり、ちまちま削るのは性に合はんのでな!!」

「……………全く、もう少し考えを巡らせろつての。高度を下げる!! 下の連中に被害がでないギリギリまで!!」

「む? 何か策でも有るのか?」

「一応な。僕の合図で急上昇しろ」

「相解った。……………行くぞ」

「ああ」

へっぽこちびなウエイバーと勇壮な巨漢である征服王。傍目から見れば到底釣り合いがとれない二人は、声の限りと咆哮する。

「Aaaaaa l l l l l l a l l l a l l l a l l l a l l l a l l l a l l l a l l l a l l a i e ! ! ! ! !」

疾走する稲妻の砲弾、その手すりに掴まりながら歯を食いしばって掴まりながら、ウエイバーはタイミングを計りつつ、その時を待つ。

「今だっ!!」

直進からの急上昇。その結果は、その場の全員が目を見開く光景だった。

魔神の鳩尾にアップercットの如くめり込んだ『神威の車輪』はグ



リグリと腹にめり込んだ後、背中側に貫通した。その際に、あろうことか、怪魔を『浮かせた』のだ。

いくら背中に羽が生えていようと、自我とは別に、それも攻撃によって浮いてしまったその隙を隠すことなど不可能。バランスを崩した巨体に、セイバーやアーチャーの容赦ない攻撃が放たれ、魔神はその肉体の九割を失った。それで殺せるほど魔神は甘くないとはいえ、魔力を削るという意味ではかなりの成果が得られたらしく、魔神の動きは僅かに悪くなってきた。

そんな中で、その時は来た。

「令呪四画を以て、間桐雁夜が命じる。バーサーカー、全力であの魔神をねじ伏せろ」

「了解だ、雁夜」

響く命令に、答える声。

次の瞬間、ズエピアは右手に構えた『黒い銃身』の引き金を引きつつ、魔神に突撃する。

二回、三回と次々放たれる銃弾は魔神の肉にめり込むとその真髄を発揮する。

エーテルの完全破壊。

その効力は例え神であろうと逃げられぬ必殺の一撃。その狙いは、魔神。

ではない。

魔神の中で蠢いていたアンリマユは、育ち過ぎたとは言え、サーヴァント。当然その体はエーテルで構成されていた。

サーヴァント、アンリマユの完全破壊。

第一目標であるその任務の達成を確認したズエピアは、続いて第二目標に移行する。

弾切れした『黒い銃身』をしまい込んだズエピアが次に放ったのは『エーテライト』。魔力で作られたワイヤーの様なそれが、ズエピア諸共魔神の全身を括り付ける。

仕込みは上々。

彼が仕込んだ仕掛けの真骨頂は、まさしく此処からだ。

その最後の仕上げを指示するべく、ズエピアは最高の役者に声をかける。

「頼んだよ、英雄王ギルガメッシュ」

「任せるが良い、我が道化よ」

不思議と通るその声を聞いたズエピアは最後にニヤリと笑うと。『固有結界を収縮させた』。

どんどん縮んでいく夜の砂漠。

セイバー達をスルリと通り抜けた闇の境界は、動きを完全に封じられてもがく魔神と微笑むズエピアのみを内に封じて漸く収縮を停止した。

「バーサーカー!?! 何をするのです!?!」

その笑みに言い様が無いほどに不安になったセイバーは『直感』の命じるまま、魔神とズエピアに向けて駆け出すが、どうしても『虚言の夜』に阻まれて近付けない。

それでもなお、魔神を縛り付けるズエピアへと伸ばそうとするその手を阻んだのはいつの間にか隣にやってきていた間桐雁夜だった。悲壮な表情で彼女の手を止める雁夜に、セイバーは疑問を口にせざるをえない。

「何故止めるのです、間桐雁夜!?! このままでは!!」

「セイバー、これは彼奴が建てた唯一勝てる作戦だ。手を出さないとやって欲しい」

「しかし、あの表情は、まるで……」

——死ぬ覚悟を決めた様な顔ではないか。

そう続けようとするセイバーの背後で、カシヤリと『鍵の開く音』がする。

その直後に抜き放たれたそれは、セイバーの言葉を喪わせるに充分だった。時空を切り裂く風に覆われた螺旋の剣。

剣という概念すら無かった時代に生まれたそれは、世界を切り裂いた究極の宝具。

それを振りかざすギルガメツシュが纏っているのは、トーガの様な拵えの、彼からすれば異常に『質素』な服。エルキドウが変化した姿であるそれは、古代ウルクで彼が着ていた物とそっくり同じものだ。髪を下ろし、トーガをはためかせるその姿は、人類が夢想する神の姿に他ならない。

その神は、クルリとその宝具、『乖離剣エア』の切っ先を下に向けると、彼の臣下へと恩賞を賜わせた。

「ズエピア・エルトナム・オベローンよ、貴様の墓標はこの王が突き立てる剣とすることが良い」

その宣言と共に放たれた一撃は正確に砂漠を穿ち、一瞬にして『世界』を崩壊させていく。

割れる大地、陥没する空。圧倒的大破壊を伴って崩れていく『王の軍勢』の中で、『虚言の夜』だけが維持されている。

その中で微笑み続けるズエピアに雁夜が泣きそうな顔で笑いかけると同時に、景色は歪み、視界には荒廃した冬木の街だけが広がる。

ギルガメツシュを除いた全ての人員が呆然とするその中で、雁夜はいつの間にか握っていた『黒い銃身』を抱えて、声もなく泣いていた。

「ラニⅡⅣ、留守を頼むよ?」

「はい、マスター雁夜、桜。道中お気をつけて」

「行つて来ます、ラニちゃん」

「行つてらっしゃい、桜」

一年がかりのリフォームを漸く終え、小綺麗になった間桐邸の玄関で他愛ない会話が交わされる。

その会話を背に夜の冬木へと歩き出した雁夜の姿は着流しに羽織り。そんな雁夜に手を引かれている桜は、ほんのちよっぴりおめかしした姿で雁夜の後をついて行く。

坂を下り、四辻を曲がり、たどり着いたのは木造平屋の日本家屋。

その表札には『衛宮切嗣』、『衛宮愛理』、『衛宮伊里夜』、そして『衛宮士郎』の文字が刻まれている。

その門の内側から響く喧騒に、「近所迷惑にならないのだろうか」と少しだけ心配しつつ、雁夜はインターホンを押した。

鳴り響く機械音。その音に「はい、今開けます」と言いながら玄関の戸を開いたのは金髪緑眼の小柄な女性。

セイバーとして現界した彼女は現在、衛宮家にホームステイしている留学生として現代での居場所を得ている。

「ああ、久しいですね、間桐雁夜」

「うん。久しぶりだな、セイ……じゃなかった、ペンドラゴンさん。今日は桜ちゃんも連れて来たんだ」

「アルトリアさん、こんばんは」

「こんばんは、桜。……む、また背が伸びましたか?」

「2センチのびたよ」

他愛もない会話、平穏なそれを交わしつつ、セイバーに連れられて入った玄関は、既に大量の靴で埋め尽くされていた。

「もう、みんな来てるんだな」

「ええ。彼らは気が早いですから」

そう言つて苦笑いするセイバーの後に続いて草履を脱ぎ、桜と共に

奥の座敷、衛宮家のリビングへと足を踏み入れる。其処には懐かしい面子が雁首を揃えて座っていた。

「やあ、いらつしやい。間桐雁夜」

「お邪魔してるよ、衛宮切嗣。……ああ、アイリスフィールさんも」「いらつしやい、間桐さん」

取り敢えず家主と挨拶をする雁夜の脇に桜は既に居ない。

ならば何処に消えたかと言えば。

「桜、元気だった?」

「うん、げんき。……お姉ちゃんは?」

「あたしはみての通り元気よ!」

「お姉ちゃん……? 遠坂が桜の? イリヤ姉、何か知ってる?」

「察しなさい士郎。勘で!!」

「……知らないんだな」

と、まあ、子供は子供の付き合いがあるのだ。ちなみに、最近桜がやたらに「衛宮士郎」について語るので雁夜としては嬉しいやら悲しいやら複雑な気分である。

そんな雁夜に声をかける漢が一人。

「ガツハツハ、娘を持つ父親は辛いな」

「ちよ、余計なこと言うなよこのバカ」

「……相変わらずだなあ。日本には何時来たんだ、ウェイバー君とイスカ……今はアレクセイだったか」

「昨日の昼だよ。お爺さん達に顔見せもしたかったし」

「ああ、グレンさんとマーサさんか」

「おいウェイバー、余と共に『日本橋』に行くという目的もあつただろうに」

「だからさ。余計なこと言うなよ、バカたれ」

「む、バカはともかくバカたれとは何だ」

「お前みたいな垂れ流しのバカの事だよ、バカ」

相変わらず漫才を披露しているその姿に、思わず笑ってしまう雁夜。

それに釣られたのか、その場にいる皆が笑い出す。

切嗣、アイリスフィール、舞弥、ケイネス、ソラウ、時臣、葵、綺礼、そして、ポニー、ギルガメッシュ、エルキドゥ、デイルムツド、アルトリア。

笑い合う彼らは、確かに第四次を戦い抜いたマスターと、そのサーヴァント達。

彼らが何故この場を集っているかを説明するには、二年前、冬木で発生した第四次聖杯戦争の顛末を語ることから始めねばならない。

バーサーカー脱落の後、停止した聖杯は預託令呪をくべる事でどうにか再び駆動したものの、大きな問題を抱えていた。

即ち、魔力不足と聖杯の『リセット』である。

魔力不足については仕方があるまい。だがあるうことか、再起動した聖杯はサーヴァントとアイリスフィールを認識していなかったのである。

つまり、サーヴァントとそのマスター達は戦う意味を完全に失った。戦い合っても聖杯が降臨しないのでは意味がないからである。

其処からの動きはまあ早かった。

聖杯からのバックアップを受けられないサーヴァント達を前に、ギルガメッシュが『聖杯競争』の開始を宣言。彼の持つ『黄金聖杯』のバックアップを『ギルガメッシュに勝ったもの』に与えると宣言したのだ。

どんな方法でも勝てば良い、挑戦回数無制限というそれに飛び付いたサーヴァント達のなりふりかまわぬ挑戦は結局全員がクリアし今に至るわけだが、その過程は充分にギルガメッシュを楽しませたらし、気前よくバックアップを与えたのだ。

ちなみに、セイバーが『宝具無しのカチンコ大食い勝負』、ランサーが『宝具無し、スキル無しでホストクラブに一日勤め、どちらが売上を上げられるか』、アサシンが『チキチキ冬木全域缶蹴りバトル（遠隔攻撃禁止）』、ライダーが『アドミラブル大戦略Ⅳ〜難易度ルナティツ

ク」で挑戦し、見事に勝ちを拾っている。

で、安定したサーヴァント達は己のマスターと共に、新たな生活を始めた訳である。

セイバーは、切嗣、舞弥、そして元々黄金聖杯のバックアップを受けていた騎士トリオと共に『正義の味方』として魔神の被害を受けた冬木周辺の都市を駆けずり回り、事態を収束。その際拾った孤児の士郎君を引き取った後、今度はドイツに飛んでアインツベルンの城へと突撃。イリヤスフィールを奪還して冬木へと舞い戻った。

以降は二年間、北に戦争の火種あれば行つて鎮火し、南に死徒の事件あれば行つて浄化し、西に誘拐事件あれば世界中飛び回つて救出し、東に弾圧あれば行つて革命するという雨にも風にも負けない戦いを繰り返している。

ランサーとライダーはそれぞれのマスターと共に時計塔へ凱旋した。というのも、『アルティメット・ワン』の討伐は充分に偉大な功績だからである。これによりその地位を不動にしたケイネスはウェイバーを『窃盗を帳消しにする』代わりに助手として登用。その薫陶を受けたウェイバーは、今では『ロード・ベルベット』として時計塔で講師を勤めるまでに成長している。と、いうのも、助手の仕事によつて彼の『教師の才能』がケイネスに見出され、魔術師としては三流だが教育者としては超一流だと認められたためである。

ランサーはそんなケイネスの秘書兼ボディガードを勤め、ライダーはウェイバーを連れ回してみたり剣の手解きをしたりと悠々自適に生きている。

余談だが、その影響でウェイバーは魔術師には無駄な剣術、馬術、槍術などを無駄に詰め込まれ、その上で国内の競技大会で連戦連勝。英国から『騎士』として認められている。そのせいか、漸く隣に並べても浮かなくなつたとは、ライダーの談である。

アサシンは各々冬木でバイトしたり、何だりと自由に動き回っている。その中でもポニーは綺礼とギルガメッシュの愉悦コンビに勝手に

にとある『音楽ユニット』のオーディションに応募され、それが当選。テンパリながらも何とかシタールを引いて誤魔化す毎日である。

で、そのギルガメッシュとは言えば、遠坂家でプーさんをしている。とは言え、パチンコに行けば出禁になり、競馬に行けば大穴当選、株で遊べば利益がヤバイという『役に立つプーさん』なせいで、いつの間にか遠坂家が億万長者になっていた。

ちなみにエルキドゥはそんなギルとは好対照で、家事手伝いをしてはギルに手料理を食べさせ、服を洗濯し、靴を磨くという良妻っぷりを発揮している。

そんな彼らが二年後の今、衛宮家に集った理由は唯一つ。彼らの帰国記念パーティーの為である。

「「ポニーイイイ……裏切ったなあ……」」  
「ヒイイイッ!」

やたら情念の籠もった恨みの声と共に縁側から入ってきたのは先程まで空港でレポーターに対応していたエリザベートとヴラド。

そして、ズエピア、エルトナム・オベローンである。

エリザベートの望み通り音楽グループとなった彼等は、此処半年、ワールドツアーをしていた。そこから帰国して来た冬木空港で、先程まで拘束されていたのだった。

ちなみにポニーへの怨念は、彼女が『気配遮断』で逃げ出したのが原因である。

さて、では、最後にどうしてこの場にズエピアが居るのかを説明させて貰おうとしよう。



二年前、自らと共に魔神を隔離したズエピア。死んだかと思われた彼は、半年後にひよつこりと帰ってきたのだ。それも飛行機で。

と、いうのも、あの子のズエピアの行動が原因である。

ギルガメッシュにより虚空へと放たれた『虚言の夜』は世界の隙間に入った後、再び膨張。そして、ズエピアはその内部にある『吸血鬼』を呼び出した。

ORT。死徒二十七祖の中でも上位を占めるその『吸血鬼』はクトゥルフに躍り掛かると実に美味そうにその肉をかじり始めた。それをみたズエピアは勝ちを確信し、『水晶に変えられる』前にその場から脱出。

その際、雁夜に預けた『黒い銃身』を道標に帰還したのだが、雁夜によってアトラス院へと送り返されていた『黒い銃身』のせいでズエピアはエジプトに出現。其処からどうにかこうにか冬木に帰ってきた頃には、既に半年後だったのだ。

「おお、お帰り、ズエピア」

「ただいま、雁夜。桜君も大きくなって居るではないか」

「お帰り、ズエピア先生」

帰還報告を済ませ、席に着くズエピア。それを確認した雁夜が咳払いと共に立ち上がり、缶ビールを掲げる。

「えー、なんだ、幹事の間桐です。……前衛ロックバンド『ナイト・オブ・ワラキア』の帰国と、聖杯競争から二年たったことを祝しまして、今から宴会を始めたいと思います。……それでは皆さんご一緒に」

「乾杯ッ!!」

宴の夜は続き、英雄と魔術師が入り混じって笑い合う。

当然ながら、彼らの物語はまだ終わらない。翌日には二日酔いに苦しんだりなんざりと平穩な日常が続くのだろう。

だが、この話はひとまず此処で幕といかせていただこう。喜劇はやはり、ハッピーエンドが望ましい。

ならばこそ幕引きは宴会の中で。

「——カット。実に良い舞台だったよ」

「どうした？ ズエピア？」

「何、気にすることはない。酔っ払いの世迷いごとだよ。……ねえ、観客諸君？」

Fin